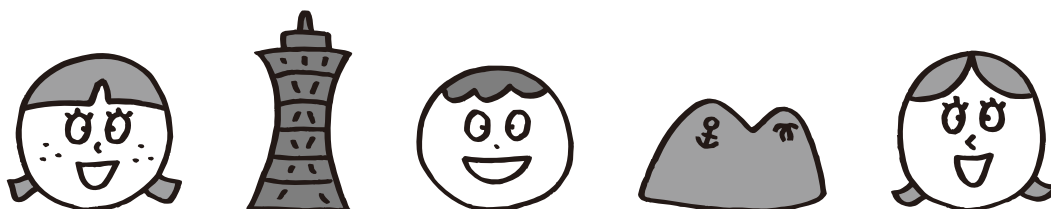


CONTENTS

○あいさつ	2
兵庫県NIE推進協議会	会長 竹内 弘明
日本新聞協会	会長 中村 史郎
兵庫県教育委員会	教育長 藤原 俊平
神戸市教育委員会	教育長 福本 靖
神戸新聞社	代表取締役社長 梶岡 修一
○大会プログラム	5
○公開授業・実践発表者一覧	6
○全体会	8
演奏 佐渡裕氏（指揮者、兵庫県立芸術文化センター芸術監督）とスーパーキッズ・オーケストラ	8
記念講演「言葉は人をつなぐ」 小川洋子氏（芥川賞作家）	9
基調提案	10
パネル討議	12
司 会	
池上彰氏（ジャーナリスト、名城大学教授、元NHK記者主幹）	
パネリスト	
古田大輔氏（ジャーナリスト、日本ファクトチェックセンター編集長、元朝日新聞記者）	
阪本真由美氏（兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科教授）	
渋谷仁崇氏（西宮市立浜脇中学校主幹教諭、日本新聞協会NIEアドバイザー）	
長沼隆之氏（神戸新聞社論説副委員長）	
○分科会資料集	
第1部 公開授業	15
実践発表	21
第2部 公開授業	54
実践発表	60
特別分科会	93
ワークショップ	97
新聞アート展示	99
ポスター発表	100
○関係者名簿・公式ロゴマーク説明	109
○会場案内図	110





兵庫県NIE推進協議会

会長 竹内 弘明

NIE活動に自信と誇りを

第30回NIE全国大会を神戸の地で開催できますことを大変うれしく思いますとともに、ご来場くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

今大会のスローガンは「時代を読み解き、いのちを守るNIE」です。

今年は阪神・淡路大震災から30年、戦後80年、インターネットが本格的に産声を上げて30年にあたります。

地震などの自然災害が相次ぐ中、大震災の教訓を語り継ぎ次代につなぐこと、ウクライナや中東の戦火が今なお続く中、平和の尊さを伝えること、情報過多の時代、正確な情報を収集することの大切さを伝えることなど、デジタルネイティブ世代の子どもたちがこれからの先行き不透明な時代をたくましく生き抜いていく力、その力を育むために新聞ができることは何かを考えます。

昨今、情報メディアは交流サイト（SNS）が台頭し、新聞やテレビ、ラジオなどはオールメディアと称されたりもしています。しかしながらニューメディアと言われるSNSは偽・誤情報やフィルターバブル、エコーチェンバーなど、課題が多く、SNSを通じて拡散された真偽不明の情報が社会に深刻な影響を及ぼし、情報が人命を脅かす時代になっています。

片や新聞は報道倫理に基づき、入念にファクトチェックをし、ニュースとしての価値判

断をしたうえで記事になります。紙媒体として手元に記事が残る新聞はミスが許されませんから、文章を推敲（すいこう）し、何人もの目を経て世に出ます。

新聞を広げるといろいろな記事が目飛び込んできます。新聞を読むことでさまざまな正しい情報に触れ、物事を正しく理解し判断する力が身につく、時代を正しく読み解く力が育つのです。

さまざまな情報があふれる現代社会、情報を正しく収集することができなければ、真偽不明の情報に翻弄され、民主主義は脅かされ、命の危険さえもあるのです。

デジタル社会の中で子どもたちが正しいメディアリテラシーを身につけ、確かな情報を基に探究を深め、混迷の時代の諸課題を解決していく力、また、人工知能（AI）に支配されず自分で考え、判断し行動する力、そしてたくましく生き抜く力、そんな力を育てていくために、新聞は大きな力を持っています。

NIEがこれまで地道に取り組んで来たことがSNSに翻弄されることのないよう、今こそ私たちはNIEの力を再認識するとともに、NIE活動を誇りに思い、そして自信を持ち、胸を張ってNIE活動を推進していきたいと考えています。

結びに、本大会の開催にあたりご尽力いただきました関係者の皆さまに心よりお礼申し上げます。あいさつといたします。



日本新聞協会
会長 **中村 史郎**

情報に向き合う力、 NIEで育てよう

第30回NIE全国大会神戸大会にご参加いただき、誠にありがとうございます。NIEは1985年の新聞大会で提唱されて以来、実践されている先生方をはじめ多くの教育関係者の皆様のご支援とご理解により、着実に裾野を広げてきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

本年は、阪神・淡路大震災の発災から30年、また戦後80年という大きな節目の年にあたります。大会スローガンは「時代を読み解き、いのちを守るNIE」です。

新聞は正確なニュースを人々に伝えるとともに、時代を記録する役割があります。かつて神戸は未曾有の震災に見舞われました。街の復興は大変喜ばしいですが、危惧されるのは震災の記憶の風化です。被災の経験と教訓を記録に留め、語り継ぐことは、新たな災害に備えるためにも必要です。新聞は記録の活用や新たな事実の掘り起こしを続けており、防災教育の観点からも欠かせません。

災害時に正しい情報を見極める力も重要です。東日本大震災や能登半島沖地震でもSNSで真偽不明な情報が拡散されました。NIEを通じ、飛び交う偽・誤情報に惑わされることのない冷静な判断力を養っていただきたいと思えます。

昨今の選挙では、SNSで拡散された情報が有権者の投票行動に影響を与えています。事実ではない情報も多数含まれ、民主主義の機能不全が懸念されます。世界では今も戦争や紛争が絶えず、フェイクニュースが分断や対立を助長しています。正確で公正な情報を伝えることを責務とする新聞をもとに学ぶNIEの役割が、今日ますます大きくなっています。

神戸の地で、あらためて「命」と「記憶」、そして「伝える」ことの重みを考えましょう。大会が次代を担う子どもたちにとって意義のある学びの一助となることを願っています。

大会開催にあたり、主管社である神戸新聞社、兵庫県NIE推進協議会をはじめ、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会など多くの関係者の皆様のご尽力に対し、主催者を代表して心より感謝申し上げます。



兵庫県教育委員会
教育長 **藤原 俊平**

震災の教訓をともに未来に繋ぐ NIE教育

第30回NIE全国大会神戸大会が盛大に開催されますことをお祝い申し上げます。また、「時代を読み解き、いのちを守るNIE」のスローガンのもと、全国から兵庫県にお越しいただきました皆様の心から歓迎いたします。

今年、兵庫県は阪神・淡路大震災から30年目を迎えました。震災以降、本県では教育の分野においても創造的復興をめざし、兵庫型「体験教育」等の展開による「思いやりの心」「ふるさとを愛し誇りを持つ心」の醸成、震災の経験と教訓を活かした「共生の心」「生きる力」を育む「兵庫の防災教育」を推進してきました。この節目の年を迎えるにあたり、これまでの「忘れない」「伝える」「活かす」「備える」に「繋（つな）ぐ」を新たに加えた基本コンセプトのもと、次世代に震災の記憶を継承する取り組みを推進するとともに、今後想定される巨大災害に備えるための「阪神・淡路大震災30年記念事業」に取り組んでおり、本大会もこの記念事業の一環としています。

本大会では、「情報でいのちを守る」をテーマにしたパネル討議や記念講演、県内の小学校・中学校・高等学校による公開授業、実践発表等、多彩なプログラムが実施されます。私たちは、さまざまに変化する社会情勢の中にあっても、不易としての教育を堅持しながら、未来を担う人材の育成という使命に応える努力を積み重ねていかなければなりません。ご参加される皆様にとって本大会の学びが充実したものとなり、震災の教訓が未来に繋がっていくことを心より願っています。

最後になりましたが神戸大会開催に向けた関係者の皆様のご尽力に厚く感謝申し上げます。今後とも、学校、家庭、地域、教育行政、新聞社が連携を深め、NIE教育の活動がますます発展することを祈念して、あいさつとします。



神戸市教育委員会
教育長 **福本 靖**

未来をつくり いのちを守る NIE

30回の節目となるNIE全国大会が神戸で開催されるにあたり、全国各地からお集まりいただきました皆様を、心より歓迎し、感謝申し上げます。

奇しくも本年1月17日に阪神・淡路大震災から30年の節目を迎えた本市では、震災の記憶や学びを継承していくため、「ともしびプロジェクト」と題して、大学や民間企業、地域等と連携しながら、防災について児童生徒が主体的に学び取り組みを展開しました。震災のことを知るだけでなく、防災・減災を自分事と捉え、次の世代につないでいくにはどうすればよいか、子供たちが自分で考え実践しました。

防災・減災に限らず、子供たちの多様な学びを実現するには、保護者や地域の皆さんと連携し、それぞれが多様な経験やスキルを持ち寄り、地域全体で子供たちの学びや成長を支えることが必要です。そのために全ての小中学校に設置されている学校運営協議会等を通じて、関係する大人が連携し、「こどもまんなか社会」の実現に向けて取り組んでいるところです。

一方、昨年末より次期学習指導要領についての議論が始まり、特に情報活用能力については、生成AIなどのデジタル技術が大きく発展している現代社会において、情報モラルやメディア・リテラシーの育成強化が重要視されています。先行きが不透明で予測困難な社会を生きていく子供たちが、社会の現状を知り、他者と協働しながら社会に参画することは、まさに、本市教育ビジョン「自他を大切に 自ら考え 未来をつくる」や、本大会スローガン「時代を読み解き、いのちを守るNIE」と重なるものと考えます。本大会を通じ、県内各校の優れた実践の成果を共有し、NIEの意義について探究することによって、全国の子供たちの情報活用能力の向上に寄与することを願っています。

結びにあたりまして、本大会の開催に向けた日本新聞協会、兵庫県NIE推進協議会をはじめとした関係者の皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。あいつつといたします。



神戸新聞社
代表取締役社長 **梶岡 修一**

重要性が増し、 進化も問われるNIE

今まさに、NIEの重要性が増しています。時代状況を受け、NIE自体の進化が問われてもいます。いろいろな大きな節目に際し、神戸で開催される全国大会が意義深い場となるよう、主管社として力を尽くす覚悟です。

阪神・淡路大震災から今年で30年となりました。国内外の皆さまから多大なご支援をいただき、復興への道を歩み続け、ようやくここまでたどり着いたところです。教訓や記憶の継承が難しくなる「30年限界説」もありますが、6434人の犠牲者を忘れず「命の大切さ」「生きるということ」を次代に伝える使命を感じています。

自然災害はなくなりません。新聞記者は被災現場を歩き、ご遺族の思いに接し、防災減災の最前線も取材して、教科書にはない知識を展開しています。学校教育で有効な素材が満載です。世界では戦禍が絶えませんが、平和を考える意味でも戦後80年を迎えた中、多くの記事に子どもたちが触れることを望みます。

新聞社は、国内隅々に訓練された記者を配置し、長年のノウハウを持ち、裏付けやチェックを重ねた事実のみを報じています。単なる伝聞や真偽不明の情報、誹謗中傷などは載りません。SNSは便利ではありますが、偏った価値観や判断ミスにつながる重大なリスクが潜んでいます。何より、人命を奪う事態が起きていることは看過できません。

一刻も早くメディアリテラシー、あるいはニュースリテラシーを高める必要があります。NIEをバージョンアップさせながら、健全な民主主義社会を守りたいと考えます。紙であってもデジタルであっても、新聞が良質な教材となるのは間違いありません。神戸での2日間に関係者で議論を活発化し、ぜひ、未来を彩る子どもたちに、新聞を届け続けていきたいと思います。

1日目

7月31日(木) 全体会

会場 神戸ポートピアホテル ポートピアホール

- 12:00 受付開始
- 13:00 開会式
佐渡裕氏(指揮者、兵庫県立芸術文化センター芸術監督)とスーパーキッズ・オーケストラによる演奏
- 13:30 主催者、来賓あいさつ
- 13:50 記念講演「言葉は人をつなぐ」
小川洋子氏(芥川賞作家)
- 15:00 基調提案
竹内弘明 大会実行委員長
- 15:10 パネル討議
テーマ:「情報で、いのちを守る」
司会
池上彰氏(ジャーナリスト、名城大学教授、元NHK記者主幹)
パネリスト
古田大輔氏(ジャーナリスト、日本ファクトチェックセンター編集長、元朝日新聞記者)
阪本真由美氏(兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科教授)
渋谷仁崇氏(西宮市立浜脇中学校主幹教諭、日本新聞協会NIEアドバイザー)
長沼隆之氏(神戸新聞社論説副委員長)
- 16:40 次回開催地主管社(中国新聞社)あいさつ
- 17:00 交流会
(ティーパーティー形式、冒頭に古田大輔氏ミニトークコーナー)
- 18:15 交流会終了

2日目

8月1日(金) 分科会

会場 甲南大学 岡本キャンパス

- 8:00 開場
- 9:00 分科会 第1部 (90分)
- 11:00 分科会 第2部 (90分)
- 12:30 分科会終了

※閉会式は、ありません

※大会終了後、全国NIEアドバイザー会議を開催

第1部

A P.15	小学校 公開授業	「シンプリオバトル」で主体的な学びを ～「推し記事」を紹介し合う～ 【5号館カフェパンセ】	甲南小学校 授業者：田代弘子 講師(司書) 宮尾友季子 教諭
B P.18	中学校 公開授業	「NIEノート」を通して、主権者としてのまちづくり ～住み続けられるまちづくりを目指して 企業と地域との連携～ 【1号館121教室】	西宮市立浜脇中学校 授業者：渋谷仁崇 主幹教諭 野上耕佑 教諭
C P.21	小学校 実践発表	新聞を通して学ぶ ～インタビューと文章の記述～ 【1号館122教室】	神戸市立鶴甲小学校 発表者：藤岡敦洋 教諭
D P.24	小・中学校 実践発表	小中一貫として取り組む 地域を発信するNIE教育 ～「国生みの島」から～ 【1号館131教室】	南あわじ市立沼島小中学校 発表者：森彩夏 教諭
E P.27	小・中学校 実践発表	中学3年生と小学6年生が伝え合う原爆と平和 【1号館141教室】	愛徳学園小中学校 発表者： 廣畑彰久 中・高校教諭 彦野周子 小学校教諭
F P.30	小・中学校 実践発表	「？」を「！」に 新聞から始まる継続型探究学習 ～姫路の魅力発見！ 未来への夢プラン～ 【1号館133教室】	姫路市立豊富小中学校 (後期課程) 発表者： 川村かおり 教諭(前期課程) 古寺和子 教諭(後期課程)
G P.33	中学校 実践発表	すべての学校に新聞データベースを！ ～環境整備は大人の責務～ 【8号館824教室】	灘中学校 発表者：池田拓也 教諭 狩野ゆき 司書教諭
H P.36	高校 実践発表	社会への関心を育み地域や児童と共に学びあう防災教育 【3号館347教室】	兵庫県立須磨友が丘高校 発表者：岩本和也 教諭
I P.39	特別支援学校 実践発表	新聞を活用して見る・聞く・知る・伝える力を身につけ、 社会とつながる 特別支援学校からの報告 【3号館357教室】	兵庫県立のじぎく特別支援学校 発表者：藤本友美 現・上野ヶ原特別支援学校 教頭 さくら訪問学級担当
J P.42	高校 実践発表	社説読み比べ ～情報の比較・検討のための新聞活用～ 【8号館821教室】	兵庫県立有馬高校 発表者：森澤亮介 教諭
K P.45	高校 実践発表	NIE活動を土台とした地域活性化への取り組み ～子育て支援やSDGsなど地域課題を考える～ 【8号館812教室】	兵庫県立播磨南高校 発表者：矢野聖人 臨時講師
L P.48	高校 実践発表	定時制高校でのNIE活動 ～気になる記事を紹介し合い、授業で活用～ 【8号館822教室】	兵庫県立湊川高校 発表者：住本拓自 教諭
M P.51	高校 実践発表	多文化共生への橋がけ ～新聞記事の「やさしい日本語」書き換えを通して～ 【8号館823教室】	兵庫県立伊川谷高校 発表者：福田浩三 主幹教諭

第2部

N P.54	小学校 公開授業	新聞で開くメディアリテラシー ～全国の子ども新聞から迫る、情報の向こう側～ 【1号館132教室】	姫路市立豊富小中学校(前期課程) 授業者：前野翔大 教諭 発表者：上田勇紀 神戸新聞社報道部記者
O P.57	高校 公開授業	新聞に“ツッコミ”を! ～デジタル世代の「読む・問う・つなぐ」力～ 【8号館811教室】	兵庫県立北神戸総合高校 授業者：久保淳平 教諭
P P.60	小学校 実践発表	新聞4コママンガで「起承転結」を考える ～絵とセリフで読み取る力をつける～ 【1号館122教室】	明石市立大久保小学校 発表者：若生佳久 教諭
Q P.63	小学校 実践発表	新聞づくりアプリ「ことまど」を使った養父市の産業紹介 【1号館131教室】	養父市立宿南小学校 発表者：福井克宏 主幹教諭
R P.66	中学校 実践発表	アイデアミーティングで住み続けられるまちづくりをデザインしよう ～SDGs学習、ジュニアEXPOを通して地域産学との連携～ 【1号館121教室】	西宮市立浜脇中学校 発表者：渋谷仁崇 主幹教諭 野上耕佑 教諭
S P.69	中学校 実践発表	夜間中学校でのNIE ～新聞記事から生活につながる学びを～ 【1号館133教室】	姫路市立あかつき中学校 発表者：伊達実 教諭 藤原裕佳 主幹教諭
T P.72	中学校 実践発表	NIE俳句 ～記事の写真から豊かにイメージしよう～ 【3号館324教室】	姫路市立飾磨中部中学校 発表者：佐伯奈津子 教諭
U P.75	中・高校 実践発表	ICTで拓くNIEの新たな地平 ～情報の信頼性を確保するために～ 【1号館141教室】	愛徳学園中・高校 発表者： 廣畑彰久 教諭 米田俊彦 教諭 武藤邦生 神戸新聞社教育ICT部次長
V P.78	中・高校 実践発表	NIE活動を通じた多角的考察と探究的学習の推進 ～新聞の効用伝える「新聞トーク」、ライターとしての新聞作り～ 【8号館823教室】	甲南高・中学校 発表者：足立恵英 副校長 敷上遼介 教諭
W P.81	高校 実践発表	地域に根差した小高連携NIE実践 ～地域防災と防災ツーリズム～ 【8号館822教室】	兵庫県立網干高校 発表者：佐々木浩二 教諭
X P.84	高校 実践発表	地域住民とつながり生徒の世界を広げるNIE ～文化祭で高齢者と時事問題を議論～ 【8号館821教室】	兵庫県立洲本高校 発表者：大石昇平 教諭
Y P.87	高校 実践発表	新聞ポスター作成 ～社会問題について考える～ 【3号館347教室】	兵庫県立西宮高校 発表者：三木美穂 教諭
Z P.90	高校 実践発表	「神高探究I」における新聞の活用 ～ジェンダー、東アジア、人権問題～ 【3号館337教室】	兵庫県立神戸高校 発表者：松井洋平 教諭
特 P.93	特別分科会	大学生・社会人とNIE ～「情報の風景」「関心の領域」の現場から～ 【8号館813教室】	兵庫教育大学×流通科学大学×神戸市職員研修所 発表者： 福田喜彦 兵庫教育大学大学院教授 竹内信行 流通科学大学経済学部准教授 中川尚子 神戸市行財政局職員研修所副所長 勝沼直子 神戸新聞社執行役員論説委員長
ワ P.97	ワークショップ	「防災はがき新聞」を作ろう! ～いのちを守る「備え」の種まき～ 【5号館カフェパンセ】	講師：日本新聞協会 関口修司 NIEコーディネーター 協力：公益財団法人理想教育財団



佐渡裕氏（指揮者、兵庫県立芸術文化センター芸術監督）と スーパーキッズ・オーケストラ

兵庫県立芸術文化センターは2005年10月、阪神・淡路大震災からの「心の復興・文化の復興」を掲げて、被害の大きかった西宮市の阪急電鉄・西宮北口駅近くに創設された。世界的な指揮者の佐渡裕氏は開館の3年前から芸術監督を務めている。

今年、開館20年を迎える同センターは、佐渡芸術監督プロデュースオペラや、専属オーケストラ「兵庫芸術文化センター管弦楽団」の定期演奏会など、年間で約750公演（2023年度）を開催。国内屈指の劇場に育った。

「心の復興のシンボル、みんなの心の広場を目指してきた。これからも多くの人をつないでいきたい」と佐渡芸術監督。

スーパーキッズ・オーケストラ（SKO）は、

同センターのソフト先行事業として、開館の2年前から活動をスタートした。佐渡芸術監督らが指揮・指導し、合同練習や夏合宿、定期公演などに取り組んでいる。

2011年の東日本大震災では、被災地を訪れ、鎮魂と心の復興のため、演奏を披露。以来、コロナ禍の2020年を除き毎年、東北を訪問してきた。熊本地震後の現地での演奏活動のほか、ベトナムなど海外でも公演している。

佐渡芸術監督は「スーパーキッズのメンバーは、被災地への訪問活動で音楽を通して何ができるか考えてきた。そうした活動によって、SKOにしか出せない特別な音楽が奏でられるようになった。そんな音色を楽しんでほしい」としている。



佐渡裕氏

指揮者、兵庫県立芸術文化センター芸術監督

さど・ゆたか 1961年京都市生まれ。京都市立芸術大学卒業。レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。89年プザンソン指揮者コンクール優勝。兵庫県立芸術文化センター芸術監督、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、サントリー1万人の第九総監督などを務める。芦屋市在住。

スーパーキッズ・オーケストラ

2003年より活動開始。全国の小学生から高校生までの弦楽器奏者をオーディションにより選抜し、世界的指揮者、佐渡裕氏の指揮・指導により多様な活動を展開。兵庫県立芸術文化センターでのコンサートのほか、東北や熊本の被災地で心の復興を願う演奏会を実施するなど、クオリティーの高い演奏で全国より注目を集める。



いずれも©飯島隆

講師



小川洋子氏

芥川賞作家

おがわ・ようこ 1962年岡山市生まれ。早稲田大学卒。「妊娠カレンダー」で芥川賞、「博士の愛した数式」で本屋大賞など、多くの賞を受けた。「密やかな結晶」が、英国のブッカー賞で翻訳書部門の最終候補になるなど、海外での評価も高い。芥川賞選考委員。大の阪神タイガースファンで甲子園球場にも足を運ぶ。西宮市在住。

新聞は毎朝読んでいます。読むことは、会ったこともない人、これから会うこともない人、もしかしたら死んでいる人にも思いをはせる時間になる。言葉によって自分とみず知らずの誰かがつながる。あるいは、同じ一つの記事で友達と会話を交わす。それもつながることです。

大会スローガンの「いのちを守る」とは、自分の命だけでなく、いろいろな人の命だと思う。他者に対する想像力を養って、自分とあの人は同じ命を持っていると思いをはせる。同じ重さの命があると想像できれば、安易に他者を攻撃することなどできないはずだ。

しかし人間は時に愚かな感情に流されるところがある。自分もそういう愚かな人間の一人だと、ある種の謙虚さを持たなければいけないと思う。油断していると間違っただ道を行くかもしれない、虐げられた人を踏みつけるかもしれない。

文学でも新聞でもいい。言葉の世界に入っていくと、そこに登場する他者に対する想像力を巡らせる。その世界に深く身を沈めていくと、自分と他者、他者と他者がつながっているのだと想像できる。共感できないことがあっても存在は許す、全否定しないというのも一種のつながりだと思う。

小説は読んでいるときに、自分の中の池、一人の世界に降りていく。新聞は、読めば読むほど世界を広く見回したくなる。自分の中の池と外という考える方向が違って、小説と新聞はつながっている。

文学や新聞を読んで、いろいろな生き方をしている人に出会うことで、他者を知ることで、他者の命を慈しむ。限りある命を一人一つずつ、みんなが平等に与えられている。その当然の真理に気付くことは結構大事だと思います。(談)

1 時代を読み解く NIE

第30回NIE全国大会神戸大会は、阪神・淡路大震災から30年、戦後80年の節目に開催される。神戸で開かれるのは2001年以来24年ぶりで、30回目の全国大会となる。

世界では、ロシアによるウクライナ侵攻、中東の戦闘など戦禍が続き、地球温暖化による気候変動が各地で深刻な影響を及ぼしている。日本は、急速な少子高齢化、物価高、貧困問題など多くの課題に直面する。

これからの不透明な時代を児童生徒が生き抜く力を育むため、NIE活動によってできることは何か、大会を通し改めて考えたい。

新聞は、記者が現場を取材して記事を書き、複数の人の目による厳しいチェックを経て、正確で公正な情報を届ける。徹底した裏付け取材を行い、見解が分かれる出来事には、賛否両論を記す。「正確と公正」「人権の尊重」「品格と節度」など、日本新聞協会の新聞倫理綱領に基づき、報道は行われている。

真偽不確かな情報があふれる今だからこそ、正確で公正な新聞を読むことや、NIE活動によって、不透明な時代を読み解く力を育てることができるのではないだろうか。

2 情報で、いのちを守る

2024年の兵庫県知事選挙では、動画投稿サイトや交流サイト（SNS）で真偽不明の情報、誹謗、中傷が多く飛び交った。支援する候補者を巡り、有権者の分断を生んだ。テレビや新聞を「オールドメディア」として批判する声もあった。全国的には、24年の東京都知事選挙、衆議院選挙でも、SNSは大きな影響を与えた。

SNSや動画投稿サイトなどインターネットは大変便利で、仕事や生活に欠かせない。児童生徒にとってもそうだ。一方で、利用者は好みの情報や意見に囲まれがちになる。「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」と呼ばれる現象で、弊害が指摘される。SNSの閲覧数を増やして広告収入を稼ぐ「アテンションエコノミー」により、刺激的な情報が拡散されやすくなっている。

SNSの偽・誤情報によって選挙結果が左右される懸念があり、民主主義を揺るがしかねない。インターネット上の誹謗、中傷は、人の命を奪うことすらある。

児童生徒には、将来にわたって被害者にも加害者にもならないでほしい。主権者としての意識を培ってほしい。そのために、正確な情報を取捨選択し活用する能力「メディアリテラシー」を高めてほしい。

メディアリテラシーの力を身に付け、インターネットとうまく付き合うために、新聞やNIE活動は有効である。正しい情報を得るには、複数の情報源を持つことが不可欠だ。紙でもデジタルでも、新聞は、重要な情報源となることを学んでもらいたい。

新聞は、森羅万象の出来事を伝える「網羅性」や、ざっと見て世の中の動きが分かる「一覧性」がある。自分の関心のない情報が目に入って、見たり、読んだりし、視野を広げることができる。

真偽不明な情報の検証「ファクトチェック」についても理解を深めたい。新聞社は、選挙時の情報のファクトチェックに力を入れている。

本大会のパネル討議は「情報で、いのちを

守る」をテーマとしている。情報があふれる時代に、メディアリテラシーの力をどうやって育てるのか、命を守ることに繋げていくのか、議論を深めたい。

3 災害に備えよう

6434人が亡くなった阪神・淡路大震災が発生した1995年以降、東日本大震災（2011年）、能登半島地震（2024年）など、地震が相次ぎ、大災害時代といわれる。地震だけでなく台風や水害、山火事など、さまざまな自然災害が頻発している。南海トラフ巨大地震は30年以内に80%程度の確率で起こるとされ、首都直下地震なども想定されている。

災害時、SNSは、安否確認や情報収集のために役立つが、混乱に乗じた偽・誤情報が大量に飛び交う。24年の能登半島地震では、虚偽の救助要請が投稿され、本来必要な救助の妨げになった。

正確な情報を得ることができなければ、「たいたことじゃない」「みんな逃げていないし、大丈夫」などと誤った判断をし、命を失う可能性がある。

災害から命を守るために、情報は大きな鍵となる。日頃から正確な情報を選び取り行動に生かす力をどうやって鍛えていくか。メディアリテラシーと深く関わる難しい課題だが、知恵を絞りたい。

兵庫に住む私たちにとって、特に阪神・淡路大震災の教訓を伝えていくことは、大切なことだ。教育現場では、多様な実践を積み重ねている。全国どこでも、災害の教訓を次世代へつなぐために取り組んでいることと思う。

新聞は、紙やデータとして残っているので、図書館やインターネットを通し、児童生徒が比較的容易に情報を得ることができる。新聞は、災害を学び防災につなげるという点で大きな役割を果たしている。

児童生徒が自分自身や身近な人の命、そし

て多くの人の命を守るために行動できるようになる。そんな力を育成するには、NIE活動でどんな実践をしていくべきか。皆さんと考え合いたい。

4 新聞活用の価値を見つめ直す

本大会の新しい試みとして、大学生や社会人のためのNIEについて意見交換するため、2日目に特別分科会「社会人、大学とNIE」を設けた。兵庫県内では、大学や自治体、企業で新聞を使い、メディアリテラシーを教える講座を各地で実施している。特別分科会では、いずれも実践を進める大学や行政の担当者が意見を交わす。高校までで終わるのでなく、次の取り組みを考えるきっかけにしてほしい。

また、「ポスター発表」として、2日目の会場に、全国各地の小中高校、大学、市民グループなど約70団体がポスターを展示する。戦後80年の平和学習、震災伝承新聞など、NIEの実践を紹介しており、ぜひ見ていただきたい。

小中高校や特別支援学校が、26の公開授業・実践発表を行う。記念講演やパネル討議もある。先進的な取り組みを共有し、情報や意見交換を進めてほしい。

NIEは、社会性豊かな青少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展などを目的に掲げている。SNSの功罪がクローズアップされている現在は、新聞の価値やNIE活動の意義を見つめ直す好機でもある。

大会スローガン「時代を読み解き、いのちを守るNIE」には、NIE活動を通し、児童生徒に、いじめや事件、事故、災害、戦争などあらゆる困難を乗り越えていく力をつけてほしい、他の人の命に思いをはせてほしいという願いを込めている。

大会を通じて、忌憚（きたん）のない議論を重ね、たくさんのヒントを持ち帰り、明日へつなげていきたい。

司会



池上彰氏

ジャーナリスト、名城大学教授、元NHK記者主幹

いけがみ・あきら 1950年長野県生まれ。慶應義塾大学卒業後、73年にNHKに入局し報道記者に。94年から11年間、「週刊こどもニュース」のお父さん役として活躍。2005年よりフリージャーナリストとして国内外を取材。ニュースを幅広く解説するかたわら、コラムや書籍の執筆を通じて人気を得ている。

パネリスト



古田大輔氏

ジャーナリスト、日本ファクトチェックセンター編集長、元朝日新聞記者

ふるた・だいすけ メディアコラボ代表。早稲田大学政経学部卒。朝日新聞記者、バズフィード・ジャパン創刊編集長を経て独立。2020-22年Google News Labティーチングフェロー。22年9月に日本ファクトチェックセンター編集長に就任。その他主な役職にデジタル・ジャーナリスト育成機構事務局長など。



阪本真由美氏

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授

さかもと・まゆみ 国際協力機構（JICA）を経て京都大学大学院博士後期課程修了。博士（情報学）。人と防災未来センター主任研究員、名古屋大学減災連携研究センター特任准教授を経て現職。ひょうご震災記念21世紀研究機構理事、日本災害復興学会理事などを務める。専門は減災コミュニケーション、防災教育、地域防災。



渋谷仁崇氏

西宮市立浜脇中学校主幹教諭（社会科）、日本新聞協会NIEアドバイザー

しぶたに・よしたか 1978年西宮市生まれ。約20年前にNIE活動を始め、西宮市立上甲子園中学校、苦楽園中学校、平木中学校で実践、2019年に浜脇中学校へ。教育目標の一つにNIE活動を掲げる同中で、全校生約800人が作成する「NIEノート」（記事スクラップ）や、産学と連携し、まちづくりに関わる取り組みを推進。



長沼隆之氏

神戸新聞社論説副委員長

ながぬま・たかゆき 1967年西宮市生まれ。報道部長などを経て2021年から現職。阪神・淡路大震災で自宅が全壊し家具の下敷きになったが、直後から取材に奔走。被災地の復興、東日本大震災など災害・防災報道を担当し、兵庫県政キャップも務めた。論説委員室では政治、地方自治、災害・防災などを担当。防災士。

分科会 資料集



分科会 第1部 公開授業	15
実践発表	21
第2部 公開授業	54
実践発表	60
特別分科会	93
ワークショップ	97
新聞アート展示	99
ポスター発表	100



「シンブリオバトル」で主体的な学びを ～「推し記事」を紹介し合う～

授業者：講師・司書 田代弘子、教諭 宮尾友季子

1 学校紹介

甲南小学校・幼稚園は1911（明治44）年に平生鈞三郎によって創設された共学校である。「人格の修養と健康の増進を第一義とし、個性に応じて天賦の才能を発揮させる」を建学の精神とし、徳・体・知のバランスのとれた人間教育を実践している。

子どもたちのめざす姿として、「思いやりのある子」「あきらめない子」「考える子」を掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。



2 「シンブリオバトル」の実践について

ビブリオバトルとは、参加者がおすすめの本を5分で紹介し、最も読みたくなった本を投票で決める書評合戦である。「ビブリオバトル」(参照：知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト (<http://www.bibliobattle.jp/> 2025.6.10確認))

本校ではその手法を参考にし、新聞を紹介し最も読みたくなった記事を投票で決めるプレゼン大会を「シンブリオバトル」（以下SB）と称してNIEで実践している。これは、主に総合的な学習の時間において、まとめや表現活動の中で取り入れている。その結果、児童は「伝えたいことを整理して発表する」という明確な目的意識をもって活動に取り組むようになった。また、発表を聞き、友達の新聞を「じっくり読みたい」「質問したい」という意欲が生まれ、新聞そのものに対する関心も高まった。そうして、少しずつレベルアップしてきた。以下に、この変化の軌跡を5つのステップで紹介する。

◆STEP1 自作新聞でSB(シンブリオバトル)

昨年度、3年生では、まず記者との連携を通じて、自身が初めて体験する「校外学習」をテーマとした新聞を作成するために、新聞の構成や取材方法について学習した。校外学習から戻った後は、新聞のレイアウトや5W1Hといった作成上の重要な視点を学んだ。

代表に選ばれた児童は、自身の作成した新聞記事を発表し、質疑応答や討論を行った。さらに、公立図書館の資料を基に兵庫県について調べ学習を行い、グループで新聞を作成した。自作の新聞には伝えたいことが明確に示されており、聞き手との共通体験もあることから、大いに盛り上がる活動となった。



◆STEP2 こども新聞の記事を読んでSB

2学期には、こども新聞を読み、興味を持った記事を選んでスクラップし、要点まとめを行った。友達の興味を引きそうな記事を探す過程や、記事を分かりやすくまとめる作業、クイズを作る工夫などを通して、児童が主体的に新聞に関わる姿が徐々に増えてきた。

◆STEP3 友達の選んだ記事でSB

3学期には、園児に新聞の魅力を伝える活動として「記事釣り」（スクラップした記事に説明を付けたカードを新聞で作った釣り竿で釣る活動）を行った。その後、自分たち自身でも「記事釣り」を体験し、偶然出合った記事の中から「推し」たい記事を見つけて、「推しSB」を実施した。この活動により、児童は他者の視点で選ばれた記事に出会うことで、新たな興味や関心を広げる機会を得た。

◆STEP4 友達と考えたい記事のSBから討論

投票で選ばれた記事を題材として討論を行った。児童が選んだテーマは「姫路城入城料の値上げに賛成か」「動物園や水族館は本当に必要か」「戦争はなぜ始まり、なぜ終わらないのか」であった。大人でも考えさせられるような問いに対し、真剣に向き合い、自分の考えを深めようとする姿が印象的であった。



討論「動物園や水族館は本当に必要か」

◆STEP5 みんなで話し合いたい記事から課題を見つけ、解決策を考えるSB

児童は大阪・関西万博に強い関心を持ち、万博に関する新聞記事を自主的に収集し始めた。新聞や図書館資料を活用し、万博のテーマに対する自分の意見をまとめて発表する活動へと展開していった。

(以下指導案参照)



NIEノートまとめ



思考ツールで課題を考える

総合的な学習の時間指導案 (第4学年 1学期)

単元名 「大阪・関西万博」の新聞記事から万博のテーマに迫ろう

(1) 単元の目標

- ・自分や友達の選んだ資料を読んだり、聞いたりして内容を理解することができる。(知識・技能)
- ・自分が読んだ資料を整理し、考えをまとめて発表することができる。(思考力・判断力・表現力)
- ・自分や友達の選んだ課題に関心を持ち、考えを広めたり深めたりすることができる。

(主体的に学習に取り組む態度)

(2) 指導計画

学習過程	時	学習内容
課題の設定	第1時	大阪・関西万博について集めた新聞記事を読んで、スクラップする。
情報の収集と分析	第2時	選んだ記事についてNIEノートに3つの視点でまとめる。 ! (感動したこと・驚いたこと) ? (疑問に思うこと・他の視点で考えたこと) # (友達に伝えたいこと・話し合いたいこと)
まとめと表現	第3時	第2時で考えたことをキャンバでまとめて新聞形式に整理し、意見交換を行う。
課題の設定	第4時	万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」について考える。
	第5時	思考ツールを活用し、解決したい課題や解決策を検討する。
情報の収集と分析	第6時 ～8時	課題を解決するための取り組みやアイデアについて、図書館資料等を活用して、プレゼン資料やポスターなどにまとめる。
まとめと表現	第9時	「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにしたシンブリオバトル予選を行う。
	第10時	同テーマのシンブリオバトル 決勝
	第11時	万博校外学習の事後学習として、討論会とまとめを行う。

※2学期はKONAN万博を行い、パピリオンと万博新聞(ポスターセッション)を作成予定

2 本時について

総合的な学習の時間 学習指導案

単元名 新聞の記事を活用した「シンブリオバトル」

(1) 本時の目標

- ・自分が選んだ記事を読んだり、友達が選んだ記事を聞いたりして、内容を理解することができる。(知識・技能)
- ・自分が読んだ記事をまとめて、考えを深めようとしている。(思考力・判断力・表現力)
- ・自分や友達の選んだ記事に興味を持ち、考えを広めたり深めたりしようとしている。

(主体的に学習に取り組む態度)

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①記事の内容を理解しまとめることができる。	②自分が伝えたいことについて考えて整理しようとしている。	③発表をよく聞き、質問や対話に積極的に参加しようとしている。

(3) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点	評価規準
【導入】 課題の設定	1. おつまみ新聞 新聞を読み、一番読みたくなった記事を選ぶ。	○新聞記事の選び方(例：三角形の構造)について確認させる。	① 記事
【展開】 情報の収集と分析	2. 自分が選んだ記事について、まとめる。 ・どんな記事か？(5W1H) ・！ 感動したこと ・？ 疑問に思うこと ・# 伝えたいこと	○原稿を見ずに話せるよう、メモでまとめることを伝える。項目にとらわれすぎず、自由に伝える工夫(クイズ・歌など)も確認する。	①② ワークシート
【まとめ】 まとめ表現	3. シンブリオバトル予選 (発表+ディスカッション)	○発表者よりも聞き手の姿勢を重視することを伝え、良い質問が出るよう声をかける。	②③ 発表 質問 行動観察 発言内容
	4. 一番読みたくなった記事を決める。	○勝敗ではなく、多様な記事に触れ、自分の考えが広がることの価値を確認する。	
	5. シンブリオバトル決勝 (発表+ディスカッション)	○限られた時間の中で、選ばれた記事の中からいくつか発表する。	②③
	6. 考えたことを共有する。	○次の学習につなげるため、振り返りと共有を行う。	①②③ 振り返り

「NIEノート」を通して、主権者としてのまちづくり

～住み続けられるまちづくりを目指して 企業と地域との連携～



授業者：主幹教諭 渋谷仁崇、教諭 野上耕佑

1 はじめに

2019年度より、本校は教育課程・学校教育目標の1つである「NIE活動」の活性化に取り組んでいる。社会とつながる個と集団の育成に向け、NIEの定着を図りたい。生徒たちに現代的な課題に向き合うスキルと態度を育んでもらい、地域や社会とつながる数多くの機会を提供したい。

◇学校概要

西宮市は、阪神地区にあり、神戸と大阪のベッドタウンとして、また文教都市として2025年に市政100周年を迎えている。



浜脇中は、全校生800名、創立79年を迎える西宮市で最も伝統のある中学校である。南側は廣田神社ゆかりの御前浜、北は福男選びで有名な西宮神社、西は日本の桜の名所百選の夙川、東は阪神甲子園球場、そして世界遺産に登録された灘五郷のひとつ、日本酒の酒造会社が多数点在する校区にある学校である。

この地域で生活する生徒たちが、主体的な学びを通して、社会全体を多面的・多角的に考察し、他者と対話する中で、SDGsの「住み続けられるまちづくりを」を地域のテーマとして、主権者教育にもつなげたい。そんな思いをこめてNIE活動を行っている。



2 実践の内容

①「NIEノート」

全校生徒800名が「NIEノート(記事スクラップ)」を各自で作成している。NIEノート活動は、週に1度、自分が興味関心のある記事を選び、考察し、まとめ、意見や提案、批判をする。授業の最初に、まわし読みをしたり、各班の代表が書画カメラを活用して発表したりをする。お互いに内容のメモをとったり、意見を交流したりすることで「対話的な」学習にも結びつけている。時に、社会的な課題を選択し、学級内で考察していくこともある。

2024年度には、芥川賞作家の小川洋子先生に来校してもらい、「NIEノート」の授業に参加、生徒と意見交流をしていただいた。



(芥川賞作家小川洋子先生／「ひょうごNIE通信」から)

◇指導の留意点

- 『思考力・表現力・資料の活用力を伸ばす』
- 『主体的に学びに向かう姿勢を育む』
 - ・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。
 - ・日本語を正しく読む力をつける。
 - ・見出しの付け方を学ぶ。
 - ・記事の内容を理解(記事の起承転結)する。
 - ・自分の意見を表現する力をつける。

② 社会科学習指導案

◇単元名

「主権者として住み続けられるまちづくりをデザインしよう。～NIE活動を通して協働的な学びを基盤として『深い学び』を目指した授業づくり～」

◇指導計画 ◆歴史的分野

第1章〈歴史へのとびら〉…………… 全6時間

巻頭 持続可能な社会の実現に向けて1時間

1節 歴史をとらえる見方・考え方 3時間

2節 身近な地域の歴史 2時間←本時

第7章〈現代の日本と私たち〉… 全14時間

1節 戦後日本の出発 2時間

2節 冷戦と日本の発展 5時間

3節 新たな時代の日本と世界 3時間

◆公民的分野

第1章 現代社会の特色と私たち 4時間

第5章 地球社会と私たち 4時間

「SDGs11住み続けられるまちづくりを」

持続可能な社会に向けて ←本時

◇単元の目標

①持続可能なよりよい社会の実現に向けての態度を身に付ける。NIE活動を通して、新聞・ニュースより社会的事象をとらえ、今ある各分野の強みの部分を生かして、現在抱える課題を解決するために、これまで学んだことや、記事内容を根拠に、得た知識を活用し、さらに地域の未来につながる取り組みについて提案することができる。

【主体的な学習に取り組む態度】

②現在の日本の課題を、新聞記事やSDGsと関連させて、どのように解決すべきかを考察し、表現している。

【知識・技能、思考力・判断力・表現力】

③他者の意見を聞いて、自分で考えたことを提案することができる。

【思考力・判断力・表現力】

④授業終わりのふりかえりでの評価。単元の学習内容をふまえ、さらに学習したいことを具体的に書くことができる。

【主体的に学習に取り組む態度】

時間	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	本時の学習課題を知る。 『持続可能なよりよい社会の実現に向けての態度を身に付ける。』 『NIE活動を通して、新聞・ニュースより社会的事象をとらえ、各分野の強みの部分を生かして、現在抱える社会課題を解決するために、これまで学んだことや、記事内容を根拠に、得た知識を活用し、さらに地域の未来につながる取り組みについて提案できるようになる。』	本学習を通じて、社会的事象や、社会課題に着目する。 事前に調べた、興味関心ある記事への感想や考察、批判を考えることを伝える。	① ②
展開	①『NIEノート』にまとめている興味関心ある記事に関する、感想、考察、批判を交流する。 ②班内で『NIEノート』を順に発表する。	NIEノートを、班内で互いに発表し、意見する。 班ごとに役割分担をする。 〔司会・計時・ムードメーカー〕	① ②

<p>展開 I</p>	<p>他者の意見を比較から得たことに関する気づきをメモする。</p> <p>③クラス内で、班代表を募り（希望者）が全体発表をする。 ※発表時は、『なぜその記事を選んだのか』『なぜそのように考えたのか、理由も合わせて発表する』 ※既習知識を思考の土台とする。教科書だけではなく、NIEノートや各自の作成資料、PCを見て既習知識を想起する。</p>	<p>他の生徒や授業者と積極的に対話する。</p> <p>※指導者がファシリテーションの技術を使い、生徒が思考する上での動機づけをうまく維持させながら、生徒の思考を上手に引き出して発表につなげさせる。書画カメラ、大型モニターに映し出せるように準備しておく。</p>	<p>② ③</p>
-----------------	--	--	----------------



〔神戸新聞紙齢45000号特集掲載〕

<p>展開 II</p>	<p>④発表記事や、近日での社会的課題・事象を1つ取り上げ、クラス全体で考察し、批判的分析も行いながら、自分事として分析していく。</p>	<p>「住み続けられるまちづくりを」をテーマとなるように、身近な課題に結びつけられるように、多面的・多角的な視点を根拠に、分析していく。</p>	<p>② ③</p>
<p>まとめ</p>	<p>本時のまとめをする。 今日の授業で学んだことの交流意見、感想、批判、提案をNIEノートに記入する。</p>	<p>NIEノートに記入させ、本時の気づきや発見を、今後の学びや、アイデアミーティングにつなげていく。</p>	<p>①</p>

◆参考文献：「中学校学習指導要領解説（社会編）」 文部科学省

「NIE（教育に新聞を）『学習指導要領とNIE』 日本新聞協会

◆NIEノート活動の様子



書画カメラを活用して発表



グループワーク（ICT活用）



NIEノート

新聞を通して学ぶ

～インタビューと文章の記述～

発表者：教諭 藤岡敦洋

1 はじめに

本校は、NIE実践指定校として新聞を活用した研究を始めて、3年目を迎える。神戸市灘区、六甲山の麓のニュータウンとして開発された場所に、全学年各2学級、360人あまりの児童が学ぶ小学校である。

保護者はとても協力的で、地域の安全指導や学校行事にも協力的かつ受容的である一方、共働き家庭が多く、子供たちは自宅でゆっくりと新聞を広げたり記事を読み比べたりする経験が少ない。

ここでは2024年度取り組んだ5年生の活動の紹介と、2025年度引き続き6年生が取り組んでいる内容について綴っていく。

2 2024年度の実践

昨年度は学校図書館に新聞閲覧台を寄贈していただき、本校で購読している小学生新聞を置いて、子供たちの目に触れやすく、新聞を開きやすい環境を整えた。その結果、全校的に休み時間や図書の時間に新聞を開く児童の姿が見られ、世の中の動きや出来事に興味をもつ機会が増えてきた。そんな中、特に重点的に取り組んだ活動を紹介する。

①NIEコーナーの設置

子供たちが気軽に新聞に触れられるように、廊下に6紙の新聞を置いてNIEコーナーをつくった。その結果、子供たちは気になった新聞記事を気軽に手に取り、読む姿が見られるようになった。また、小学生新聞も置き、一般紙との記事の書きぶりや写真内容を比べる姿が見られた。また、担任がニュースをピックアップしたものを廊下に掲示し、新聞になかなか親しみにくい子供への配慮を行った。

その結果、子供たちは気になるニュースを見つけやすくなり、より時事に関心を高めることができた



②新聞を使ったスピーチ（朝の会）

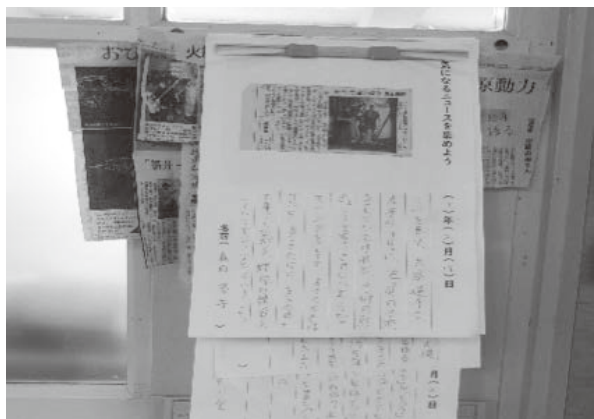
朝の会で、新聞記事を使ったスピーチの時間を設けた。日番の子供は、事前に新聞記事から気になるものを事前に探しておき、自分なりの解釈や感想を所定の用紙に書き、スピーチの準備を行う。そして、朝の会で発表し、子供たちからの質問に答えるという活動である。



初めは短い言葉で伝えるだけだった児童も、繰り返していくことで、記事に関する感想の量が増え、伝えたいことも明瞭になっていった。また、質問する側も、質問の質や記事内容をより深く質問するようになり、継続

して取り組んできたことが力に変わっていく様子が実感できた。

子供たちが発表で使用した用紙は、廊下に重ね貼りをしたためいき、いつでも振り返りができるようにするとともに、子供たち自身が達成感を味わうことができたと感じている。



③じぶん学習

毎週末に1度、本校ではじぶん学習という宿題を出している。自分の興味がある内容を調べ、専用ノートにまとめるという課題である。5年生では新聞から興味のある記事を見つけて、それについてさまざまな方法で調べる学習に取り組んだ。自宅で新聞を購読していない家庭もあるため、教師側が先述のピックアップニュースだけでなく、Teamsに児童の興味がありそうな記事をアップし、じぶん学習につなげるような支援も行った。

テーマを見つけることに悩む子供にとって、こうした支援は意欲的にじぶん学習に取り組むきっかけとなったように感じる。さらに、「もっと調べたい!」「興味がわいてきた!」という子供は、休みの日に、実際に記事になった場所に行き、本物に触れたり、体験したりする機会につながっていった。

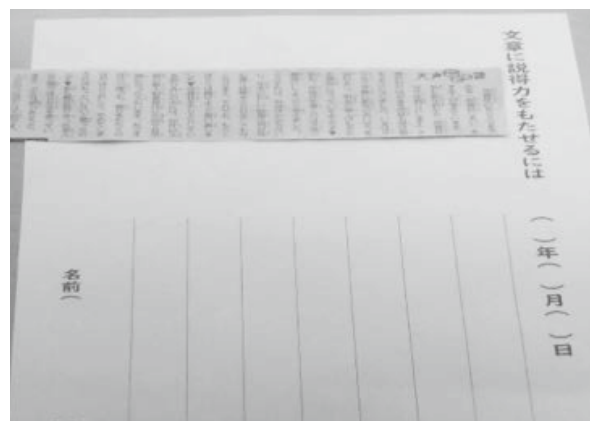
④国語「新聞を読もう」

「文章に説得力をもたせるには」

NIEコーナーの設置によって、新聞に対する関心は確実に高まっていった。そこで、授業の中でもNIEの具現化を図る学びを模索した。国語「新聞を読もう」の学習では、実

際の新聞記事を使って、新聞の読み方を学んだ。見出しやリード文、紙面構成などを知り、より新聞への理解を深め、興味関心が湧いてくるようにした。また同じ内容の記事でも、全国紙と地方紙とで表現の仕方に違いがあることに気付いたり、読み手を意識した表現内容の違いについても確認したりすることができた。そして「地方紙だと、その地にゆかりのある人物の記事が細かく掲載されている」「具体的に取り上げたい内容が記事になっている」などの意見が出てきた。このようにして、6紙のさまざまな新聞社の特徴や工夫を子供ながらに確認し、もっと調べてみようという意欲付けにつなげることができた。

また、国語「文章に説得力をもたせるには」では、コラムの記事を使い、その記事に対し自分が「賛成」か「反対」かを決め、理由を考えるとという活動を行った。さらに、この活動の終わりには「初め(序論)」「中(本論)」「終わり(結論)」の構成(総括型)を考えて文章を書く練習を行った。その結果、文章を書く際、自分の意見だけでなく、根拠もしっかり組み込んだ活動につなげることができた。



記事の内容としては、子供たちの興味関心を引きやすくするために、新聞の投書欄で、同世代の文章を使用することもあった。また、小学生新聞を使って、身近な問題を分かりやすく書かれた記事を読むことで、表現することが苦手な子供も、自分の考えが出しやすくなるように配慮した。

さらに、SNSの使用制限に関する記事を

準備するなど、児童にとって比較的身近な内容を取り上げることで、日頃はあまり目を向けることのなかった問題に向き合ういい機会となった。また、友達の意見を聞いたり作品を見合ったりすることで、自分の考えに自信がもてたり、自分と違う考えや視点に興味がもてたりできるようになった。

⑤社会「記者派遣事業」

12月上旬に、記者派遣事業を行った。この事業は、社会「情報社会に生きるわたしたち」の授業進度に合わせて行ったものであるが、実際に第一線で仕事をしている新聞記者に来校していただき、新聞記事を作るまでの工程を、実際に使うカメラ等の7つ道具を見せながら説明していただいた。



新聞の記事にこれまでたくさん触れてきた児童にとって、実際に記事を作っている記者と交流できる機会はとても貴重な体験となった。また、記事ができあがるまでの工程を知ることによって「こんな大変な思いをして作ってくれていたのか」「情熱をもって仕事に取り組んでいてかっこいい」など、読み手とは違った視点で話を聞くことができた有意義な時間であった。



また、話を聞いて疑問に思ったことはメモしておき、その後の質問コーナーで聞くことができたのも貴重な時間となった。

3 今年度の取り組みについて

昨年度1年間の取り組みを通して、今まで新聞に関心が少なかった児童が新聞から多くの学びを得ることができたことは喜ばしいことであった。そこで、今年度は新聞記事の作り方に着目した取り組みを考えた。インタビューの仕方や写真の撮り方、記事のまとめ方等を、神戸新聞社NIE・NIB推進部の三好正文シニアアドバイザーに来校いただき、ポイントを詳しく教えていただいた。そして「友達のよいところを書く」「友達を応援する」「自分を見つめ直す」ためのインタビューとなるよう、5W1Hを意識した意欲的な活動が見られた。その後、国語「聞いて、考えを深めよう」の単元でも学んだことを踏まえて学習を進めた。また家庭科「工夫して生活に生かそう」では、学んだことを使って家の人に家事についてインタビューし、日々の大変さの中にもやりがいがあることなどを聞き取り、家族への感謝の気持ちを込めて報告し合う場面が見られた。この術を使って今後は本校教職員へのインタビューをまとめた新聞作りや、鶴甲地域住民へのインタビューを通して鶴甲の町の良さや自慢について聞き取る予定である。自分たちが住んでいる町の良さを聞き取ることで郷土愛につながり、将来的な地域の担い手となる礎となることを期待する。個別最適な学びと協働的な学びの一体化と言われている中、情報収集の主体性や興味関心の連続性、さらには新聞づくりに向けた情報共有や制作過程の比較といった他者参照など、新聞を活用した取り組みには教育の今日的な学びが詰まっている。児童がこの2年間の活動を通して新聞に興味をもち、学校が定期購読をしている新聞がある学校図書館に足を運ぶ姿が増えたことが何よりもうれしい。

小中一貫として取り組む 地域を発信するNIE教育 ～「国生みの島」から～

発表者：教諭 森彩夏

1 はじめに

本校は淡路島から海上4km離れた離島「沼島」にあり、県下最南端に位置する小中一貫教育校である。沼島は「古事記」「日本書紀」などに登場する「おのころ島」の最有力候補地だとされている。1億年前の地殻変動による地球のしわ「鞘状褶曲（さやじょうしゅうきょく）」を有し、多くの伝説とともに古くから引き継がれてきた文化や祭りが、今なお息づいている。また、鱧や鯡、鯛など、豊かな海の恵みでも知られている。

沼島小・中学校では、ふるさと教育の発信を軸に、小中一貫校の特性を活かした取り組みを推進してきた。新聞記事を使った授業や活動を通して読解力や表現力を高めることをねらいとし、スピーチの実践、新聞を手に取りやすい環境づくりに取り組んだ。また、総合的な学習の時間を中心とした「沼島を知る」学習により、沼島独自の伝統文化や古代から育まれた豊かな自然に対する知見を深め、沼島を愛し大切にしようとするふるさと意識の醸成につなげた。さらに、沼島についての学びを発信することで、より多くの人に沼島の良さを知ってもらおうと新聞作成に取り組んだ。

組織づくりにおいては、小・中学校が連携して合同組織を立ち上げ、研究を推進してきた。

○研究推進・資料作成部

〈NIE担当、研修担当〉

- ・研究の概要の作成と推進
- ・発表資料の作成

○授業実践部

〈特活、担任、社会・国語・理科・総合担当等〉

- ・総合的な学習での取り組み
- 地域学習や「沼島を知る活動」など

- ・朝の会、終学活での新聞を取り入れたスピーチ

○環境整備部

〈学校図書館司書、図書担当、養護教諭、栄養教諭、事務担当等〉

- ・小中合同図書室の整備
- ・新聞を手に取りやすい、調べ学習しやすい環境づくり

2 実践の内容

I 小・中学校での取り組み

【新聞記事を使ったスピーチ実践】

小学校は「こども新聞」から、中学生は「こども新聞」または新聞から記事を選び、小学生は朝の会で、中学生は終学活でスピーチに取り組んだ。興味関心のある記事を選ぶ、5W+1Hを明らかにする、など普段のスピーチにNIEの視点を加えて取り組みを継続した。

【取り組み例】

- ①国語授業時に新聞の読み方とスピーチの仕方を指導（事前指導）
- ②記事を探して写真を撮り、指定の用紙に貼る〈NIEワークシートを活用〉
- ③5W+1Hを抜き出す
- ④この記事を選んだ理由や意見をメモ程度にまとめる
- ⑤ホワイトボードに映し出す
- ⑥スピーチをする



新聞を読み記事を選ぶ

歌い、踊る体験を通して学ぶ「沼島の伝統芸能を継承する活動」である。活動のまとめとして「沼島新聞」を学年ごとに作成した。

「沼島を知る活動」の様子



「沼島を知る活動」沼島クルーズ



「沼島を知る活動」地層見学（灘地区）

平バエ見学（沼島）



魚さばぎ体験・船釣り体験

記事掲載日： 年 月 日（ ） 朝刊 夕刊

スクラップに挑戦
「おまかせのコース」

①何を伝えるために書かれた記事ですか。
食の課題を解決するフードテックを
手がけるスタートアップ
いつ 七月九日
どこで 神戸
なぜ 自社技術などを発教した。
なにを オープンイノベーションで地域活性化を
どのように 図ろうと

②なぜこの記事を選びましたか。あなたの意見、感想も書きましよう。

私がこの記事を選んだ理由は、食の最先端技術と
はどんなものか気になったからです。記事を読んで
野菜を使った寿司店や、人工知能で食料製造
を自動化する技術ができてきていることを知
って驚きました。私は特に廃棄されるものを知
せて作った米麹由来の甘味料がすごいと思いま
した。廃棄されるものを再利用する環境にもいい
ので、もっと広まって欲しいです。あと、
私は生魚が苦手なので、野菜を使った寿司店に一
度行ってみたいと思いました。

NIEワークシートを用いた要点まとめ



小学校 朝のスピーチ



中学校 終学活のスピーチ

Ⅱ 総合的な学習の時間での取り組み

【中学校での実践】

中学校生徒は20名。沼島に在住している生徒は4名（移住者1名を含む）で、16名は市の小規模特認校制度を利用し、毎日船で淡路島から登校している。その実態を受け、総合的な時間の学習で「沼島を知る活動」に取り組んでいる。1年生は沼島八幡宮宮司や神宮寺住職の講話を聞くなど歴史を学ぶ「沼島の歴史を知る活動」、2年生は地域の方を講師として漁業体験から学ぶ「沼島の自然を知る活動」、3年生は沼島音頭の歌詞を味わいながら



作成した新聞

【小学校での実践】

地域学習・「沼島を知る活動」などを通して、地域のことを調べ、発表する活動に取り組んでいる。今年度は、沼島が「国生みの島」であることを中心に据え、国生み神話、漁業、祭りなどの伝統、小中遠足等を題材に、調べたことを「ぬしま小」新聞、「沼島発見！」新聞、「150年記念」新聞にまとめた。新聞作りに先立って、小学校中学校ともに、兵庫県NIE推進協議会事務局長である三好正文氏に出前授業をしていただいた。



小学校 出前授業



中学校 出前授業

授業後の児童・生徒の感想



小学校低学年の感想

小学校中学年の感想

5W1Hが大事だということがすごくわかりました。ふだん読んでいる新聞にいろんな人が関わっていることがわかりました。「トップ」「かた」「へそ」「アタマ」などそれを次に意識して読んでみたり作ったりします。お話を聞けて新聞の書き方やコツを知ることができてよかったです。これからも新聞を書くことがあるので、5W1Hを意識して書きます。

小学校高学年・中学生の感想

今日はありがとうございました。今日の授業では新聞記事での大切にしていることや書き方、インタビューでのコツなど新聞のことでたくさんのことを学びました。三好さんのお話を聞いてもっと新聞のことを知りたいし、新聞を読みたいと思いました。今日学んだことや分かったことなどこれからいろいろな時に使って活かしていきたいです。

3 成果と課題

初めは戸惑っていた児童・生徒であったが、手の届く場所に複数社の新聞を置き、学校生活の中で新聞を読む活動を増やすことで身近なものと感じるようになってきた。記事の読み比べに挑戦する生徒も現れてきており、自分自身で学びにつなげている。また、朝の会や終学活でスピーチを取り入れたことで、自分が気になる記事や話題の内容について発表する機会ができたため、積極的に行動する生徒が増えたように感じる。

今後は児童・生徒が作成した沼島新聞の発信に取り組む。新聞を瓦版にして、沼島総合センターや郵便局、沼島と灘の汽船場に置き、地元の方や観光客に読んでいただいたり、こどもあんしんネットで配信したりするなど、より多くの方に沼島の良さを伝えることを目指した活動を進めていく。

中学3年生と小学6年生が伝え合う原爆と平和

発表者：愛徳学園中・高校 教諭 廣畑彰久、愛徳学園小学校 教諭 彦野周子

1 はじめに

本学園の設立母体は、スペインのビックという都市にある「愛徳カルメル修道会」である。

同会は1826年に聖ホアキナ・デ・ベドゥルナによって創立された。同会より6人の修道女が来日して、若い人々のキリスト教教育のために1954年、愛徳学園を設立した。以降、神戸市垂水区でカトリック女子教育を行い、2024年には創立70周年を迎えた。

「愛徳坂」と呼ばれる坂の上に校舎が立っている。小・中・高は同じ敷地内にあり、各教室からは瀬戸内海と明石海峡大橋が見渡せ、自然の雄大さを感じることができる。



ホアキナが残した、「To do por amor nada por fuerza」（力ではなくすべてを愛によって）という言葉にならって教育活動を行ってきた。ウクライナとロシアやイスラエルとハマスなど世界各地で武力による衝突が激しさを増す中、この言葉の重みを問い直す1年となった。

2 実践の内容

(1) ねらい

戦後80年を迎えて、戦争体験を持つ方が少なくなる中、戦争を体験していない世代が

新聞を含めたさまざまな機会を通じて学び、それをさらに次の世代にどう伝えていくかをテーマに取り組んだ。児童・生徒は戦争を体験していないが、それを学んで、知ったことを新聞にする。新聞には読み手がいるため、読み手に伝わるよう書き方を工夫しなければならない。その過程で、生徒・児童はさらに理解を深めることができる。その点からも、新聞を用いる意義は大きいと考えている。

本校の中学3年生は修学旅行で広島を訪れ、平和学習を行う。その事前学習や現地で学んだことをもとに新聞を作成し、自分たちの次の世代である小学6年生に伝えていく学習活動を行った。この取り組みは、3年前の2021年に本学園の中学校・高等学校がNIE実践指定校だった際にも行っている。その際に中学生から平和について伝えられた当時の小学6年生が、今回の伝え手となる中学3年生である。

(2) 小学6年生の取り組み

小学5年生の3学期に、NIEの記者派遣事業で記者の方から話を聞き、新聞の役割や記者の方がどのようなことを大切にして仕事をしているかなどを学んだ。その時の学びを活かして、今年度のNIEではいろいろな人から話を聞いて自分の考えを深めたり、学んだことに関して事実と感想をしっかりと分けてまとめたりすることを大切に活動してきた。1年を通して平和について考えを深めて、平和で民主的な社会の担い手としての資質を育みたい。

○1 学期

社会科の授業で日本国憲法について学んだ。三原則の一つ「平和主義」の学習では、自分の身近な人々から「平和を築くために」というテーマで話を聞いて自分の考えを深めた。「平和」という言葉が含む意味の大きさから一人ひとりが思い描く「平和な社会」が同じではないということも重要な学びとなった。

「平和を築くために」児童のまとめより

私は母にインタビューをしました。母の考えは過去の悲惨な出来事を忘れずに、色々な人と話し合っ、協力し合うということでした。私は今回の授業を通して平和を築くための話を聞くまでは募金などの支援方法しか思いつきませんでした。色々な先生方のお話を聞いて、自己主張ばかりするのではなく、考えを尊重し、認め合うことが出来る未来を作ることが大事だと考えをより深めることが出来ました。私は平和を築くために過去の出来事を風化させずに、未来に発信するために自分も他の人も勉強して、悲惨な争いを二度と起こさないようにしたいです。

私は様々な人や先生の平和とはなにかという意見を聞き、最初の自分の意見『自他共に尊重する』と重なっているところが多いと感じました。結局どんな解決策にも相手を思いやるということが必ず必要だというのが今回のインタビューを通して私が感じたことです。自分も相手も何かをする前にはきちんと自分の意見とは多少違っても『これは一般的にみて良いこと、ダメなこと』といった善悪を判断できる人間になったらいいのになと思います。でも、それをやりすぎても逆に自分の個性を見失って逆効果にもなるかもしれないと思っています。非常に難しい問題です。ただ、私自身の意見としては必要最低限の常識は守り、人を傷つけること以外の良い影響をもたらす自分の発想や意見を主張していけば良いと思います。

○2 学期

8月6日・7日の中国新聞朝刊を授業の中で各自読んだ。児童は新聞記事の内容の多くが原爆投下や平和に関することだということに気付いた。その中から印象深かった記事の文や写真を紹介し合った。

ある児童は、「ヒロシマ」を題材に映画を作成しているキャノン・ハーシーさんの言葉が印象深かったと紹介した。

【中国新聞】

私が1番心に残っているところは、「中国新聞(8月7日)」の2面目の(キャノン・ハーシーさんの)「この人」と言う文章の3段目の

「社会に変化をもたらし、よりよくする責任がある」と

「いずれ来る被爆者なき時代に、娘に『これを伝えていけ』と言える作品を作りたい」のところです。

なぜなら、今続いている**戦争**や、**紛争**で亡くなったり、**被害に遭われた方**が沢山いるなか、それらが無くなって**平和な世の中(世界)になって欲しい**ことが伝わってきて、これは私たちに残された**使命**などに思えたからです。

他にも平和祈念式典の中で自分たちと同じ小学6年生の2人が発表した「平和への誓い」が全文掲載された記事に目をとめる児童も多くいた。(QRコードは広島市教育委員会のホームページ「平和への誓い」のページ)



(3) 中学3年生の取り組み

○2 学期

中学3年生は、修学旅行の事前学習として平和学習に取り組んでいる。

事前学習は教科を横断して実施し、社会の授業で原爆投下までの経緯を振り返ったり、英語の授業で佐々木禎子さんに関する記事を英文で読んだりするなど、さまざまな角度から学習を進めている。

事前学習では、毎年被爆体験を持つ方からお話を伺っており、今年度は生後8カ月のときに広島で被爆された近藤紘子さんをお招きした。生徒は広島でその瞬間を生きた方から、ご自身の体験と平和に対する祈りを直接お聞きするという、貴重な経験ができた。



修学旅行は10月に行われ(24年度は16日～19日)、広島、萩・津和野方面をめぐる

た。広島では、平和記念資料館を見学し、班ごとに平和記念公園内の碑巡りを行った。このとき、班ごとにピースボランティアの方から、詳しい解説をお聞きした。原爆が炸裂したその場に立ち、遺された展示物を見て、詳しいお話を聞くことで、生徒たちは真剣に平和と向き合う時間を過ごした。

修学旅行が終わり、この後の新聞作成のため、新聞記者の方を招いて、新聞の作り方やレイアウトについての講座を行った。

○3学期

中学3年生は、4つのグループに分かれて小学6年生に伝えるための新聞づくりに取り組んだ。

真つ黒のお弁当箱
いつも食べているお弁当の中身が灰になると言われたらどう感じるだろうか。広島に原爆が落とされた八月六日、当時中学一年生の男の子のお母さんで作ったお弁当とお弁当と共に原爆にまつて奪われた。お弁当には、細で初めて採れた野菜と、涙色飯が

最後の言葉
みなさんは「行ってきます」が家族との最後の会話になると考えた事はあるだろうか。八月六日の朝、いつものように「行ってきます」と家を出てそのまま被爆した人がいる。その

私達から小学生へ
今も原爆資料館本館の周りで進む発掘で、被爆当時の遺構とともに暮らしの品々が続々と出土している。私たちは九月に近藤 龍子さんから

何気ない日常の幸せ
今までは他人が考えていた事が、実際に原爆が落とされた地に足を踏み入れ、当たり前のように保証される、改めて痛感

News peace

入っていた。その子はお弁当を食べたことをおぼえていた。工場で仕事をしていた被爆したお母さんが、このお弁当箱に涙の遺体を母親が見つけ出した時涙の雨があつたのである。

人はそれきり、家族と会うのは最後だった。他にも、いつも通り近所で話したり遊んだりしていた人があり原爆が落とされることなど全く想像していなかった。

だから、私たちがだけでなく次の世代である皆さんにも原爆のことをこれからも伝えていきたいと思います。家族や友達と、大切な一日一日を大切に過ごしてほしい。

新聞づくりにおいては、「戦争を経験していない世代が、次の世代に戦争を伝えていくにはどうすればよいのか」という課題意識を生徒と共有した上で、

- ① 一番心を動かされたもの・こと
- ② その経緯や背景について

③ 自分たちが受け取った思いや感想

④ 小学生に伝えたいこと

という、4点について記事をまとめ、新聞を作成した。作成にはICT機器とテキストを共同編集できるアプリケーション（ロイロノート・スクール）を利用した。

新聞を作成する過程に当たっては、班ごとに内容を検討して記事を書き、生徒はそれぞれの書いた内容が理解できるかどうかを互いに確認して、編集の過程を体験した。さらに、読み手である小学6年生を想定して、読み手の理解が深まるよう、さらに内容や表現を工夫した。

3 成果と課題

インターネットを利用すれば、膨大な情報にアクセスでき、教室や自分の部屋から出なくてもさまざまなことを知ることができる。しかし、今回の実践を通して、子どもたちは現場を訪れることや人との対話を通して考えを深めることの大切さを学び取ったのではないだろうか。昨今、新聞などマスメディアの存在意義が問われているが、ネット上の情報をかきあつめるだけでなく、現場を訪れたり、当事者から話を聞いたりする報道に携わる人がいるからこそ、私たちは少数者の声を聞き、より広い視点から情報を得られていることも知ってもらいたい。

児童・生徒の一人ひとりが戦争を歴史の中の点ではなく今を生きる自分につながる線として理解して伝えていくことが、平和を紡いでいくことになるのだと今回の実践を通して感じた。

「？」を「！」に 新聞から始まる継続型探究学習

～姫路の魅力発見! 未来への夢プラン～

発表者：教諭(前期課程) 川村かおり、教諭(後期課程) 古寺和子

1 はじめに

小中一貫の義務教育学校である本校では、これまでも前期課程（1年～6年）と後期課程（7年～9年）が合同で行う活動を通して、子どもたちの交流と学びの接続を図ってきました。そして現在、6年生でNIEを起点として始まった探究活動を、後期課程に進級した7年生が引き続き発展させていくという、新たな試みに取り組んでいます。当日は、6年生で主体的に取り組んできた探究活動を、7年生においてさらに興味関心を広げながら学びをつなげていくための実践について発表します。本稿では、実践発表の概要と過去の取り組みの一端を紹介します。

2 実践発表の概要

5年生でわが町豊富の魅力を探求してきた子どもたちが、6年生の3学期にその視野を広げ、姫路市の魅力発見へと活動を展開しました。はじめにこの探究範囲の拡大を背景に、子どもたちはまず過去2年分の新聞記事から姫路に関する情報を収集し、スクラップブックを作成しました。そして、集積した記事を分析する中で、歴史、文化、自然、災害など多岐にわたる12のテーマを設定し、姫路の多様な魅力を体系的に整理していきました。



次に、姫路の魅力を多角的に捉える導入として、姫路城の入城料改定に関する新聞記事を取り上げ、「6ハット思考法」を用いた実践的な指導を行いました。¹⁾



その上で、子どもたち自身でテーマに応じた記事を選び、習得した6ハット思考法を活用しながら記事の内容を吟味しました。

最後に、複数の記事を多様な視点で捉えたことで見えてきた姫路市の良さや課題についてまとめました。

まとめる中で、子どもたちの中に新たな探究心が芽生え、それは中学校に進級した今年度、7年生の探究課題として具体的に設定されています。現在、12のグループに分かれた生徒たちは、それぞれのテーマに基づいた調べ学習を精力的に進めており、4月にはその成果を中間発表として共有しました。



そして、探究はそこで終わらず、中間発表を経てさらに深掘りしたい点や、実際に現地で確かめたいという思いが強まり、姫路城周辺でのフィールドワークを実施する計画が立ち上がっています。

当日の実践発表では、本取り組みの詳細も含め、具体的な授業実践について紹介します。発表は、取り組みを進めてきた指導者による説明はもちろん、実際に授業を経験した7年生の子どもたちによる活動の紹介も交える予定です。

注 1) 6ハット思考法とは、エドワード・デボノの提唱する特定のテーマについて多角的な視点で考える方法です。客観的に、否定的に、創造的に、など6つの視点から対象を見つめます。

3 これまでの主な取り組み

(1) 「NIEタイム」でNIEを日常的に

1年生から9年生まで、朝の学習の時間を利用して「NIEタイム」として、新聞を使った短時間学習に取り組んでいます。

例えば前期課程（小学校）の低学年では、新聞から知っている文字を探すゲームで盛り上がり、中学年では、気になった新聞記事をスピーチで紹介し、感想を交流したりしています。高学年では、天声子ども語の視写やまわしよみ新聞、さらに後期課程（中学校）では記事を使った読解活動などに取り組んでいます。いずれも学習の基盤となることばの力の高まりを期待するものです。



【実際に取り組んだ年間の主な内容（R6年度）】

低学年	文字探し 小学生新聞を読む 新聞紙で遊ぶ（工作）
中学年	デジタル小学生新聞を読む お気に入りの記事を選び、感想を書く・紹介し合う 天声こども語の音読

高学年	ことまど新聞づくり 天声子ども語の視写 まわしよみ新聞 やさしい日本語新聞づくり
後期課程	気になる記事の紹介 新聞コラージュ 記事読解、作文 ことまど新聞づくり

(2) 新聞づくり

学習のまとめや活動報告の機会には新聞を通じた表現活動や共有を積極的に行っています。紙で作成する子もいれば、新聞制作アプリ「ことまど新聞」を使ってデジタルで作成する子もいます。目的に応じて見出しや書く内容を検討したり、互いの作成した新聞を読み合ったりしながら、読み書きする力を高めています。



ことまど新聞（6年生児童作成）

「ことまど新聞」を利用することで、新聞作成の効率が上がり、その分文章の作成に集中することができています。

また、後期課程の生徒たちが作成した新聞を、前期課程の児童が直接見学する機会を設けることで、より効果的な文章のまとめ方や、読者に響く表現方法を肌で学ぶことができます。このように、小中学校が連携し、学びの成果を共有できる環境こそが、義務教育学校ならではの大きな強みと言えます。

他にも、2024年度は、新聞記者の方を講師に招いて記事の書き方を学ぶ機会を設けました。教えていただいたことを参考にしながら

ら、子どもたちは取材活動や記事作成、編集等に熱心に取り組みました。下図の「デジタルニュース」など、伝える記事の形態も多様化してきています。



記者派遣

取材活動



デジタルニュース



7年生作成の新聞を見に行く6年生

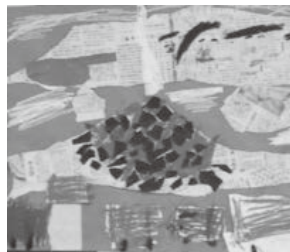
(3) 新聞のある日常

本校の子どもたちにとって、新聞は身近な存在です。校舎内には各社の紙面や子どもが作成した新聞を配置しているポイントが複数あり、休み時間などには、次々にめくりながらおもしろそうな記事がないかを確認の様子や、掲示されている新聞の前に立ってじっと読む様子などが見られます。



新聞の供覧スペース

また、新聞を使って図画工作科や美術科の作品づくりに取り組んだり、古くなった新聞を包み紙として活用したりするなど、創造的な活動や環境理解につながるような学習の一助にもなっています。



材料に新聞を使った図工作品



本の福袋イベントの包み紙として



職員室前の掲示板 (NIEコーナー)
左：前期課程 右：後期課程

(4) NIEに取り組んで

NIEの活動を振り返るため、年度末にアンケートを実施しました。調査の結果、新聞を使った活動に対して83%の児童生徒が楽しさを実感していることや、指導者側としても効果の実感が得られるようになってきていることが分かりました。年間を通したNIEの取り組みのポジティブな成果が確かめられています。

実践発表会当日、ご参加いただく皆さまと、新聞を活用した具体的な探究学習のあり方について、活発な意見交換を行い、理解を深め、新たな知見を共有できることを楽しみにしております。皆さまとの出会いを通して、私たち自身も新たな課題や発見を得られることを心待ちにしております。



すべての学校に新聞データベースを!

～環境整備は大人の責務～

発表者：教諭 池田拓也、司書教諭 狩野ゆき

1 はじめに

神戸市東灘区にある灘中学校・高等学校(以下、灘校)は創立顧問である嘉納治五郎先生が定められた校是「精力善用」「自他共栄」のもと、生徒の自主性、主体性を重視し、自由な校風をもつ中高一貫の男子校である。

発表者の池田は、兵庫県立高等学校で18年間勤務したのち、2017年度より灘校公民科教諭として着任し、現在に至る。公立高校勤務時より、「学校と社会をつなぐ」ことを念頭にさまざまな授業実践を重ねてきた。公民科の学びは学校の中だけで完結するものではなく、「社会に開いていく」ものでなければならない。その学びにとって、学校と社会をつないでくれる強力なツールの一つが、新聞である。確かに、時代の変化とともに「新聞の存在感」は小さくなっていると感じるが、学びのツールとしての存在価値はまだまだ大きい。参考までに、今年度当初、本校中学3年生にとってアンケートによると、新聞購読をしている家庭は約4割、1週間に1回以上の頻度で新聞を読む生徒は、およそ4分の1であった。学校で新聞を積極的に活用しなければ多くの生徒たちは新聞に触れないのは明らかである。

ここでは、私が担当する「中3公民」の「地域の活動から社会を知り、中学生として発信する」の授業を紹介し、そこでの新聞活用について触れる。また、授業で新聞が活用されるために、教員や社会に求められていることについても言及したい。

2 実践の内容(公民科教諭)

2019年度より、中学3年生公民科教諭の中で、約5カ月間、地域でさまざまな課題解決に

向けて活動されているNPO法人の方々と本校生が出会い、活動内容や課題についてお話を伺い、その上で生徒たちが自ら問いと仮説を立て論証し発表する、いわゆる探究型の授業を行っている。授業の目的は以下の4つである。

- ・NPO法人の課題や取り組みから、現代社会の諸問題について考察する。
- ・生徒同士の話し合い、外部の方々へのインタビューを通じてコミュニケーション力を育む。
- ・中学生の視点で地域課題に対する解決策を発表する。
- ・生徒が地域社会や地域社会を支える「大人」と出会い、顔の見える関係をつくる。



口頭試問の様子

以下の表は、本授業の流れで10月から2月までの長丁場である。3～4人を1チームとするグループ研究で、生徒たちに気づきを与え、能動的に取り組むように促すことを重視している(あまり細かい指示はしない)。

授業は週2時間で、教員が2名(1時間は1名)、司書教諭が2名、約1カ月間のみ週1時間は、授業アシスタントが3名つく体制で進めている。

基礎知識	講義、文書購読、NPOインタビュー
調査研究	問いづくりワーク、テーマ決定 口頭試問、中間報告
発表	デザイン授業、研究講義 発表練習、全体発表会

ここからは2024年度の「調査研究」の部分に焦点を当てる。探究型授業において、生徒たちは「問いを立てる」ことに苦勞する。そのためには「テーマ設定」が重要である。「基礎知識」の段階での文書購読やNPO法人へのインタビューを通じて、テーマ設定につながる歴史的経緯や背景について学んでくれることを望んでいるが、なかなか難しい。そこで、「テーマ」を深掘りしていく際には、関係省庁の白書や新聞記事の検索を勧めている。特に、本授業では、神戸で活動されているNPO法人にご協力をお願いしているので、地域のニュースは重要度が高い。本校では、新聞記事のデータベース検索について、「朝日けんさくくん(朝日新聞)」と「ヨミダススクール(読売新聞)」を契約して活用してきた。しかしながら、地域のニュースは神戸新聞に掲載されることが多い。神戸新聞はデータベースが使用できず、図書館にある紙面を使うように指導してきたが、手に取って調査する生徒は皆無であった。そこで、教員が記事を見つけて、関係しそうなグループに紹介する形をとってきた。この状況を改善するため、昨年度は試行的に神戸新聞社のデータベースにアクセスできるように対応してもらい、神戸新聞も合わせて3紙のデータベースを活用できる状況となった。今回の探究型授業に限らず、複数のデータベースを使用できる環境は、記事比較なども容易にでき、とても有意義である。次に、この環境を活かすために、本校での司書教諭を中心とする取り組みについて紹介する。

3 実践の内容(司書教諭の新聞活用法)

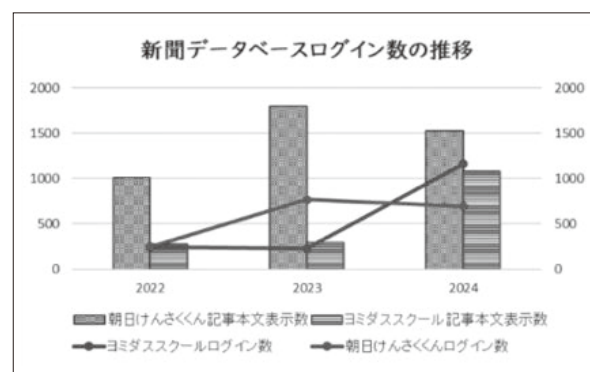
①授業支援としての新聞環境整備

授業支援は学校図書館の重要な役割の一つである。そのため新聞利用の環境整備も積極的に行っている。

・新聞データベースの整備

紙媒体の新聞も全国紙2紙(毎日・日経)、地方紙1紙(神戸)、英字新聞1紙(The

Japan Times Alpha)を購読しているが、授業での活用となるとやはり記事検索ができるデータベースが必要となる。そこで、「朝日けんさくくん」(2013年度～)と「ヨミダススクール」(2017年度～)を契約。朝日は2022年、読売は2023年からID・PW認証型からIP認証型に変更し、校内Wi-Fiに接続していれば、生徒個人のデバイスから検索できる環境とした。神戸新聞データベースに関しては前述のとおりである。実証実験中(2024.11～2025.12)なので、ID・PW認証方式で、契約上、図書館内のデバイスでの利用としている。



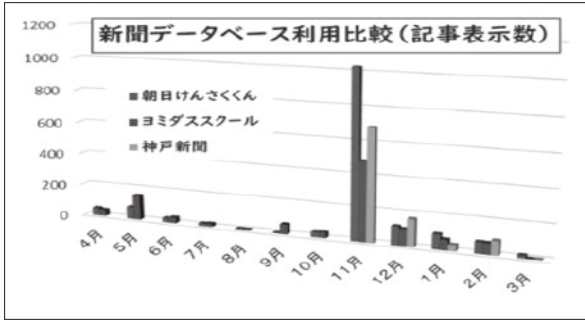
②探究基礎(中一)での新聞利用指導

2020年度から行っている情報リテラシー習得を目指した中学一年時の探究基礎の中で新聞も取り上げている(探究基礎については『灘中学校・灘高等学校 教育研究紀要 第11号』を参照)。1単位時間を使って、新聞の読み方として、紙面や記事の構成、新聞の書誌事項のレクチャー、演習ワークとして「シンプリオバトル」を行っている。2025年度は、公民科とのコラボでワークは「まわしよみ新聞」とした。



シンプリオバトルの様子

③ 日常の図書館活動としての新聞環境整備



授業以外でも新聞を日常的に情報源として読んでほしいとの思いから、上記に示したような新聞を読める環境整備のほか、地方新聞の一斉展示を2024年度より学期に一度の頻度で行っている。ニュースパーク（日本新聞



博物館)の学習キット(新博キット)のキット番号1-1(全

国の新聞各紙)を活用したものである。生徒の反応はまだ限定的だが、保護者や見学者など、大人のウケは大きかった。展示にも話題の新聞記事を活用している。また、英字新聞(週刊)は、月ごとにとじて、翌月からは貸し出しもしている。そう多くはないが、時々借りられている。

4 まとめと提言

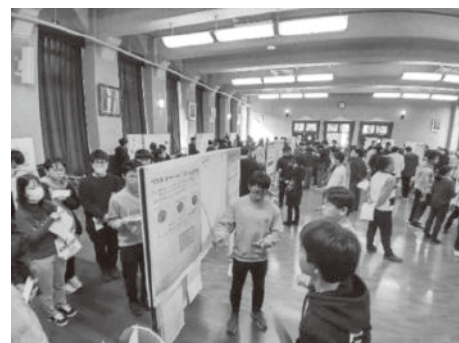
新聞にしても書籍にしてもインターネットにしても、「その情報が自分たちの探究活動に有益である」と生徒自身が感じることは、なかなか難しい。教員としては「これだけ用意したのにもっと活用してほしい」と思ってしまふ。しかしながら、教員は生徒たちにさまざまなヒントを与えることに注力して、生徒が自ら動き出すサポートに徹しなければならぬ。探究型授業の指導は難しいという声も聞かすが、「答えが一つでない学び」の世界を教員も生徒と一緒に楽しめるのが理想だと思う。

そのためにも、どんな学校でも「新聞記事検索」ができる環境整備が望まれる。新聞の役割が大きく変化していく中で、新聞の持つ

「アーカイブ機能」は探究活動に大いに役に立つ。また、日本中の新聞社が毎日、自らの取材に基づき、新聞を発行している。それらの資源を教育に使わない(使えない、使いづらい)のはあまりにももったいない。

今年度、中1公民の授業も担当し、新聞記事検索で、毎日のニュースを見るように促している。本校の生徒はたとえ家庭で新聞を購読していなくても、登校さえすれば自分の持つ端末で新聞記事にアクセスできる。この環境を使い倒してほしいと願っている。環境整備をすれば終わりではなく、教員の働きかけも重要である。環境を用意し、その環境を使うきっかけを粘り強く与え続けるのが、教員の大事な仕事である。

NIE活動はこれまで多くの方の努力で継続され、大変意義深い活動となっている。その指定校の先駆的な取り組みは、各現場で素晴らしい成果を挙げていることだと思う。しかしながら、「指定校になったからできる実践」ではなかなか大きく広がらない。コロナを乗り越え、GIGAスクールが実現した今こそ、オンラインベースでの新聞活用が全国どの学校でも可能となる環境整備を求めたい。全国の児童、生徒が自分の端末で毎朝、新聞を読むような光景を目にしたいものだ。まずは、教員自身が新聞活用の教育力に期待し、声をあげていくことも必要である。今日のこの大会がそのきっかけの一つになることを願う。全国のどんな学校でも、新聞活用のハードルが低くなり、教員が気軽に取り扱えるツールとなる日が来るのを期待したい。



全体発表会でのポスターセッション

社会への関心を育み地域や児童と共に学びあう 防災教育

発表者：教諭 岩本和也

1 はじめに

本校は全日制総合学科の高校であり、18クラス、約720名の生徒が学んでいる。本校では、自己や社会を理解し、自分の生き方や社会への関わり方について考えていくことを目的に、1年次全員が「産業社会と人間」を履修する。また、2年次から始まる「課題研究」では、自らの関心に基づきテーマを決め、自分が立てた問いを検証していく探究学習を行っている。これらの学習の中では、新聞記事等を用いながら社会の情勢を知る活動も行っている。また、自己教育力を養い、生徒の想像性や表現力を豊かにすることを目的に、朝の読書（以下、朝読）の時間を設けている。このような取り組みを通して、時代を超えて変わらぬ真理を探究し続け、心豊かに生き抜くことのできる人材育成を目指している。

2 実践の内容

(1) 朝読における新聞学習

ア. 概要

- ・朝読の時間帯に、1年次と2年次で週1回新聞を読む時間をつくる。
- ・複数の記事から興味のあるものを選び、気になる箇所等に線を引き、記事の内容について考えたこと等を記録する。

イ. ねらい

- ・新聞記事を通して社会を知り、視野を広げるとともにアイデア創出のタネを集める。
- ・新聞記事を選び、読んだ内容から心に引っかかった部分をストックしていくことで、自分の傾向や関心の方向性を知る。

ウ. 実施方法

a 準備

- ・教師があらかじめ新聞記事を選ぶ。毎回2パターンを用意する。
 - ・選んだ記事は、テキストカードに貼り付けた形で、ロイロノートの資料箱に準備する。
- b 朝読の時間
- ・生徒はロイロノートを開き、資料箱から記事を選び新聞記事を読む。
 - ・重要だと思った箇所、個人的に気になった箇所、疑問に思った箇所などに線を引く。
 - ・記事の下のスペースにコメントを残す。



図1 朝読NIEワークシートの例

(2) 兵庫県NIE推進協議会主催「記者派遣事業」

12月13日(金)、1年次「産業社会と人間」の時間に、神戸新聞社より三好正文記者を講師としてお招きし、「阪神・淡路大震災 震災前夜からの記憶」と題した講演会を行った。2025年は震災から30年の節目の年になる。生徒たちは震災を経験していないが、今自分が住んでいる神戸が当時どのような被害にあったのか、さらに、昨今のSNS等の普及による情報の受け取り方など、この先起こるかもしれない自然災害に対して自身がどう行動すべきなのか、心構えを持つことができた。



写真1 講演会の様子

(3) 神戸市立横尾小学校との小高連携授業

ア. 概要

- a 日時：令和7年2月5日（水）
- b 場所：神戸市立横尾小学校 普通教室
- c 対象：小学6年生 2クラス（50名）
- d 内容：阪神・淡路大震災と能登半島地震が起きた当時の新聞記事を用いて、「防災ジュニアリーダー」を中心とした高校生が防災授業を行う。

イ. ねらい

地元神戸で発生した阪神・淡路大震災と、昨年の1月1日に発生した能登半島地震に関して、それぞれの地震に際し、特に避難所について報道された記事から「避難所で困っていること」を読み取り、そこから見える共通点や、どのような支援が必要かを話し合い、さらには「自分たちがどのような備えをしておくべきか」を考えることをねらいとした。また、小学生のグループに高校生がファシリテーター役として入ることで、相互に意見交流を行い、互いに学びを深められるように授業計画を立てた。

ウ. 授業展開

- ①防災ジュニアリーダーとしての活動報告（石川訪問を経て）
- ②グループ活動（新聞記事を用いて）
 - ・「兵庫県南部地震 支援の輪励みに助け合う被災者」（神戸新聞 1995年1月22日）
 - ・「能登半島地震 避難3万人 足りぬ備蓄」（神戸新聞 2024年1月7日）上記の新聞記事を読み、記事から読み取

れた内容を付箋に書いて模造紙に貼る。

- ③グループを指名し、全体の前で発表（話し合った内容を共有する）

- ④振り返り、まとめ

エ. 小学生から出た意見（一部）

- ・防災バッグの中身を確認する。
- ・避難経路を調べる。
- ・地震が起きたときに逃げる所を決める。
- ・ハザードマップで危険な場所を確認する。
- ・地震が起きたときにどこに集まるのかを家族で相談しておく。



写真2 グループ活動の様子

オ. 高校生の振り返り

- a 授業を振り返って、上手くできたことや、うれしかったことは何ですか？
 - ・小学生が問いにつまんでいる時、助言やアドバイスをして手助けできたのでよかったです。
 - ・小学生たちの想いや、感じたことを知ることができたのがうれしかったです。
 - ・小学生が意欲的に取り組み、意見をたくさん出してくれてうれしかった。小学生同士で話し合うことで、新しい意見を考えられていて良かった。
- b 授業を振り返って、思うようにできなかったことや、次に生かしたいことは何ですか？
 - ・小学生たちに1つの問いに対して多くのことを書いてもらいましたが、書き終わるのを待っていると時間が足りなくなりました。よく質問をしてくれる子とばかり話していたので、全員としっかり話す

ことができませんでした。

- ・時間配分が難しかった。前半の遅れを取り戻すことを意識しすぎて急かしてしまい、たくさん意見を書こうと頑張っていた児童の思考の幅を狭めてしまった。
- c 当日の授業までにどのような準備をしましたか？ また、工夫した点や、苦労した点、意識したことは何ですか？
- ・どの順番で質問をするか、どのような聞き方をするかを考え、小学生が意見を出しやすく分かりやすいように準備をした。小学生に分からない単語があっても良いように、難しい単語の意味を調べてまとめた。
 - ・リハーサルを行って、小学生との接し方や、当日の流れを確認した。その中で、いかに短くわかりやすく伝えるかを意識して取り組んだ。



写真3 全体発表の様子

3 成果と課題

(1) 成果について

年間を通して、1・2年次生は朝読の時間に新聞記事を読む学習活動に取り組んだ。ふり返りアンケートでは、「この活動を通して自分の力が伸びたと思うか」という質問に対して、①記事を読み取る力は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて93.7%（昨年93.1%）、②考えや思いを表現する力は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて92.1%（昨年88.4%）、③社会への関心は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて90.5%（昨年

94.4%）という結果になった。昨年と同様、ほとんどの生徒にとって成長の実感へとつながったことがうかがえる。

昨年度は、時間に余裕がある人のみ記事に対するコメントを記入する仕組みにしていたが、今年度は必ずコメントを残すようにした。そのためか、②考えや思いを表現する力の項目で昨年度よりも成長を感じた生徒が増えた。

また、「新聞に対するイメージ」では、①面白くないと回答した生徒が活動の前後で74.7%から49.0%に減少（昨年79.1%から56.3%に減少）、②大人向け（高校生が読むものではない）と回答した生徒は63.2%から43.1%に減少（昨年61.4%から41.0%に減少）し、一昨年および昨年同様、新聞への苦手意識が減り、新聞に対するイメージがやや改善されたと思う。

神戸市立横尾小学校との小高連携授業では、「児童が実際に記事を読み、一人一人が自分のこととして考えることができた。考える観点を絞ってあったため、普段、課題に取り組むことが難しい児童も考え易かったと思う」と小学校の担当者から伝えていただいた。複数の新聞を比較することで、時代による変化や、時代を経ても変わらない課題について考えることができた。また、高校生にとっては、小学生に教えるという体験を通して、防災に関する意識がより高まる機会となった。

(2) 課題について

神戸市立横尾小学校との小高連携授業では、グループによる差が見られた。高校生と小学生の交流が盛んだったグループでは、楽しみながら取り組むことができていた。一方、書くことに熱中してしまい、あまり交流ができなかったグループもあった。ファシリテートする高校生の防災知識や、対話のスキルの差が明らかになった。限られた時間の中で、記事との対話だけでなく、グループ内での対話を増やすための工夫が必要である。

新聞を活用して見る・聞く・知る・伝える力を身につけ、 社会とつながる 特別支援学校からの報告

発表者：上野ヶ原特別支援学校教頭さくら訪問学級担当 藤本友美

1 はじめに

本校は、神戸市西区に位置する知肢病併置の小中高一貫した特別支援学校である。主に、神戸市西区、三木市、小野市の児童生徒が通学している。2023年度より2年間NIEの実践校としてNIE教育に取り組んできた。

1年目は「新聞を活用して見る・知る・聞く・伝える力をつける」をテーマに、基礎力の向上に努めた。まず新聞を「めくる・見る」段階から始め、「分からないことを聞く」そして「身近な地域のニュースを知る」「気になるニュースを伝える」とスモールステップで徐々に段階を上げながら進めた。そして、最終的には個人で宿泊学習新聞を作ることができた。

実践2年目は、より主体的に生徒たちが新聞記事を読み、日常生活に活かしていけるような授業を展開したいと考えた。また、卒業後地域社会で生活していく生徒たちにとって地域とのつながりは必須である。そこで2年目は「新聞でつながる」をテーマに実践を行った。

そして、新聞作成の形態も個人の新聞からグループで作る新聞へ、学校内から地域社会を取材するような新聞へと段階的に作成できるような授業展開を行った。

2 1年目の実践

(1) 新聞を見よう

最初は、新聞をめくって写真を見るところから始めた。自分の好きなキャラクターや大阪万博のキャラクター、ユニバーサルスタジオジャパンのパレードの写真等を見て、興味を持つことができた。



(2) わからないことを聞こう

わからない漢字を聞いたたり、その記事がどこからどこまで書かれているかを聞いたりすることができた。また、記事の中で分からないこと、例えば、「ガザってどこ?」「ウクライナってどこ?」と聞くことができた。



(3) ニュースを知ろう

主に、身近な地域のニュースを授業の最初に提示して、みんなで読むことにした。

地元のイベントの記事や、地元出身のスポーツ選手の活躍に関する記事では、興味を持って読むことができた。

(4) 気になるニュースを伝えよう

新聞自体に慣れてきた頃、「私の気になる記事」と題して、気になるニュースの切り抜きに取り組んだ。そして、なぜその記事を選んだか理由を書くようにした。最初は、写真を見て興味を持った記事を選んだ生徒が多かったが徐々に地域のニュースや、自分の好きなスポーツ等の記事を選べるようになってきた。

(5) 新聞を作ろう

昨年度から、行事が終わるたびに新聞を作成してきた。最初は、テンプレートを使って、どこに何を書くかも決めて書くように指導した。また、取り組んだこと（事実）と感想を書く部分を分けて書くように伝えた。



宿泊学習新聞

3 2年目の実践

(1) 修学旅行新聞の作成

ユニバーサルスタジオジャパンの「おすすめ乗り物ランキング」を話し合いで決めて、壁新聞形式にして下級生を対象に発表することにした。また、大見出しや中見出しも話し合いで考えることにした。最初は意見がまとまらず、意見が割れた。そこで編集会議と称して話し合いの仕方を学習し、司会者を決めて話し合いを進めたことで、意見をまとめることができた。意見をまとめて、1枚の新聞を作成することの難しさはあったが、その分仕上げた時の喜びは大きく、修学旅行報告会では自信を持って下級生を対象に発表することができた。



修学旅行新聞

(2) 給食新聞の作成

次は13人のグループで1枚の新聞を作ることに挑戦しようと考えた。今回は取材メモをパソコン入力し記事を作成し、Teamsを介してそれぞれの記事を提出し1枚の新聞にすることにした。11月に三木北高校とSDGsを題材としたNIE交流をすることになっており、一番身近なSDGsとして「給食」を取り上げることにした。

まず全員で、給食に関する質問事項を考えた。あくまでSDGsの観点で質問を考えることとし、「給食の食べ残しはどれくらいありますか」や「兵庫県産の野菜や魚は利用されていますか」等の質問を考えることができた。次に取材と称し、栄養教諭に直接質問しメモをとる授業を設定した。聞きながら要点を簡



給食新聞

潔に書くというメモの取り方に苦戦したが、メモの取り方を学習する良い機会となった。また、①質問を考える②取材をする③聞きながらメモをとる④Teamsを介して記事を入力するという新聞作成の一連の流れを理解することができた。

(3) SDGs新聞の作成

給食新聞と同じく、Teamsを使って記事入力し、1枚の新聞に仕上げることにした。今回は栄養教諭のみにインタビューを行ったが、今回は、校長・教頭・保健室・事務室・他学年の各先生方に協力を依頼し、「SDGsについて個人で取り組んでいることはありますか？」とインタビューを行った。普段関わることが少ない管理職や他学年の教師、事務室の方にインタビューすることは、コミュニケーションに課題を抱える本校の生徒にとっては難しいことであったが、相手が聞き取りやすい声の大きさと質問する等、各自が工夫して取り組むことができた。



SDGs新聞

(4) 兵庫県立三木北高校とのNIE交流

2024年11月1日（金）に三木北高校の1年生とNIE交流を行った。内容は、「正平調」を読んでワークシートを完成させることと、新聞記事からSDGsに関する記事を選び付箋を貼る「ぺたっとSDGs」であった。この交流授業に向けて、1学期末からSDGsに関してグループの授業で学習を重ねてきた。給食新聞やSDGs新聞の作成を通して、SDGsは身近なものであるという認識が浸透し、SDGsに関する記事を探すこともスムーズにできるようになった。交流の当日は、こちらの想像以上に三木北高校の生徒とコミュニケーションをとりながらワークシートや「ぺたっとSDGs」に取り組むことができた。三

木北高校とは、以前から生徒会やサッカー部の交流があったが、NIEの実践を通してまた1つ新しいつながりができた。

(5) エフピコ出前授業

SDGsに関する学習を進めていくうちに、生徒たちからもっとSDGsに関する学習を深めたいという声が聞かれた。そこで「小野市とエフピコトレー再利用で協定」という記事を提示したところ、非常に興味を持った。



実際に、この記事の中に出てくる、小野市とエフピコが共同制作したエコトレーを持ってきて見せたところ、トレーの裏面に印刷してあるマークに疑問を感じ、調べることになった。

そして、そのうちに「エコトレーとは?」という疑問に至り、実際にエフピコの方に来ていただいて、エフピコ方式のリサイクルに関する講義を受けることになった。

講義終了後、学んだことをもとにトレーのリサイクルを呼びかける新聞を作成した。大見出しと中見出しを考え、内容も生徒たちで考え完成することができた。家庭でもトレーのリサイクルに取り組む生徒が増え、学んだことを実生活に活かすことができた。



エコトレー新聞

(6) 新聞でつながる

以上のNIEの実践を通して、高等部全体、学年以外の教員、給食室、事務室等、三木北高校、エフピコというように、つながりを広げることができた。インタビューを行ったことで新しい人間関係ができ、完成した新聞を見て声をかけられることが多くなった。

4 おわりに ～2年間のまとめ～

実践1年目は、段階的に課題を設定し、新聞を「見る・聞く・知る・伝える力」を付けることを目標とした。その力を基に2年目は発展的課題として、生徒自らが取材し記事にし、協力して1枚の新聞に仕上げることが目標とした。その際、スモールステップで進めることに注力した。

スモールステップで

- ①手書きで個人新聞を作成する（枠あり）
- ②手書きで個人新聞を作成する（枠なし）
- ③手書きでグループ壁新聞を作成する。
- ④パソコンで取材した記事を入力しTeamsを使って1枚のグループ新聞を作成する。
- ⑤見出しから構成まで考えて、Teamsを使って1枚のグループ新聞を作成する。

成果としては

- ・新聞が身近なものになり、ニュースについて話をする生徒が増えた。
- ・短い記事を読んで、聞かれたことに答えられるようになった。
- ・表現力がついた。→修学旅行の短歌を明石市と丹波市に投稿した
- ・熟語の意味を類推できるようになった。
- ・話し合いの仕方やメモの取り方が上達した。
- ・分からないことを探究したいという気持ちが出てきた。
- ・SDGsを自分のこととしてとらえ実践できるようになった。

以上、NIEの実践を通して卒業後社会で生きていくために必要な「見る・聞く・知る・伝える・つながる力」を身に付けることができた。この力は、必ずやこの先、生徒たちが生きていく上で彼らを支える力となると確信している。



三木北高との交流

社説読み比べ

～情報の比較・検討のための新聞活用～

発表者：教諭 森澤亮介

1 はじめに

本校は県下で4番目に長い歴史を持つ学校であり、全日制の「人と自然科」と「総合学科」及び定時制を配置し、さまざまな進路目標を持つ生徒に向けて幅広い教育を行っている。

2023年度にNIE実践指定校になり、今年度で3年目になる。これまで「総合的な探究の時間」である「ARIMA探究I」において、情報収集を行うなどを主に活用してきた。また、「私の推し記事コンクール」や「いっしょに読もう！新聞コンクール」にも多数の生徒が作品を提出し、優秀賞を受賞した生徒もいる。昨年度は新たに1年次「産業社会と人間」の授業の中でも新聞の活用を始めた。今回はその実践を中心に紹介したい。

2 実践内容

①記者派遣事業



2025年1月24日（金）の5,6限に、神戸新聞NIE・NIB推進部の三好正文シニアアドバイザーを講師としてお招きし、講義をしていただいた。最初に、「最近、気になるニュースは？」ということで生徒同士の話し合いの時間を設けたところ、実にさまざまな話題が出てきており、生徒の関心が多方面にわたることが再確認できた。また、新聞は昨

年行われた兵庫県知事選挙や衆議院議員選挙において批判されることがあったが、三好氏はそのことを踏まえて、「今ほど『正しい情報を読み解く』ことが大切な時はない」と強調された。新聞の特徴として①一覧性、②網羅性、③信頼性、④保存性の4点を挙げており、SNSでの情報収集や発信が盛んな現代においても、これらの点において新聞の優位性は揺るがないだろうとのことであった。

<講義を聞いた生徒の感想より>

- ・メディアリテラシーを身につけるとともに、情報収集の1つの手段として新聞を読むということを習慣化していきたいと思った。
- ・SNSのニュースばかりを読んでいたが、それだけでは知りえないこともあると感じた。
- ・ニュースを疑ってみることが大事だと思った。同じ内容の記事でも本文や写真が異なっているので、読み比べることが大事である。

②授業での取り組み ～社説を読む～

2025年2月7日（金）の5,6限に「批判的読解力や多様な物事の見方を身に付けよう～各紙の社説を比較して～」と題した授業を行った。この授業は公開授業として設定され、県内の高等学校から10名弱の教員と神戸・読売新聞の記者が来校し、授業を見学された。「社説とはそもそも何なのか」という話を皮切りに、以下の話題の中から各生徒に2つずつ割り振り、読解させたうえでグループで話し合いを行った。（A～Cの話題は比較的似通った意見、D～Fは各紙意見が分かれる内容となっている）

- A：成人の日（読売一朝日）
- B：大谷選手 MVP（神戸一読売）
- C：能登半島地震1年（日経一毎日）
- D：エネルギー基本計画（日経一毎日）
- E：同性婚訴訟（産経一朝日）
- F：首相アジア訪問（産経一読売）

なお、読解の際には以下の点に注目させた。

- ・主張（何を一番訴えたいのか）
- ・根拠（根拠、データは示されているか）
- ・トーン（肯定的、批判的、中立的など）
- ・自分の意見（どちらが自分の意見に近いか）

背景知識を必要とする話題も多く、記事の読み込みに苦労する生徒もいたが、用語を各自のタブレットで調べたり、グループワークの際に他の班員や教員に尋ねたりして、理解に努めた。

次年度から始まる「ARIMA探究I」で情報収集をする際にも、今回の学びを生かして行って欲しい。



<授業を終えた後の生徒の振り返りより>

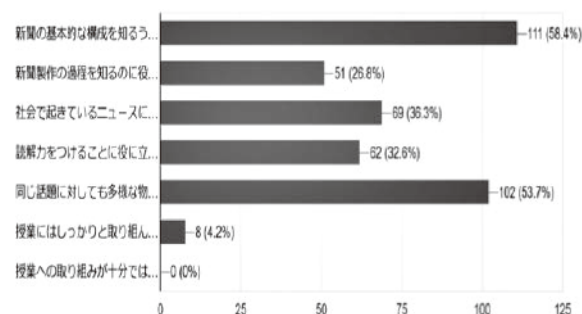
- ・新聞社によって記事の取り上げ方は異なるため、1つの記事を見ただけでそれが全てだと思いつまみしないようにすることが大切だと思った。
- ・書かれている記事の内容について、証拠やデータをさらに調べて確かめることも必要だと思った。
- ・日ごろからたくさんのニュースを見て、社会のことを知っていくことや、語彙を増やしていくことが大切だと思った。

3 成果と今後の課題

(1) アンケート結果と分析

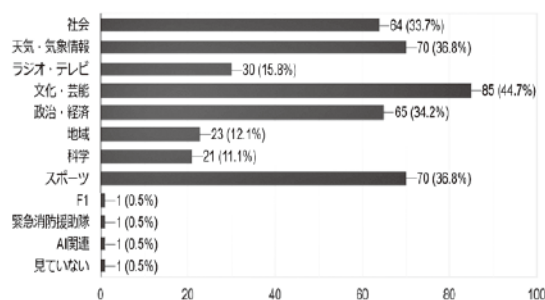
「産業社会と人間」で行われたこれらのNIEの取り組みから、生徒がどのようなことを学んだのかを調べるために、受講者全員に対して3月7日（金）にアンケートを実施し、190件の回答を得た。

①3学期に行われた「新聞の読み方講座」や「社説比較」の授業について、あてはまるものを選びなさい。（複数回答可）



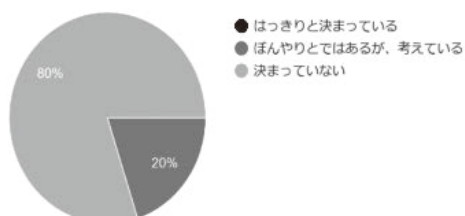
新聞の構成については記者派遣事業で詳しく話をさせていただいたので、生徒の印象にも強く残っているようである。また同様に、公開授業で扱ったテーマに直結する「同じ話題に対しても多様な物事の見方があることを知るのに役に立った」と答えた生徒が50%を上回った。今回の取り組みが一定の成果を得たといえる。引き続き探究を進めていく際にも、情報の比較・検討を意識させていきたい。

②現在関心のあるニュースの話題を次から選びなさい。（複数回答可）



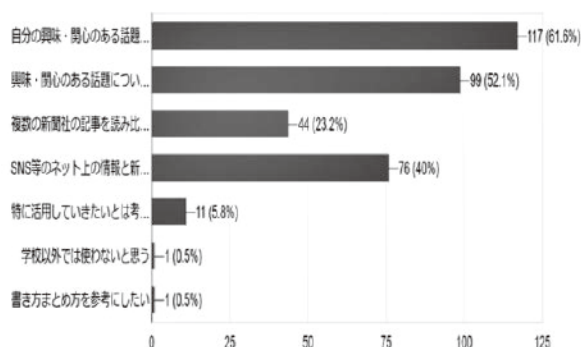
生徒にとって身近な話題である「文化・芸能」が他を大きく上回った。「天気」や「スポーツ」などもおそらく同じ理由で関心が高い。「政治」や「社会」など少し難しい話題に関しても思ったより関心が高いこともわかった。

③現時点で自分の探究したいテーマが決まっていますか？あてはまるものを選びなさい。



はっきりと決まっていると答えた生徒はいなかったが、ぼんやりと考えている生徒が現時点で20%もいたことは、良い意味で想定外であった。今後の探究活動に期待が持てる結果となった。

④2年生から探究を進めるうえで、新聞をどのように活用していきたいと考えますか。あてはまるものを選びなさい(複数回答可)



新聞を探究のための話題・テーマ探しに活用すると答えた生徒が一番多かったが、何か情報をより深く知るのに活用すると答えた生徒も半数を超えている。

⑤「産業社会と人間」の授業を振り返って、一番心に残っていることをまとめなさい。(自由記述)

・今までの産業社会と人間の授業で一番心に残っている内容は、「社説を読む」です。(中

略) たくさんの情報が入り混じる中で、全ての情報を鵜呑みにすると、どうしてもデマ情報に踊らされて、結果的に不利益を被ることはよくあります。だから、まず情報を疑って複数の情報を比較し、自分で情報を見極めることはとても大切だと思いました。この授業で、情報収集は受動的ではなく能動的にするものだと学びました。

・同じ記事でも印象がガラッと変わるので新聞を見ることがない私にとって社説はとても興味深い授業でとても心に残りました。

・私は新聞の読み比べが一番心に残りました。新聞社や書く人によってさまざまな書き方があり、さまざまな感じ方ができるということがわかりました。(中略) 1つの情報源を鵜呑みにせず、できるだけたくさんの情報源からいろんな考え方を知ることが大切だということが心に残りました。なぜなら、私は1つの情報源ばかり頼りにしているように思えたからです。これからは、たくさんの考え方に触れていけるようになりたいと思います。

(2) 成果と今後の課題

昨年度はNIE実践指定校2年目であり、新聞コンクールでの表彰や公開授業など学校外に対して校内の取り組みをより広く知ってもらうことができた。上記の感想からもわかるように、情報の「比較・検討」をするうえで新聞は有力なツールであることも生徒はよく理解していた。また、新聞同士だけでなく、SNSと新聞やテレビの情報とを比較してその真偽を判断することについてもこれからの世の中で必要になっていくスキルだと考える。授業の中で繰り返し指導していきたい。

一方で、NIEへの取り組みが年間を通して継続して行われなかったこと(今回は3学期に集中した)、そして主に探究の時間にしか活用できなかったことは反省点である。学校全体としての活動を増やしつつ、年間を通して計画的に実践を進めていきたいと考える。

NIE活動を土台とした地域活性化への取り組み

～子育て支援やSDGsなど地域課題を考える～

発表者：臨時講師 矢野聖人

1 はじめに

本校は、昭和59年4月、加印地区第9番目の全日制普通科高校として設立された。その開校にあたっては、設立の5年前から播磨町に県立高校を設立して欲しいという地域住民の熱い思いの上に設立され、42年目を迎えた。

開校当初はひと学年8学級でスタートし、現在は4学級まで減少したが、素直で元気な学校風土は引き継がれています。過去には、英語コース、グローバル情報コミュニケーションコース、芸術類型、芸術保育類型へと改編され、現在は地域デザイン類型がある。地域デザイン類型では、播磨町と連携協定を結び、播磨町役場の全面的支援を受けて、生徒たちが地域を学び、地域課題を考え、課題解決に取り組む探究活動を行っている。また播磨町でのさまざまなイベントに参加するボランティア活動は、地域の方々から感謝の意をいただけるだけでなく、普段の

学校生活とは違う生徒の表情が見られさまざまな可能性を創造させられる。地域探究活動とボランティア活動は、本校の特色ある教育活動である。



2 地域デザイン類型にNIEを活用

地域デザイン類型は令和4年度に設置され、今年度で全学年が新類型に移行した。学校設定科目「HariMAP I」・「HariMAP II」・「プレゼンテーション演習」を通して、地域の課題を考え、調べて、解決に向けた提案を

する探究活動を行っている。この活動には、播磨町や兵庫大学の全面的な支援があり、播磨町役場、議会、兵庫大学の教授、その他関係機関と協働した取り組みを行っている。

今年度から、地域デザイン類型専用の教室を整備し、日常的に調べ学習や発表の練習ができる環境を整えた。



探究活動を通して、生徒一人一人が主体的に学びに向かう力、チームで協働して活動する力、地域の多様な方々との連携に必要なコミュニケーション力を育成することで、進学・就職の進路実現を目指している。学校設定科目のほか、「総合的な探究の時間」を活用して、1年生では調査の手順や発表方法など、調査研究の基礎になる知識・技能を学ぶ。2年生では各自で課題を設定し、実際にフィールドワークを行いながら探究活動を行う。3年生では調査研究の成果をまとめる活動を行っている。

地域デザイン類型の1期生である、39回生が2年生の時に授業を開始したが、担当者の手探りの中、さまざまな課題が見えてきた。

本校生徒の特徴として、思っていることややりたいことを胸に秘めているが、自ら表現することが不得意で、教員が深く対話しないと出てこない生徒が多くいる。これは、高校卒業後の進路についても同じである。小中学

校での成功体験が乏しく、自分は何もできないと思って入学してくる生徒が多い。その結果、探究活動で課題設定をする際に、どうしてもやり切る自信がなくなかなか課題設定ができない現状がある。

また、近年SNSの普及により、目にする情報は自分にとって興味・関心のあるものに偏り、社会で何が起きているのかを知らない生徒が多くいる。特に、本校の生徒については、周りの事を考える余裕のない生徒が多いため、社会のニュースには無関心になる傾向がある。



このような現状から、NIEを活用して、高校生が地域の課題を解決したニュースや、取り組みを調べさせ、同じ年代の高校生が活躍していることを知り、「自分たちでもできる」ということを理解してもらう必要があると考えた。また、新聞を広げて記事を読むことにより、普段目にしないニュースに触れさせ、興味・関心の幅を広げる必要があると感じた。インターネットでの情報収集は非常に簡単で、大量の情報を取得することができる一方、調べる検索キーワードによっては情報が偏る。その問題をクリアするためには、新聞記事というメディアは万能であると考えた。



地域デザイン類型の教室に新聞を設置し、いつでも、だれでも自分の好きなタイミングで新聞が閲覧できるように配置している。

3 実践の内容

(1) 通常授業での活用

2024年度当初から2カ月半程度は、授業内で新聞を活用する時間を設け、「今、社会で何が起きているのか」、「地域のニュースで最近何があったのか」、「高校生が活躍した記事はないか」と、じっくり調べて考える力を養った。

(2) 兵庫大学・松本教授による講義

本校では、2018年9月より、兵庫大学との連携協定を結び、さまざまな取り組みを行っている。この地域デザイン類型の授業には、月に1回程度現代ビジネス学部長の松本茂樹教授による講義を受けアドバイスをいただいている。専門は地域創生SDGsで地域ビジネス、地域の活性化等さまざまな活動に取り組まれている。松本教授からも、新聞記事の探し方や活用の仕方について、アドバイスをいただいた。



(3) 記者派遣



地域デザイン類型の生徒26名が毎日新聞記者の入江直樹様の講義を受講した。見出しの付け方・取材の仕方・メディアリテラシーについて講義をいただいた。受講者は今年度のポスターセッションへ向けての見出しの付け方、次年度以降、フィールドワークでの取材する力を身に付ける絶好の機会となった。



(4) 播磨町議会議員への提言会

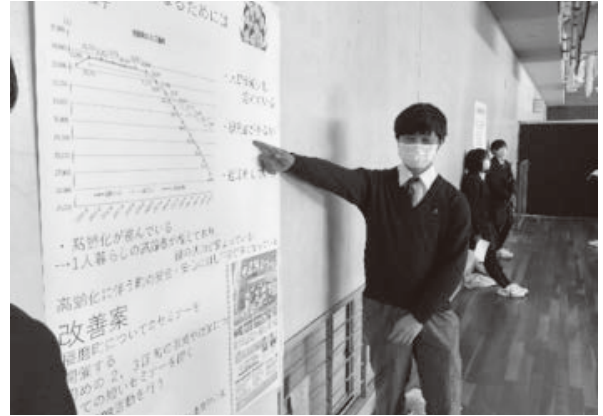
年に1回、播磨町議会の議員13名にご協力いただき、生徒が播磨町の課題を研究した結果を提言として聞いていただきました。提言を聞いていただくと同時に、自分たちでできそうなことも併せて話し合い、意見交換を行った。



(5) 地域デザイン類型発表会

1年間、各グループで研究してきた成果を発表する機会として、ポスターセッションによる発表会を行った。新聞記事から集めて、学習した内容から、自分たちの意見を踏まえながら、1枚のポスターに仕上げて発表した。聴取者としては、保護者、播磨町役場、播磨

町議会、兵庫大学、近隣中学校の教員、第1学年の生徒と、多くの方に聞いていただいた。



4 成果と今後の課題

今年度実施した結果、こちらが考えていた課題は解決できた。生徒は、自分たちもやればできると実感し、興味・関心の幅を広げ、課題設定をしながら調査・研究、発表まで進めることができた。これはNIE活動の成果であると考え。この結果を振り返り、次年度はいよいよ考えてきた課題解決のアイデアを、実行に移すこととなるので、さらなる成果が出るようサポートしていきたい。

今後の課題として、今回NIE活動に取り組んだ2年生は進級し、また次の学年が授業を開始する。今年度と同じように、NIEの活動を通じて、生徒一人一人が主体的に学びに向かう力を育て、自らが課題設定をしながら調査・研究、発表へと進めていきたい。毎年、同じ繰り返しとなるが、指導を進めていく中で絶対に欠かすことのできない取り組みであると考え。





定時制高校でのNIE活動

～気になる記事を紹介し合い、授業で活用～

発表者：教諭 住本拓自

1 はじめに

本校は神戸市にある1学年2クラスで生徒数約100名の定時制高校です。経済的な理由から、昼間アルバイト等を行い家計を支えたり、中学校時代に不登校を経験していたり、基礎学力面で課題があるといったようなさまざまな困難を抱えている生徒が数多くいます。

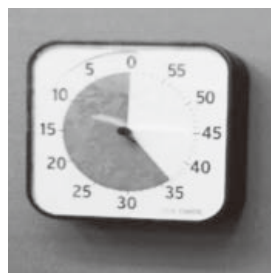
そういった現状を踏まえて、今年度、大きく四点のことに重点的に取り組んでいます。

一つ目は、昨年度から副担任制を導入し、担任と副担任がクラスを担当することで、生徒に手厚い支援ができる複数担任制です。

二つ目は、すべての生徒にわかりやすい授業を目指し、「タイムタイマー」をすべての授業教室に設置することで、時間の管理が行いやすいような環境です。

三つ目は、一人一人の状況や希望に応じて、学習や生活における困難の改善や克服を目的とした通級指導の実施、生活する上で日本語に不安がある生徒に対しての日本語指導の実施など、生徒の困りごとを解消できるような指導実践です。

四つ目は、新聞の活用です。多くの生徒は新聞に馴染みがない状況ではありますが、2024、2025年度に実践校指定をいただき、新聞を教育活動に用いた授業改善、授業力向上を目指して、学校全体で魅力ある授業づくりに取り組みました。



各教室に設置しているタイムタイマー (右写真)

2 実践の内容

(1) NIE推進プロジェクトチームの結成

NIEの活動を学校全体で行うため、4月にプロジェクトチームが立ち上げられ、校長、教頭、および4名の教員が委員を務めることになりました。

(2) 事前アンケートから見る現状

(1) 家庭(かいてい)で新聞(しんぶん)を購入(こうにゅう)していますか?
購入している 購入していない わからない

(2) (1)で「購入している」と答えた人のみ答えてください。どの新聞を購入していますか?(複数回答可)
朝日新聞(あさひしんぶん) 毎日新聞(まいにちしんぶん)
読売新聞(よみうりしんぶん) 産経新聞(さんけいしんぶん)
日本経済新聞(にほんけいざいしんぶん) 神戸新聞(こうべしんぶん)
その他 わからない

(3) これまで、新聞(しんぶん)を読(よ)む機会(きかい)はありましたか?
現在、ほとんど毎日(まいにち)読んでいる 現在、時々(ときどき)読んでいる
現在、全く(まった)く読んでいない 今まで一度も読んだことがない

(4) (2)で読むと答えた人のみ答えてください。どんな内容の記事を中心に読みますか?(複数回答可)
事件(じけん) 政治(せいじ) 地域(ちいき) テレビ欄(らん)
その他

(5) 新聞(しんぶん)に対して、どのようなイメージを持っていますか?

(6) 時事(じじ)ニュース(=世(よ)の中(なか)の(なか)の情報(じょうほう)は、選(しゅう)にどのくらいのペースで確認(かくにん)していますか?
 ※例(れい):「テレビのニュース番組(ばんぐみ)」、「ネットニュース」など
ほぼ毎日(まいにち)確認(かくにん)している(週(しゅう)に5日以上)
よく確認(かくにん)している(週(しゅう)に5日以上)
時々(ときどき)確認(かくにん)している(週(しゅう)に3日以上)
たまに確認(かくにん)している(週(しゅう)に1日以上)
全く(まった)く確認(かくにん)していない

(7) 時事(じじ)ニュースの情報は、何(なに)で見(み)ますか?(複数回答可)
スマホ パソコン テレビ ラジオ
その他(雑誌(ざっし)、人(ひと)から聞いたなど)

(8) (7)で「スマホ」、「パソコン」と答えた人のみ答えてください。その中でも、特に何(なに)を使って、時事(じじ)ニュースの情報を(い)見(み)ますか?
SNS ネットニュース ネット新聞 その他

(9) 得(え)た情報(じょうほう)について、誰(たれ)かと話(わ)をする機会(きかい)はありますか?(複数回答可)
友人(ゆうじん) 家族(かぞ) アルバイト先 その他の人(ひと)あまり話(わ)さない

上記の事前アンケートを2024年の4月19日の4時間目のLHRにて全校生徒を対象に実施しました。その結果をまとめると、大きく四点の現状、課題が見えてきました。

- ① 8割近くの生徒が、新聞が家(いえ)にない環境(かんげい)にあり、なじみがない
- ②新聞に対するマイナスイメージとして、「文字(もじ)がたくさんあって読(よ)みにくい」、「堅(かた)苦(く)しい」といった回答(こたへ)が複数(たぐひ)あった

- ③時事ニュースを確認する頻度について、半数以上が週1回以下しか確認していない
- ④時事ニュースの確認する方法は、生徒の7割近くがスマホで、SNSから情報を得ている

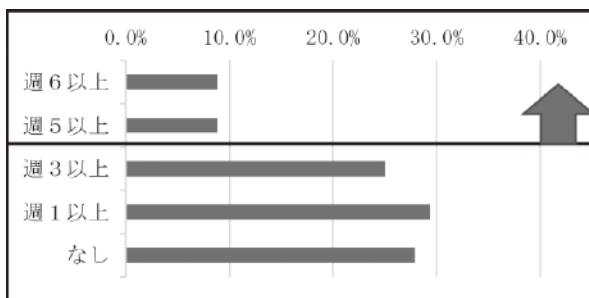
以上の内容を踏まえて、下記のような目標を設定しました。

目標

新聞を通して、世の中の出来事やさまざまな課題、多様な考え方に触れることで、新たな「気づき」を自分の中に発見し、主体的に考え表現し自ら発信する能力を育成する。

数値目標

事前アンケートの質問（6）の質問で、「週に5日以上確認している」の割合を、2年間で50%以上にする（まずは今年1年間で30%以上）。

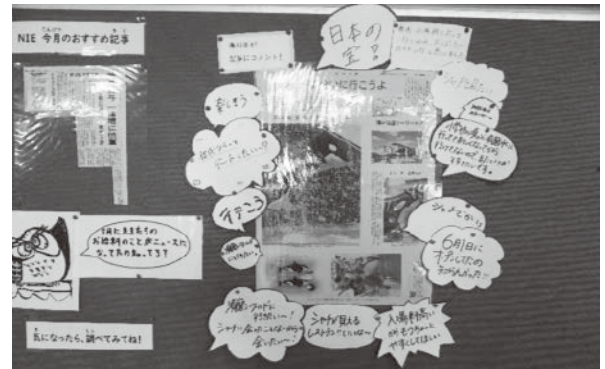


そして、この目標を実現するために、プロジェクトチーム内で相談し、三点のことに取り組むことになりました。

- ① LHRやコグトレで活用できる新聞を活用した教材をプロジェクトチームで作成し、教員間で共有する
 - 新聞記事に触れる機会を作ることで、読み方を習得し、新聞を活用できる力を身に付ける
- ② 職員室前の掲示板に、月に1回ペースで新聞記事にコメントをつけて掲示する
 - 時事ニュースへの興味関心を高める
- ③ 新聞を活用した授業を、必要に応じて各教

科で実施する

→世の中の出来事や課題にふれる機会をもつ



(3) コグトレ用教材の作成例（「タイトル」）

※「コグトレ」とは…認知機能を強化するトレーニングで、覚える、数える、写す、見つける、想像するなどの力の向上が期待できる。

- ・「チョコレートが抱える問題」（自分の意見）
- ・「食べられるロボット」（新聞の読み方、内容理解）
- ・「島を開拓しよう！」（内容理解、想像力）
- ・「6コマ漫画」（コメントを考える）
- ・「くれよんきんぐ」（想像力）
- ・「クロマグロの漁獲枠拡大」（言葉探し）
- ・ナンスケ（パズル）

(4) 学年、教科での取り組み例

3学年

・三年生のGoogle ClassroomにはNHK 1分間ニュースのURLを毎日貼り付けています。

地歴公民科

・公共の授業で、時事問題として（総裁選、首相選出、知事選挙、知事問題、アメリカ大統領選挙、物価、コメ問題など）定期的に、新聞やニュースの内容を取り上げました。

理科

・科学と人間生活の授業において、プリントで「アルミ缶の再生について」の新聞記事を提示し、記事の内容について各自が問いに答えることで授業内容を補いました。

・化学基礎の授業において「温度のセ氏とカ氏って何」の新聞記事を提示し、記事の内容について各自が問いに答えることで授業内容を補いました。

保健体育科

・保健の時間で、道路交通法改正で、自転車が飲酒運転の罰則対象になることや、自転車のながらスマホ運転も罰則対象になることを説明する際に新聞記事の内容を取り上げました。

3 今後の課題と展望

(1) 事後アンケートから見る現状

(1) 今年度(4月)になってからの、ニュース(テレビやスマホも含めて)や新聞(しんぶん)に触(ふ)れる機会(きかい)は増えましたか?
とても増えた 少し増えた 変わらない 少し減った とても減った

(2) (1)で「とても増えた」「少し増えた」と答えた人のみ答えてください。どんな内容の記事を中心に読みますか?(複数回答可)
事件(じけん) 政治(せいじ) 地域(ちいき) テレビ欄(らん) その他

(3) 今年度(4月)になってからの、ニュースや新聞(しんぶん)に触(ふ)れる機会(きかい)は具体的に(くたいてき)にどのぐらいでしたか?
現在(げんざい)、ほとんど毎日(まいにち)読んでいる 現在、時々(ときどき)読んでいる
現在、全(まった)く読んでいない 今まで一度(いちど)も読んだことがない

(4) 新聞に(たい)して、現在(げんざい)のようなイメージを持っていますか?

(5) 時事(じじ)ニュース(=世(よ)の中(なか)の情報(じょうほう)は、速(しゅう)にどのぐらいのペースで確認(かくにん)していますか?
 ※例(れい):「テレビのニュース番組(ばんぐみ)」、「ネットニュース」など
ほぼ毎日(まいにち)確認(かくにん)している(週(しゅう)に6日以上)
よく確認(かくにん)している(週(しゅう)に5日以上)
時々(ときどき)確認(かくにん)している(週(しゅう)に3日以上)
たまに確認(かくにん)している(週(しゅう)に1日以上)
全(まった)く確認(かくにん)していない

(6) 時事(じじ)ニュースは、何(なに)で見ますか?(複数回答可)
スマホ パソコン テレビ 新聞 ラジオ
その他(雑誌(ざっし)、人(ひと)から聞いたなど)

(7) (6)で「スマホ」、「パソコン」と答えた人(ひと)のみ答えてください。その中でも、特に何(なに)を使って、時事(じじ)ニュースの情報を(か)見(み)ていますか?
SNS ネットニュース(Yahoo!ニュース、スマートニュースなど)
ネット新聞(読(よ)売(う)り新聞(しんぶん)オンライン、朝(あ)日(にっ)新聞(しんぶん)デジタルなど) その他

(8) 得(え)た情報(じょうほう)について、誰(たれ)かと話(わ)をする機会(きかい)はありますか?(複数回答可)
友人(ゆうじん) 家族(かぞ) アルバイト先(まへ) その他の人(ひと) あまり話(わ)さない

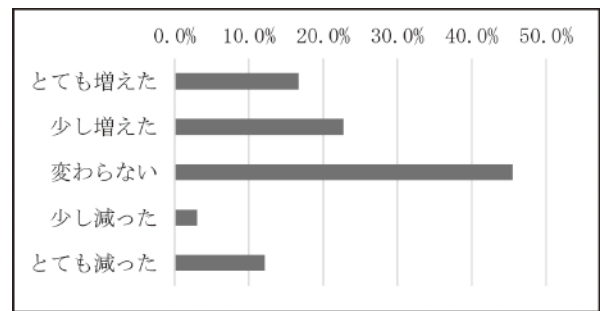
(9) 現在(げんざい)、どんな内容(ねいよう)のニュースに興味(きょうみ)がありますか?

上記のような事後アンケートを1月17日の4時間目のLHRにて全校生徒を対象に実施しました。

≪分析の一部≫

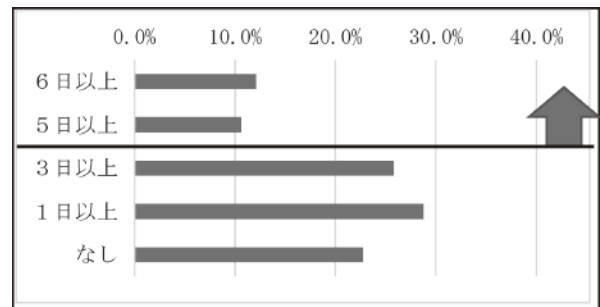
事後アンケート(1)の質問について

4月の時と比べて、約40%の生徒が「とても増えた」、「少し増えた」を選択しているという点で、成果がありました。その一方、残りの約60%の生徒には変化がなかったり、減少しているという点で、今後の課題がみえました。



事後アンケート(5)の質問(数値目標)について

数値目標について、事前アンケートでは「週に5日以上確認している」の割合が17.6%でした。今回の事後アンケートの結果、その割合が22.7%に上がっており、成果が見られました。しかし、年間目標の30%には届かなかったことは、今後の課題です。



(2) 今年度から実施の内容

事後アンケートの結果を受けて、昨年度の活動を継続しつつ、以下の二点を、今年度新たに行うことを、プロジェクトチームで話し合いました。

- ①プロジェクトチームで作成した教材への認知度を高め、より使いやすいようにするため、新たな教材が完成した際に、職員朝礼で連絡を入れて周知を図る
- ②学期に一回程度、LHRにて全学年で統一の教材を使った活動を実施する



多文化共生への橋がけ

～新聞記事の「やさしい日本語」書き換えを通して～

発表者：主幹教諭 福田浩三

1 はじめに

2024年1月1日における在留外国人は332万3374人であり、日本の人口1億2488万5175人のおよそ2.66% (38人に1人) となる。この割合は今後増加が予想されるため、在留外国人とのコミュニティ作りや災害時や就学に関わる言語面での支援の充実は急務であると考える。

筆者は、これまでNIE実践を通して生徒に

- ・幅広い分野における興味関心を高める
- ・情報の真偽を含め整理し理解する能力を得る
- ・効率よく効果的に情報を発信する能力を得る

など、今後のグローバル化・情報化社会に必要なコミュニケーション能力を生徒が獲得することを目指してきたが、近年在留外国人とのコミュニケーションに効果が期待される「やさしい日本語」を取り入れることで、生徒に多文化共生・国際理解を意識付けるよう心がけることとした。本実践の全体像を図1に示す。

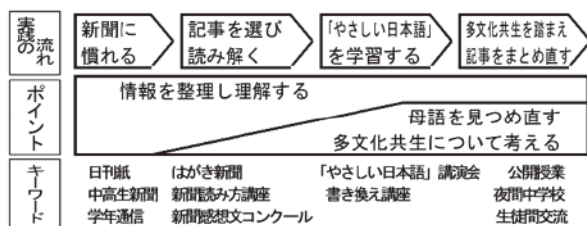


図1 実践の全体像

2 研究の準備段階「新聞に慣れる」

本研究実践では新聞記事の活用が前提となる。このため、新聞に慣れることを前提に、以下のNIE実践を行った。

(1) 日刊紙各紙の設置

生徒が登校時に目にする生徒昇降口にNIE実践指定校として提供される新聞（時期により3紙または6紙）を、各紙記事の取り扱い

が比較できるよう「今日の朝刊1面」として掲示する（図2）。各紙は毎日取り置きを行い、部数が揃った段階で学年の生徒へのNIE実践に活用した。



図2 日刊紙1面の比較

(2) 朝日中高生新聞の配布

1年生の生徒全員に「朝日中高生新聞(週刊)」を毎週配布し、朝の読書の時間(8:25～8:40)の読み物として活用した(図3)。本紙は紙面サイズが日刊紙に比べて小さく、内容も中高校生向きに読みやすくまとめられているため、生徒の新聞に対する固いイメージの軽減に役立てた。



図3 朝の読書を利用した新聞購読

(3) 学年通信の配布

筆者が教師と生徒・保護者の連携した教育活動の実践を目指して作成する学年通信(図4)を1年生の生徒に毎週配布した。学年通信は日刊紙を模したデザインにて生徒の身近な活動を新聞形式で伝えるために、これも生徒の新聞に対する固いイメージの軽減に役立てた。

(4) 感想文のはがき新聞活用

新聞の持つ表現力を生徒に意識づけるため、校内行事ごとに課している感想文にはがき新聞を活用した。生徒は感想文を複数の内容に分け、



図4 日刊紙に模した学年通信

見出しや絵を加え配置を考えることにより読み手に伝わりやすい表現を心がけた(図5)。



図5 はがき新聞による生徒感想文

(5) 神戸新聞の購読

1年コミュニケーション類型生徒29名が朝の読書の時間の読み物として神戸新聞朝刊を4日間購読した。この新聞は新聞読み方講座においても活用し、気になった記事について切り抜きし、「ひょうご新聞感想文コンクール」用の記事とした。この記事は2学期に実施の「やさしい日本語書き換え講座」においても活用した。

(6) 新聞読み方講座

1年コミュニケーション類型生徒29名を対象に3回、外部講師による新聞読み方講座を実施し、新聞の持つ網羅性・一覧性・信頼性など新聞の持つ社会的役割や記事見出しの重要性に

ついて学習し、以後新聞を読む際に役立てた。また、新聞から読み解く国際理解・SDGsについても考えた。さらに筆者が講師となり、1年生全員に対し、新聞における見出しの役割の重要性を伝える講演を行い、筆者掲載の過去記事を用いた見出し付け実践を行った(図6)。



図6 見出し付け実践講演の様子

(7) ひょうご新聞感想文コンクール

コミュニケーション類型の1年生29名を対象に、夏季休業課題として各自が読んだ新聞から最も興味・関心をもった記事を選び、その感想文を作成することで、新聞に対する興味・関心を高める試みを行った。生徒は感想文の作成から、より相手に伝わる文章の表現等について考えた。提出された感想文は授業担当者が校内選考を行い、2作品を「第14回ひょうご新聞感想文コンクール」に応募した。これはコンクール応募という目標を生徒に持たせることで、感想文作成への意欲を高めるねらいがあった。

3 「やさしい日本語」新聞書き換え講座

コミュニケーション類型1年生の生徒29名を対象に、これからの社会のグローバル化を見据え、生徒が日常的に、日本語を母語としない他者の観点で日本語を捉えることを目的に、「やさしい日本語」を用いた新聞記事の書き換え講座を実施した。生徒が「ひょうご新聞感想文コンクール」応募のために選んだ新聞記事を書き換え対象とし、単に記事を「やさしい日本語」で書き直すのではなく、その要点を中心にA5サイズという限られた紙面の「はがき新聞」にまとめる方法で行った。その手順を以下に示す。

(1) やさしい日本語講演会

外部講師による「やさしい日本語」の講演会を行うことで、在留外国人とのコミュニケーションのみならず、日常会話においても母語である日本語について考え直す機会とした。この講演会は1年生に加え、3年生も聴講した(図7)。



図7 やさしい日本語講演会の様子

(2) やさしい日本語書き換え講座

1年コミュニケーション類型生徒29名を対象に、これからの社会のグローバル化を見据え、生徒が日常的に、小さい子どもや日本語を母語としない他者の観点で日本語を捉えることを目的として、「やさしい日本語」を用いた新聞記事の書き換え講座を5回行った(図8)。

生徒が興味を持った新聞記事(「ひょうご新聞感想文コンクール」応募用にした記事)を書き換え記事として活用し、「やさしい日本語」を用いるだけでなく、A5用紙という制約の中でより読み手に内容が伝わるようなまとめの工夫を行い、最後にその発表までを行うこととした。

初回は前述の「やさしい日本語講演会」を元に、文章の「やさしい日本語」を用いた書き換え演習を行い、2～4回目で生徒は選んだ新聞



図8 新聞記事書き換えの様子

記事を元に、その伝えたい内容や要約として必要な箇所を選び出し、その内容を「やさしい日本語」を用いてA5用紙にまとめ直した(図9)。この際、新聞紙面を参考に、より内容が伝わりやすくなるように見出しや文言、紙面レイアウト等について検討した。書き換え作業は班内での意見交換やICTを効果的に活用した。

5回目(最終回)は、まとめ直したA5紙面

を用いて、生徒各自が興味を持った新聞記事の発表を行った。初めに班内発表を行い各班より代表者を選出し、その代表者がプロジェクターで拡大提示された自作品の紙面を用いて全体発表を行った(図10)。発表で生徒は記事の興味を持った点に触れながら書き換え記事の読み上げを行い、書き換え時の工夫点を説明した。(※兵庫県NIE推進協議会の公開授業として実施)



図9 書き換え作品



図10 全体発表の様子

(3) 夜間中学校との生徒間交流

「やさしい日本語」の学習を通して多文化共生に興味を持った生徒を対象に、NIE実践指定校として新聞を活用した日本語教育にも力を入れている地元夜間中学校の生徒との交流を行った。当校は在籍生徒の8割が外国籍であり、本校の生徒4名が来校し、「やさしい日本語」の活用実践として、同校教師手製のすごろくを共に行った(図11)。



図11 全体発表の様子

4 全体のまとめ

母語の異なる人同士の「言葉の壁」はAI翻訳機等の普及により低くなっている。しかし、南海トラフ地震の危険性が叫ばれている中、30年前の阪神・淡路大震災で問題化した外国人への支援の在り方を念頭に、必要な情報を「やさしい日本語」で簡潔にまとめて発信する試みを地元高校生が学ぶことは、震災の教訓を継承する意味でも意義があったと筆者は考える。

新聞で開くメディアリテラシー

～全国の子ども新聞から迫る、情報の向こう側～

授業者：教諭 前野翔大 発表者：神戸新聞社報道部記者 上田勇紀

1 はじめに

本校は、2020年に小中一貫の義務教育学校として開校して以来、教育活動の重要な柱としてNIEの取り組みを進めてきました。総合的な学習の時間をはじめ、教科学習の教材や表現手段として新聞を活用したり、短時間で行う新聞活用学習「NIEタイム」を設けたりし、日常的に新聞を教育活動に取り入れています。特に昨年度から高学年では、情報活用能力の向上や人権感覚の涵養を目的に、新聞を活用したメディアリテラシーの育成に取り組んでいます。



豊富小中学校
キャラクター
「とよぼん」

公開授業でも、主に子ども新聞を活用し、児童のメディアリテラシーを育むことを目的とした授業を行う予定です。特に、全国の子ども新聞を扱い、記事の比較によって発信者の意図や思いに迫りながら、情報を適切に読み解くことに主眼を置きます。メディアが多様化し、情報が氾濫する現代において、情報の発信者やその背景を捉え、適切に活用・発信する能力は子どもたちにとって欠かせないものとなっています。新聞の活用は、このようなメディアリテラシーを育むための有効な手段の一つです。

当日は、提案させていただく単元や公開授業をもとに、新聞を活用したメディアリテラシー育成の可能性や探究的な学びのあり方について、参加者の皆さまと知見を深め合う機会にしたいと考えています。

2 新聞を使ったメディアリテラシーを育むための実践

(1) 本校の過去の取り組み

誤情報や偏った情報による混乱が大きな社会問題となっています。学校教育においてメディアリテラシーを育むことは、児童生徒がこのような情報社会を主体的に生き抜くために不可欠です。必要な情報を適切に理解し、運用する能力の育成が求められています。

本校が過去に取り組んだ実践事例として、新聞の見出しや内容から伝えたい意図をつかんだり、その意図に応じた適切な文章構成や写真や図の配置を学んだりするなど、情報を読み解き、編集する技術を新聞から学ぶ授業があります。時には、視点を変えながら記事を捉え直したり、受け手によっては誤解を生む可能性のある表現に着目したりし、記事の内容や表現構造を吟味するような場面もあります。



端末を使いながらみんなで新聞の内容を吟味

他にも、昨年度は6年生を対象に、新聞記者の方や広告デザイナーの方に直接話を聞くような機会も設けました。情報の送り手の視点や意図を知ること、表現するためのスキルを学ぶだけでなく、情報の受け手としての姿勢を改めて考える機会となりました。

(2) 公開授業の単元（総合的な学習の時間）

本単元は、メディアからもたらされる情報を多様な視点から吟味したり、メディアに向き合う姿勢について考えたりすることが主な活動となります。メディアを取り巻く社会的な問題を知ることを契機に、情報の向こう側にいる「人」を想像しながら、情報を適切に扱うスキルや態度を身につけることを目指します。

単元の導入では、災害時や戦時に誤情報によって混乱した事例を取り上げ、情報があふれる実生活において、どのように情報を扱えばよいのかを探る契機とします。情報を捉える視点を学び、それぞれで情報との向き合い方について考えることが本単元の活動の柱となります。

【単元の流れ】

	主な学習活動
導入	メディアの情報の社会的な問題について知り、自分の生活の中での情報との向き合い方について学習課題を持つ
展開	ユニット① メディアの情報の多様な見方を探る
	ユニット② 新聞記事から情報の背景（発信者の考えや思い）を探る
	ユニット③ 情報の送り手としてのあり方について探る
終末	メディアの情報との向き合い方について自分の考えをまとめ、発表する

展開として、まずは多様なメディアを扱うユニット①があります。このユニットで児童は、テレビやインターネットなど複数のメディアの情報特性やその見方を探ります。特定の事例を取り上げ、その情報を別の立場で見るとどうなるか、視野を広げて見るとどうなるか、等について具体的に考えていきます。

次に、ユニット②では扱うメディアを新聞に



絞り、情報を受け取るための見方や考え方を洗練させていきます。主な活動は、新聞記者や編集者など、記事の発信者の語りを捉える活動です。ここでいう語りとは、記事に取り上げる内容や言葉の選び方、図表の用い方などを含むものです。語りへの着目は、情報の発信者である「人」の存在を強く際立たせることとなります。この「人」に目を向けることがメディアリテラシーを育成するための根幹を成すと考えています。

このユニット②で主に取り上げるのは震災に関する記事です。公開授業はこのユニット②の中の1時間となります。活動



全国の子ども新聞

の中心には、震災に関する同時期の全国の子ども新聞を見比べたり、同一の震災を扱った記事の経年変化を見たりする活動を計画しています。地域や年代による報道内容の違いを見つけ出し、その理由について考える中で、記事の向こうに確かにいる各所・各時代の発信者の姿が見えてきます。本時で扱う震災記事の発信者から直接話を聞くような場面も予定しており、その記事内容を書くに至った記者の思いや意図に触れられるようにしたいと考えています。なお、震災記事の語りの検討がより充実したものになるよう、6月に神戸新聞社の上田勇紀記者を招聘（しょうへい）し、震災時の様子やその報道について子どもたちにご教示いただく機会も設けています。

情報の受け手としての理解をふまえ、ユニット③では発信者としての情報の扱い方について考えます。情報発信の具体的なケースを想定し、適切な発信の仕方について検討します。特にここでは、情報を送る先にいる「人」を想像し、責任を持って発信することなど、送り手として大切にすべき姿勢について考えられるようにします。

終末には、単元を通して探ってきた情報の向き合い方について考えをまとめ、発表し合う機会を予定しています。

(3) 本時について

①本時の目標

震災記事を読み比べたり記者から話を聞いたりする活動を通して、新聞で報道される情報の背後には、社会・文化的な要因をふまえた発信者の意図や思いの存在を理解することができる。(知識・技能)



②本時の展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	前時までの内容を想起し、本時の学習課題を知る。	○単元の目的や本時に至るまでの学習過程を簡単に振り返る。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 新聞記事を読み比べ、記事の内容が異なる背景について考えよう。 </div>		
展開	<p>(1) 今年の子ども新聞の東日本大震災に関する記事を比較し、その違いや背景について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 同じ出来事を扱っているにもかかわらず、<u>地域（場所）</u>による違いがある。 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> • それぞれの記事について、どういう意図や思いを持って発信しているのだろう。 →課題の地域性への着目 <p>(2) 時期の異なる2つの震災記事を比較し、その違いや背景について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 同じ出来事を扱っているにもかかわらず、<u>時期（時間）</u>による違いがある。 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> • それぞれの記事について、どういう意図や思いを持って発信しているのだろう。 →時期に伴う課題の変化への着目 • 記者からそれぞれの記事内容に至った経緯を聞く。 	<p>○展開（1）（2）では、記事をもとに、記者や編集者がなぜその内容にしたのか、なぜそのように書いたのかを推察するよう促し、発信者の意図や思いに迫れるようにする。</p> <p>○展開（1）では、前時に個々で記事について検討しており、考えを共有するところから始める。それぞれの気づきをもとに集団で比較検討することで、考えを広げられるようにする。</p> <p>○展開（2）では、比較・検討した後、扱う記事の発信者を招いて直接話を聞く。その記事内容を書くに至った思いや考えに触れることで、発信する人の存在が強く意識できるようにする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価規準（評価方法） 記事の情報の背後には、地域や時期に伴う発信者の意図や思いがあることを理解している。（発言、振り返り）</p> </div>
まとめ	<p>学習を総括し、次時につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶新聞の情報の背景にも、発信者の意図や思いがある。 ▶どのような情報の向こう側にも発信者がいることを意識したい。 	<p>○本時の事例を一般化し、情報の背景には「人」がいることを改めて意識できるようにする。</p> <p>○本時で扱った情報の背景を探る視点（場所、時間）を再確認し、今後にかせるようにする。</p>

新聞に“ツッコミ”を!

～デジタル世代の「読む・問う・つなぐ」力～

授業者：教諭 久保淳平

1 はじめに

本校は、兵庫県教育委員会「県立高等学校教育改革第三次実施計画」に基づき、県立神戸北高等学校と県立神戸甲北高等学校の発展的統合により、令和7年4月に新たに開校した令和型の総合学科高校である。「なりたいたいわたしはトリプル“C”選べる学びは天地人」をキャッチフレーズに、宇宙・気象系列を代表とする3領域6系列の学びを展開し、「コレカラ」の社会を生きる若者たちに向けた、多様で実践的な学びを整えている。生徒一人ひとりの個性を尊重し、多様なカリキュラムを提供することで、21世紀後半に社会・世界で活躍できる人材の育成をめざしている。

2 新設校 北神戸総合高校 NIEの取り組み

2025年4月に第1期生として入学し学びを進めている本校生が、開校初年度に取り組んでいるNIEに関する実践概要を報告する。

(1) 主体性・協働性の向上を目指した「押し記事」コンクール

全生徒が新聞記事の中から自分が最も関心をもった記事を1本選び、その理由を文章でまとめて発表する「押し記事」コンクールを実施した。記事の選定理由を言語化し、仲間と共有することで、視点の多様性に気づき、社会の出来事と自己との接点を再確認する機会となった。生徒相互のコメントを通じて、他者の読み取りに触れる対話的な学びも展開され、協働的な学びの素地が育まれた。

(2) 全生徒によるまわしよみ新聞の実施

新聞記事に対して“問い”や“ツッコミ”を可視化し、グループ内で共有する「まわしよみ新聞」の活動を全生徒で実施した。記事に

対して付箋等でコメントを重ねていくこの活動では、記事の内容を深掘りする力と、異なる視点に対する柔軟な姿勢が求められる。仲間とツッコミを通じて議論するなかで、メディアリテラシーの重要性を実感し、紙の新聞を通してこそ得られる「読む・問う・つなぐ」力を体感する授業の第一歩となった。



▲全生徒によるまわしよみ新聞の実施
「この記事、なんでこの視点なん？」

(3) 全生徒によるいっしょに読もう！新聞コンクールの実施

「いっしょに読もう！新聞コンクール」では、読んだ記事に対する感想を「事実→考察→自己の立場」という構成でまとめることを意識させた。生徒は単なる感想ではなく、社会との関係を踏まえて自らの意見を論理的に表現する力を求められ、批判的思考力と文章構成力の両方を鍛える貴重な機会となった。

(4) 新聞閲覧コーナーの設置

日常的に新聞に親しめる環境を整備するため、校内の全生徒が毎日通る場所に、新聞閲覧コーナーを新設した。複数紙を設置し、記事の比較読解ができるようにすることで、多角的な視点で情報にふれる機会を確保した。



▲新設された閲覧コーナーでの様子

授業だけでなく、放課後や隙間時間にも自然と新聞を手取る生徒の姿が見られ、新聞との日常的な接点づくりに一定の成果があった。

今後は記事へのコメント記入や、問いの掲載など、探究の起点となる仕掛けの充実を検討している。

3 本授業における提案

本授業は、総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」および「総合的な探究の時間」において実施する公開授業である。社会と自己との関係性を問い直すことを目的とし、「まちにツッコミ、社会とつながる」ことをコンセプト・主眼とし、新聞記事の活用と対話的活動を通して、生徒たちが社会課題を“自分ごと化”し、他者と交わる中で新たな視点を獲得するとともに、未来に向けた行動の一步へとつなげる授業を目指す。

本授業における実践は、前身校である県立神戸甲北高等学校（NIE指定校）での実践を継承・発展させたものである。毎週発行してきた「週刊探Cue！」では、生徒が新聞記事の要点を把握しながら、自分との関係や背景にある構造を問うことで、新聞を「読む」から「問う」教材へと進化させてきた。そうした実践を土台に、新設された本校では“ツッコミ”という視点を切り口に、情報と社会を読み解く力を、さらに主体的・協働的な学びへと展開させるとともに、生徒自身の視点や違和感を起点とした対話・発信へと学びを深化させていく。（神戸甲北高校の実践については、大会2日目「ポスター発表」をご覧ください。）

本校生徒に実施したアンケート（2025年5月）によると、新聞を日常的に読む生徒はわずか0.7%にとどまり、情報を得るために主に用いる媒体はSNSであると回答した生徒は83.1%にのぼった。

急速に情報化が進む現代においてSNSやデジタルメディアによる情報接触が主流になる中、デジタル世代に向けた「紙の新聞」に

立脚した学びの価値が見直されている。新聞記事は一方通行の教材ではないはずだ。そこに“ツッコミ”を入れるという行為を通して、社会の出来事と自分との接点を見出し、自らの問いを立て、他者とつながる。そして、探究の入り口に立つ。アクティブで協働的な学びの空間を生み出す一手法を、本授業では提案したい。

4 本時について ～読む・問う・つなぐ～

単元名 まちにツッコミ、社会とつながる

(1) 指導目標

- ①新聞というメディアを教材に活用しながら、現代社会の課題と自己との関わりに気づき、それをもとに課題意識を深め、主体的に問いを立てる力を育成する。
- ②多様性について理解し、多様な他者との対話の中で思考を再構築し、「よりよい多様性社会の実現に向けて、自ら何ができるか」を探ろうとする態度を育成する。
- ③情報の受け取り方や発信のあり方を問い直し、社会の中で生きる主体としての自覚を深める。

(2) 本時の目標

- ①新聞の内容について理解を深め、自身の主張とその前提や反証など、情報と情報との関係について理解を深めることができる。（知識及び技能）
- ②多面的・多角的で多様な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にすることができる。（思考力、判断力、表現力等）
- ③他者との交流を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすることができる。（思考力、判断力、表現力等）
- ④言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって新聞に親しみながら自己を向上させ、我が国の文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。（学びに向かう力、人

間性等)

(3) 指導計画

第1時：新聞の意義とメディアリテラシーの導入（講義形式＋新聞閲覧）

第2時：「まわしよみ新聞」づくり

第3時（本時）：

「新聞にツッコミ！」共有ワーク&対話

第4時：気づきをもとに問いを再設定

第5・6時：ミニ探究プロジェクト

第7時：ふりかえり・探究活動への橋渡し

(4) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
㉗新聞について理解を深め、情報と情報との関係について理解を深めている。	㉑多様な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にしている。 ㉒他者との交流を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げ、多角的な意見を形成・表現することができる。	㉓授業者や他者との積極的な対話を通して多様な考えを理解するとともに社会課題を自分ごととして受け止め自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。

(5) 本時の展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	・本時のテーマ提示 「ツッコミ」プレゼン ・多様性について理解する。	・「読む」から「問う」への思考転換を導き、問いとは何かを共有させる。 ・多様な考えについて理解させる。	㉗ ㉓
展開Ⅰ	・公開プレゼン 新聞の「ツッコミ」を観客（来場者・他班）に売り込む。	・対話を引き出す声かけ・支援をする。 ・同時に【ツッコまれタイム】とし、来場者を含む他者との交流を促す。	㉗ ㉑ ㉒
展開Ⅱ	・展開Ⅰでの気づきの共有	・対話を引き出す声かけ・支援をする。	㉑㉒
まとめ	・本時のまとめをする。 ・本時での気づき、感想や提案をWebアンケートにて入力	・多様性の理解、フィードバックを通して、再思考の促進 ・探究の入口として問いを残させる。	㉑ ㉓

(6) 指導上の工夫と継続的取り組み

本時は教師主導の一方向的授業ではなく、生徒と来場者が相互に“ツッコミ合う”対話空間を形成することで、社会参加的な学習の場を実現させることも目標のひとつとした。

本時で生まれた生徒の「問い」や「違和感」をもとに、次時以降は個別・グループごとのミニ探究活動へ発展させる予定である。探究のプロセスと新聞づくり・発信活動との類似性に着目し、探究的な学びの準備段階として位置づける。OECDが提唱する「AARサイ

クル」に照らしても、有効な学習経験を提供していると考えている。自ら見通しを持った問いを立て、他者とつながり、行動を起こす「つなぐ」態度を持った生徒を育成したい。

NIEが育てるのは、単なる「新聞を読む」という読解力ではなく、人を尊重し合える社会の感度である。正解がないからこそ、自分で考え、問い続け、他者と対話し続ける姿勢こそが、命や人権、社会のあり方を自ら見極める力につながり、変化の時代における「いのちを守る学力」につながっていくのではないだろうか。

新聞4コママンガで「起承転結」を考える

～絵とセリフで読み取る力をつける～

発表者：教諭 若生佳久

1 はじめに

本校は、明石市の中央に位置する学校である。児童数は1,194名、クラス数は43学級と県下でも有数の大規模校である。南には西国街道や明治天皇大久保御小休所址、本陣跡等歴史的な史跡が数多くある。学校の周囲には住宅が多く、校区の北部には田畑も多いが、近年人口の増加に伴い、新興住宅地として宅地開発がすすんでいる。

学校教育目標を「未来を生き抜く力の育成」とし、これは予測不能な未来を自分の力で切り拓いていくために、社会を創造する一員として自覚をもち、学校での学びを活かし、直面する課題を解決していく資質・能力を育成することをねらいとしている。

児童は明るく活発であるが、難しい問題や長文に対して、粘り強く取り組むことがやや苦手という面を持っている。

そこで、物語文の構成要素である「起承転結」が長文と比べて簡単で分かりやすい4コママンガを使うことで、「起承転結」の設定を児童が理解するとともに、絵やセリフから話の内容を考えさせられるのではないかと考え、本実践を設定した。

2 実践の内容

(1) 本時名：4コママンガで「起承転結」を考えよう (全1時間)

(2) 本時の目標

児童にとって文の内容を理解するより、「絵」や「せりふ」で内容理解する方が容易であると考え。そこで、新聞に掲載されている4コママンガを使うことで、前後関係の推測から「起承転結」の流れを理解し、

段落相互の関係をとらえることを目標とする。

(3) NIEとしてのねらい

新聞に掲載されている4コママンガは、季節感があり、日常生活の中での出来事が多い。また、その内容も児童にとって身近な出来事として捉えやすい。そのため、絵やセリフが分かりやすく、話の順序が考えやすい性質を持っている。また、この学習を通して、児童が新聞にふれる機会にもしたい。

(授業の流れ)

(1) 「起承転結」についての説明をする

まず、物語には、「起承転結」という流れがあることを知らせ、国語辞典でその言葉を調べさせた。

「三省堂例解小学国語辞典」を引用し、「起承転結」・・・文章を書くときの組み立て方。「起」で始め、「承」でそれを受け、「転」で他のことに移り、「結」で全体をまとめる。

「起」・・・話が始まる。

「承」・・・前の話を受けて続ける。

「転」・・・話の流れが変わる。

「結」・・・話がうまく結ばれる。

と、板書した。

しかし、児童にとって「起」と「承」、そして「結」は、なんとなく分かるが、「転」の「話の流れが変わる」の理解が難しいようであった。

そこで、新聞の4コママンガでは、この「起承転結」が分かりやすく描かれているという話をし、児童に興味をもたせた。

(2) 4コママンガで話の流れを考える

今回は2つの4コママンガを用意した。一つは「神戸新聞」掲載の「ねえ、ぴよちゃん」。もう一つは読売新聞の「コボちゃん」である。(右の4コママンガ参照)

2つの4コママンガを使用したのは、奇数班と偶数班に違う4コママンガで「起承転結」を考えさせ、もう一方の4コママンガでの説明をしっかりと聞かせたいという意図があったからである。

これまで何度か4コママンガを用いた実践を行ったが、ほぼ同じ並び方になり、児童が聞くという活動がなかなかできなかった。

3つ、4つと4コママンガの数を増やすと逆に、どの話がどうつながっているのか児童が混乱してしまう場合もあると懸念されたため、2つの4コママンガを使用することにした。なお、コマ毎に▲・◆・■・●とつけているのは、児童が説明する時に「▲のコマは、・・・」というように説明する際の目印としている。以前は、メロンやオレンジといったイラストを使用していたが、イラストの著作権を考慮し、マークを使用した。

2024年7月12日(金)朝刊

神戸新聞「ねえ、ぴよちゃん」青沼貴子 作



2024年4月24日(水)朝刊
読売新聞「コボちゃん」植田まさし 作



(3) コマの流れを発表する

まず、児童に自分でコマの流れを考えさせた。その時に、なぜそのコマを1番目にしたのか、2番目にしたのかという理由をワークシートやタブレットに書かせた。そうすることで、自分の考えを明確に表現することができるからである。



次に、班内で発表し合い、自分と違う考えが出た場合はどの意見にするかを話し合い、一つにまとめさせた。この活動を行うことで、児童は考えを修正したり、相互の考えの違いを確認したりした。

最後に、学級全体で1つの考えにまとめた4コママンガを発表し、並べた理由を説明させた。



3 成果と課題

児童は1コマ1コマの絵やセリフをよく吟味して、コマの並べ替えを行っていた。

「ねえ、ぴよちゃん」では、ぴよちゃんの「ふーんだ。つまない」というセリフからそのコマが最初ではないという意見が出た。1コマ目であるなら、「ふーんだ」というセリフではなく、「つまないな」という退屈な様子を表すセリフになるはずだという児童の意見が出た。言葉に注視してコマの並びを考えられていたのが、よく分かる児童の発言である。

また、「起承転結」の「転」の部分も「猫の又吉」が出ることで、化粧と違った場面を通して、「転」の意味を児童は理解していた。

「コボちゃん」では、合唱をしている場面が2コマあるが、コボちゃんの姿の大きさや表情で、児童はコマの前後を読み取っていた。児童からは、「アップでコボちゃんの苦しそうな様子が分かるから、その後の家族との会話が生まれている」という意見が出された。

ここで、「ねえ、ぴよちゃん」同様、「起承転結」の「転」の部分の意味を児童は理解できたように思える。また、東京書籍では扱われないが、光村図書で扱われていた単元の「アップとルーズで伝える」の学習にも関係する発言とも言える。

このようにセリフや絵を詳しく読み取ることで、児童は状況を把握し理解する力が培われる。そのため、4コママンガを使用した学習の効果は高いといえる。

しかし、新聞には毎日4コママンガが掲載されている。その中のどれを使って授業を実施すればよいのかを考える必要がある。日々の4コママンガを集め、取捨選択するといった教材研究の時間が必要となる。それが課題といえる。

最後に、今回は4コママンガで児童が「起承転結」について学ぶ実践報告を行ったが、4コママンガを用いた授業は、他にもたくさん考えられる。以下、例を挙げる。

- ①4コママンガの題名を考える。
 - ②吹き出しのセリフを考える。
 - ③カラーを白黒にして、色をぬらせる。
 - ④登場人物の心情を考えさせる。
 - ⑤4コママンガの続きを考えさせる。
- 等である。



新聞づくりアプリ「ことまど」を使った養父市の産業紹介

発表者：主幹教諭 福井克宏

1 はじめに

本校は、養父市北部に位置する、全校児童26人の小規模校である。地域の先人である江戸時代の儒学者「池田草庵」先生の教えをもとに、家庭・地域とのつながりを大切にしながら学校教育を推進している。

2024年度、八鹿高校事件からちょうど50年を経て、同和問題について、また差別解消のために学校教育においてどのように子どもたちに伝え、どのような力を身につけさせるべきかという研修を行った。50年前に比べ、さまざまな格差がかなり改善されていることは間違いないが、ネット上の差別事象の増加を見る限り、それを看過し放置すると差別が収束することは困難であると考えられる。

「義務教育課程において、科学的根拠のないこと（迷信や噂等）によってさまざまな不都合が生じることに気づき、これらに惑わされず正しく判断し行動する態度を養うこと」は、差別解消のために必要であることを全職員で共通理解した。

このような力や態度を養うには、教育活動全体を通してはもちろん、NIEの実践を通じて培うことができると考える。NIEの活動を通して、「人や物事に関心を持ち、感じる力（豊かな心）」、「立場によって考えが異なることを認めた上で、何が事実か、何が真実か、何が本質かを見極める力」、「何をどのように調べ、どのように伝えればよいかといった情報活用能力」を育成していきたい。そして、子どもが自分の言葉で自分の考えをつくり、表現することをめざしたい。取り組みの内容については、学年の実態に応じて工夫していくようにした。

ここでは、高学年の実践を紹介することと

する。

2 実践の内容

○朝のスピーチへの活用

新聞づくりを目標に、まずは新聞に親しませるために、「ぼくの新聞スクラップノート」をそれぞれに用意し、児童が気に入ったり、興味がわいたりした記事をそれにスクラップする活動を行った。過去にNIEの取り組みも経験した児童なので、新聞に対する壁をあまり感じず、スムーズに取り組んでいた。ただし、野球好きな児童ばかりだったので、最初はドジャースの大谷選手や阪神タイガースの記事ばかりであった。徐々に一般記事へ注目させたり感想を求めたりするようにした。私自身も、時事的なニュースに触れる話をし、時には、児童に「どう思う？」と問い返してきた。そうすると、朝のスピーチが一方向的な発表ではなく、対話が自然と生まれる活動へと変わっていった。

例えば、ある児童が某コーヒーショップの紙ストローをバイオマスプラスチック製ストローに切り替える記事を選んでスピーチしたときには、紙ストローの具合の悪さを共感し、プラスチックストローを歓迎し、さらには、同じ但馬の先輩がカニの殻をエサにして、環境への負荷が少ないとされるバイオプラスチックの原料を生成する微生物を発見した話へと展開され、それに続くような人材になろうとおおいに盛り上がった。

指導者としては、さらに踏み込んで「紙ストローとプラスチックストローではどちらが環境負荷が大きかったのだろうか」とか、プラスチックストローへの回帰を喜ぶだけでな

く「実際、但馬の海岸に押し寄せる大量の海洋ゴミをどう解決するのか」といった課題を自分事のように捉えられる児童が一人でも現れてほしいと思っていた。

そこで、学びを得たことは、1つは、大きな社会的課題も子どもの身近に寄せる工夫が必要だということ。もう1つは、できるだけ本物に触れさせることが大事だということである。これらを念頭に取り組みを進めることにした。

○新聞づくりアプリ「ことまど」^{*}を使った新聞の作成

^{*}「ことまど」は神戸新聞社が開発したクラウド型アプリで、紙面の割り付けが自動化されており、本格的な新聞を簡単に作ることができる。

アプリ導入の経緯として、この児童らの世代は、GIGAスクールを背景にICTの活用積極的に取り組んできた世代でありタブレットによる文章編集や効果的な画像活用にも慣れていること。そして、アプリを使うことによって、手書きより圧倒的に文章編集がしやすいことから導入することを決めた。(もちろん、中学年のときには、手書きの新聞づくり(里山新聞)にも取り組んでいる。)

そこでまずは、アプリに慣れさせようと5年生は自然学校、6年生は修学旅行の思い出をアプリ「ことまど」を使って作成させた。児童は、アプリを使っての新聞づくりは初めてだが、タイピング技能も高く、文字入力に関してはそれほど困っている様子は無かった。しかし、印象に残った出来事を要約し、感動を表現することは難しかったようである。また、いくつかのテンプレートの中から新聞の記事数や字数から型を選ぶのだが、字数制限のある中で書くことには苦労したようである。どちらかと言えば、書くことがなくて字数が余ってしまう方で困っていた。そこで「構成を含めた何を、どのように書けばいいのか」という課題を持つことができた。

○新聞記者派遣事業

2024年10月16日(水)

神戸新聞社教育ICT部ことまど普及委員会事務局 武藤邦生氏とオンラインにて5、6年生の新聞を一人一人講評していただき、新聞づくりにおけるアドバイスをいただいた。児童は、この日に向けて一生懸命に記事を書いてきたので、新聞のプロの方に評価していただくことを楽しみにしていた。一生懸命書いた分、児童は自分の記事をよく理解しており、武藤さんの的確なアドバイスが心に響いたよう

で、事後の新聞の校正にも熱心に取り組むことができた。また、児童は「次回の新聞づくりでは、アドバイスを



をもとに、読み手が読みたいと思うような新聞づくりをしたい」と意欲的であった。

武藤さんからいただいたアドバイス

- ・5W1Hの順で記事を書くとうわりやすい。
- ・見出しは問いの形ではなく、記事の答えになるようにする。
- ・記事は、逆三角形のイメージで大事なことから書いていく。
- ・目安として10行毎に段落分けをする。
- ・写真はトリミングをして大きく貼る。1枚の写真は100行の文に相当する。
- ・文末の表現が「〇〇だったそうです。」ではなく、実際に見たり聞いたりしたことは、「〇〇です。」と言いつりの形の方が説得力が増す。
- ・「すごい」という便利な言葉を使わず、より具体的な言葉で感想を書く。NGワードを決めて使わないようにする。
- ・事実の間違いに気をつけて記事を書き、見直しをする。
- ・読点の多用にならないよう、書き終わったら一度声に出して読んでみる。

○5年「八鹿豚新聞」

養父市の特産品となっている「おだがきさん家の八鹿豚」について、生産者の島垣縁さんからお話を伺った。養豚場を続けることを決めた理由や、「八鹿豚」としてブランド化するための努力や育て方など、八鹿豚のほぼすべてを教えていただいた。

一度話を聞いただけではまとめきれず、何度も質問のやり取りをし、新聞の



作成を進めた。児童は「実際に話を聞かしてもらって、特に印象的だったのは、豚の餌としてカタシマ（養父市のケーキ屋）のケーキクラムを食べさせていることだった。」という感想を持った。

○6年「八鹿浅黄新聞」

6月から児童らで育ててきた在来種の大豆「八鹿浅黄」について、八鹿浅黄の復興や養父市の移住者支援をされている一般社団法人「田舎暮らし倶楽部」代表西垣憲志さんからお話を伺い、インタビューしたことを「ことまど」を使って新聞にまとめた。西垣さんにNIEを推進していることを伝えると、過去10年間の新聞の切り抜きをいただいた。おかげで、八鹿浅黄のことや養父市の良さや課題を見つめることができた。それらを新聞づくりのアドバイスをもとに、丁寧に構成し、協力して記事にまとめた。本年度「ことまど新聞コンクール」で、小学生の部で金賞を

獲得することができた。



3 成果と今後の課題

NIEの推進にあたり、児童の新聞への関心度には個人差があるため、どの児童にとっても無理のないように実践していくことを心がけた。

まず、過去の学年ごとの「NIE教育推進計画表」を参考にし、さまざまな教科や活動を通して、新聞に「ふれる」ことを大切にした。そして、児童の実態に合わせて、徐々に新聞を「見る・読む」、文章から「感じる」、感じたことを「伝え合う」力の育成をめざしていくようにした。その結果、どの子も新聞に慣れ親しみ、社会の動きや情勢に目を向けるようになった。

また、「新聞記者派遣事業」では、新聞についての基礎的な知識を身に付け、新聞づくりを通して自分たちの住む地域の特産について学ぶことができた。新聞記事を通じて、人とのつながりを感じ、児童が見聞を広げ、伝え合う楽しさを味わうことができた一年であった。

今後は、昨年度の取り組みを土台に、まず「NIE教育推進計画表」を見直し、より具体的な取り組みをイメージした計画表にしていく予定である。そして、NIE教育を校内研修の一つとして推進し、新聞から学び、新聞を通して自分の思いを表現し、進んで対話していく児童の育成をめざしたいと考えている。授業でも、各新聞社のワークシートを積極的に活用しながら読解力を伸ばし、学習したことについて、構成をよく考え表現を工夫しながら新聞にまとめるなど、さらにねらいを絞った取り組みを進めていきたい。

NIEの実践が、子どもたちにとって「新しいことを知る」、また「いろいろな人や場所とつながる」良い機会になり、「伝え合う」発信の場として意欲的に取り組めるものとなるよう、さらに研修を積み上げていきたいと考える。

アイデアミーティングで住み続けられるまちづくりをデザインしよう

～SDGs学習、ジュニアEXPOを通して地域産学との連携～



発表者：主幹教諭 渋谷仁崇、教諭 野上耕佑

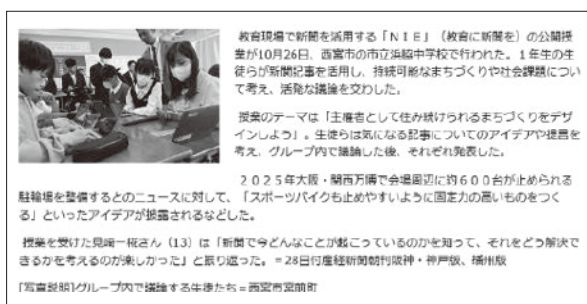
1 はじめに 『記事をヒントに！』

NIE活動を通して、社会の動きなど、興味関心を高め、世界に目を向け、社会的な思考力を持って、自分のアイデアを発揮できる人間の形成を目指している。「グローバル化」「持続可能性」「防災・減災」「主権者育成」「地域創生」などの課題は、新聞が最も得意とする分野の内容と考えることもできる。

2 実践の内容 「アイデアミーティング」

NIEノートを活用し、生徒が興味関心のある記事から、社会的なさまざまな事象や社会解決の手段を見つける。「アイデアミーティング」では、記事をヒントに、地域社会の未来につながる取り組みについて、「住み続けられるまちづくりを」視点に、まずは個人で考え、次に小グループでアイデアについてミーティングを行う。新聞などで得た記事における社会的な事象を根拠に、地域社会が抱える課題を乗り越えるための方策を提案させる。

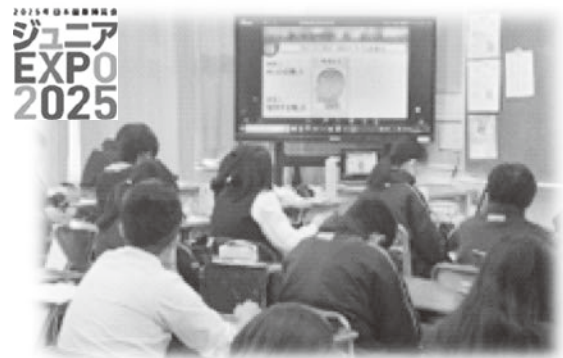
「アイデアミーティング」とは、SDGsの11番目の目標「住み続けられるまちづくりを」をテーマに、生徒各自が、新聞記事から題材やヒントを見つけ、内容に関連づけ、自分たちの住んでいるまちの発展や課題解決に向けて、アイデアを練ってプレゼンテーションしている。



産経新聞、朝日新聞11/28朝刊掲載記事

①大学・企業支援を学校につなぐNIE活動 ◇日本国際博覧会協会『ジュニアEXPO』

兵庫県NIE推進協議会と連携して「大学・企業の協力と支援を学校につなぐNIE活動」研究会も発足。NIEとSDGsを関連づけ、日本国際博覧会協会の「ジュニアEXPOプログラム」に毎年、全校生で参加している。



ジュニアEXPO 企業オンライン講座

2024年度は、DNP（大日本印刷株式会社）、野村ホールディングス株式会社、NTTアーバンソリューションズ株式会社、株式会社LIXIL、過去には鹿島建設、ニッスイ、大阪ガス、阪急阪神HD、三菱自動車など著名な企業による講座を通じ、各企業の取り組みを学び、企業と生徒の双方向でディスカッションしている。年度末には、各企業について代表生徒たちが学んだことをまとめ、交流会を行っている。

質疑応答

Q1. 木造ビルのメリットは何ですか。

A1. 木材は、コンクリートと違って再利用がしやすいため、最終的な廃棄物を極限まで減らすことができる。

Q2. 人員削減によるロボットを使って少人数で進めるメリット・デメリットは何ですか。

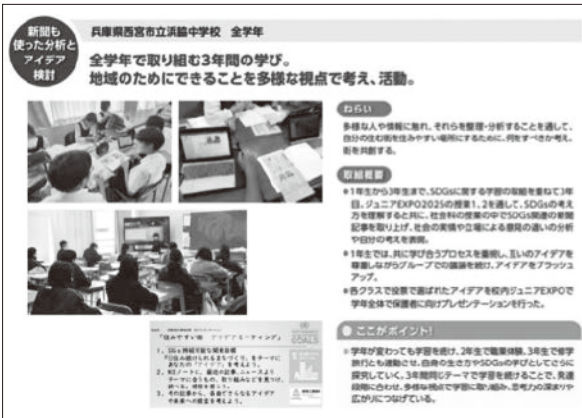
A2. メリット…人手不足の解消。
デメリット…機械まかせになってしまい、技術の継承ができない。



生徒作成 発表資料



桃山学院大SDGsアイデアコンテスト表彰



ジュニアEXPO冊子にNIE活動掲載

②大学との連携

桃山学院大学ビジネスデザイン学部（大阪市）と神戸ウォーターフロント機構、読売新聞社が主催する「中高生SDGsアイデアコンテスト」へ参加。

神戸臨海地域の未来を考えるコンテストで、本校は最優秀の神戸ウォーターフロント開発機構賞を受賞。「シービン」を活用した湾内清掃から回収したペットボトルを資源として、再利用してブローチなどにして販売するという提案が評価された。併せて、優秀賞のビジネスデザイン学部賞も受けた。「KOBER」というアプリを活用し、神戸市内をひとつのテーマパークとし、街中を歩く中でポイントが貯まり、協賛店で活用できる。歩道に発電機を設置し、歩く重みで街の発電をするという提案。

③企業との連携

SDGsとEXPOを絡めた学習。校外学習として、2025年大阪・関西万博に主体的な学びの中で参加しようと続けている。おおさかATCグリーンエコプラザでのSDGs学習や、日本国際博覧会協会によるEXPO2025学習、エイジレスセンターでの福祉教育などを関連づけ楽しみながら学んだ。



日本国際博覧会協会による万博EXPO講座



NIEアイデアミーティング日本博覧会協会 講評

④総合的な学習との連携

岡山県真庭市とSDGs連携学習では、2025年修学旅行の訪問地で、真庭市を実際に訪れ、地域全体で「木材」をキーワードに、まちづくりをしている地域から、未来のまちのヒントを学ぶ。



真庭市とのSDGs連携学習

浜脇中学校NIE 学習成果・関連図書展示

住み続けられるまちづくり アイデアミーティング

THE GLOBAL GOALS

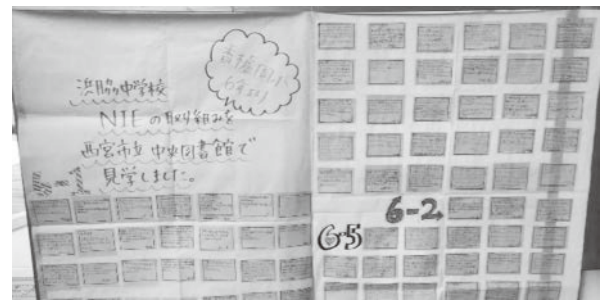
令和7年3月7日(金)～4月2日(水)
西宮市立中央図書館

浜脇中学校では、NIEの取り組みとして、社会科の授業内で「住み続けられるまちづくりアイデアミーティング」を行っています。「NIEノート活動」として気になる新聞記事を取り上げ、感想やアイデアを発表しあう中で、世界に目を向け、自分の意見やアイデアを表現できることを目指しています。その発表の中から14人の学習成果とテーマに関連した図書を展示します！

◇小学校（香櫨園小、浜脇小）、西宮市立中央図書館との連携 アイデアミーティングの作品が、春季休業中に、西宮市立中央図書館で展示された。地域の小学校は、校外学習として中学生の作品を見に行き感想を書き、中学校で掲示。また地域の方々にも、アイデアに対するコメントをいただき、生徒たちと交流した。



「住み続けられるまちづくりを」西宮市立中央図書館との連携事業 (神戸新聞掲載)



香櫨園小学校 NIE アイデア見学感想

新聞記事をヒントにしたアイデアを発表する生徒 浜脇中学校

記事ヒント、まちづくり考える 浜脇中 神戸大会で発表

「住み続けられるまちづくりを」のテーマで、2年生が新聞記事をヒントにアイデアを出し合う西宮市立浜脇中学校の学年発表会では、各クラスからの代表計14人が登壇した。「住み続けられる」は国連の持続可能な開発目標(SDGs)の一つ。「NIEノート」を発展させた取り組みで、全員がまちづくりのプランを考えた。

授業の冒頭、代表の生徒が「よいまちづくりを主体的に考えていきたい」と宣言。発表では、中学生らしいアイデアが次々と飛び出した。

「現状はできないけれど、雷のエネルギーを蓄えたり利用したりすれば、電力不足を改善できるのでは」「使用済みのペットボトルで手すりを作り、横断歩道に付ける」「ルクセンブルクでは、公共交通機関の運賃が無料化された。西宮市でできれば便利で環境にもやさしい」

ひょうごNIE通信

3 成果と課題

NIEを通じて社会問題への関心や理解を深め、多様な学びを深化させている。生徒たちが多面的・多角的に、地域・社会課題の解決策を考え、可能性を見だし、主体的にまちづくりに参画していくようNIE活動を継続していきたい。“自分ごと”として捉える活動を継続したい。

夜間中学校でのNIE

～新聞記事から生活につながる学びを～

発表者：教諭 伊達実、主幹教諭 藤原裕佳

1 はじめに

本校は、2023年4月に開校した播磨地域初の夜間中学校である。夜間中学校は、さまざまな理由で中学校での学びを十分にできなかった生徒が通う学校である。16歳から92歳までの幅広い年齢や5か国に至るルーツがあり、言語や文化の異なる多様な生徒がいる。それぞれ背景が異なり、年齢・国籍等により、生活経験や学力も一人一人異なることから、その実態に合わせたさまざまな工夫をこらしている。限られた授業時数による学習内容の精選から、授業内容の自主的な編成を行う本校の利点を生かした取り組みを行い、「生活につながる学び」を日々の授業に活かすように取り組んでいる。そこで、新聞記事の内容は生活につながるものであり、学習内容として好機を逃さずに取り上げることで、生徒の学習意欲をより高めることができる。

また、身近な地域的话题を学校において生徒同士で共有することから、生徒自身の経験や知識を交流することにつながり、学習を深めることができる。

2 これまでのNIEの取り組み

A) 新聞コーナーの設置

1階廊下に新聞コーナーを開設し、生徒が自由に新聞を手にとって読むことができる。教室への持込みも可とする。購読した新聞は、読売・日本経済・産経・神戸・JAPAN NEWS・朝日小学生・毎日小学生である。



B) 全教科で、新聞利活用学習の実施

各教科の実践をNIE実践報告の様式でまとめてデータで保存していく。ワークシートやプレゼンテーション資料も合わせて保存する。

C) 「あかつき新聞」発行

生徒からの情報提供や学校の様子などを材料として、新聞記事を作る。当初は教員で作成していくが、生徒の自主的な記事提供も呼び掛けていき、生徒の主体的な活動へとつなげていく。生徒の自己表現のよい機会とし、自信や自尊感情を高める活動としていきたい。

3 実践の内容

A) 社会

テーマ：新紙幣について(単元名：近代国家の歩みと国際社会)

○大まかな学習活動：新聞記事の内容に関する質問に答え、新紙幣の肖像に採用された人物について知る。

【第一次】新紙幣の肖像に採用された人物について知る。神戸新聞(2024/7/3朝刊)1面を読み、各紙幣の肖像になった人物が残した功績の質問に答える。

【第二次】新紙幣に採用された新たな技術について知る。神戸新聞2面を読み、新紙幣に使用されている技術の名前を答える。

【第三次】お札の肖像になったことがない人を知る。10名の偉人から、今まで紙幣に採用



されたことがない人物を答える。有名な政治家、時の政府を支えた人物、文学・医学で功績を残した人物が採用される傾向を伝えた。

○留意点：漢字の難読さを考慮し、教師が範読する。自分が大事だと思う所に線を引かせる。
○生徒の反応：紙幣という日常的に目にするものが題材ということで、興味・関心が高かった。また、3Dホログラムの技術の高さに驚いていた。

○実践の成果と課題：記事を理解しようと何度も読み返し、粘り強く課題に取り組む姿勢が身に付いた。しかし、漢字の理解度の違いで、内容理解に差が出てしまった。

B) 国語

テーマ：新聞に触れて・感じて・考えよう。
(単元名：新聞を使って)

○大まかな学習活動：新聞記事から季節ごとに俳句を作り、身近な新聞記事に見出しをつける。自分の身の回りの出来事に興味や関心をもって新聞に触れるきっかけとする。



【第一次】俳句は、季語や17音からなる短い詩であることを知る。食べ物・植物・行事などからどんな季語があるか考える。それを元に新聞から春・夏・秋・冬を感じる記事を見つけ、記事から感じる音やにおい、味、手ざわり、話している言葉を想像し、俳句作りに生かす。作った俳句を発表し、良いところを見つけ合う。

○留意点：実際に新聞をめくって季節に合った新聞記事を探す。その際、写真を頼りに探したり、見出しから見つけたりして新聞に触れる。
○生徒の反応：自分が手にした新聞からその季節ならではのものを熱心に探す様子が見られた。初めて新聞を手にする生徒もあり、興

味をもって活動できた。

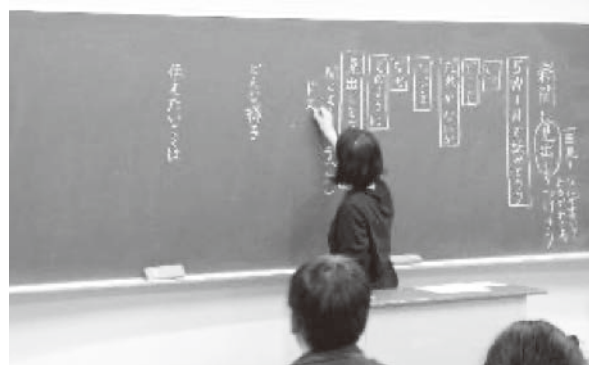
○実践の成果と課題：写真や見出しの言葉を使って俳句を作ることができてきたが、記事の内容まで読み進めて俳句を作る生徒は少なく、写真や見出し以外の補足を個別にする必要があった。



【第二次】新聞に見出しをつけよう。身近な秋の風物詩「姫路・灘のけんか祭り」の記事を取り上げ、新聞の内容を5W1Hで読みとる。簡単な言葉で短く書くことを意識して見出しを作り、発表し合う。

○留意点：身近な記事を用いて新聞の内容から5W1Hを見つける。「灘のけんか祭」を知らない生徒がいるので、祭の動画の視聴を行った。

○生徒の反応：知っている生徒にとっては、記事がわかりやすく、記事の内容や写真から知っていることを交流する場面も見られた。



○実践の成果と課題：新聞の内容を5W1Hにして読み取る活動は、記事の中からワークシートの空欄に合う言葉を見つけ、埋めることで行った。しかし、どんな記事の内容だったか理解するまでにはかなりの個人差が見られた。見出しは、短い言葉で書くことを意識して、記事やワークシートから言葉を選び作

ることができた。発表し合うことで、同じ記事でもキーワードとした言葉が違うため、生徒それぞれの思いの詰まったいろんな見出しができ、よい交流となった。

C) 総合的な学習の時間

テーマ：新聞記事を作ろう

○大まかな学習活動：学校で保管している新聞から、お気に入りの記事を見つけて、その写真や文章を参考にして新聞大の模造紙に記事を作る。授業計画として、新聞を読んで記事を見つける（2時間）。写真や文章を活用して新聞記事をつくる（2時間）。新聞記事を発表する（2時間）。

【1.新聞を読む】これまでの学校の新聞を段ボール箱ごと並べて、自由に選ぶ。気になる記事があれば、同じ日付の他社の新聞を比べて読む。日本語が難しい生徒は、翻訳アプリで記事ごと翻訳して理解を図る。近い日付の新聞や他社の記事と比べて、それぞれの特徴や違いを考える。早く見つけた生徒の紹介をして、周りの生徒の意欲を高めたり、参考にしたりする。

【2.写真や記事の文章から活用するものを選ぶ】写真は配置を決めたり、文章は手書きでまとめたりする。母語と日本語の併記で本校の特徴を表す記事にする。わかりやすい日本語の変換は、まわりの教師が補助する。

【3.見出しを自分で考える】実際の新聞記事とは異なる見出しを付けるようにする。見出しは、大きく書く。早くできた生徒は、鉛筆の部分をペンでなぞり書きしたり、色や絵、枠線などを工夫して、興味深い記事に仕上げていく。

【4.新聞記事を発表しよう】発表できる生徒は、記事を選んだ根拠、工夫した点、特に読んでほしい・見てほしいところなどを全体の前で、モニターを活用して発表する。発表が難しい生徒は、教室の掲示で紹介する。

4 生徒の変容

新聞コーナーや授業での新聞利活用学習に

より、これまでよりも大幅に新聞に触れる機会が増えた生徒がほとんどである。その中で、新聞の特徴である一覧性や新聞に表された多彩な言葉に気づくことができた。また、日頃触れることのない話題や社会の出来事に触れるなど、社会課題への出会いから、社会に目を向けようとする積極的な姿勢も見られるようになっていく。

5 成果と課題

実践の内容B) 国語の(第二次)新聞に見出しをつけよう「姫路・灘のけんか祭り」の記事の授業では、80代の生徒から、祭りについての詳しい情報を追加で説明する場面があったり、祭りを知らない外国籍の生徒の質問があったりして、それぞれの生徒の興味・関心を広げ、生徒同士の交流を通して学習を深めることができた。実践の内容A) 新紙幣については3Dホログラムの技術など身近な出来事から新たな視点の獲得をすすめる学習ができた。今後は、生活につながる身近な題材の特徴や自分との関わりを見つけ、主体的・自律的に考えて自らの意見を発信していく「意見形成力」の育成を目指していきたい。そのために、新聞記事から現状を理解して、自分たちが行うべきことを考え、生活につながる身近な題材についての多面的・多角的な視点を持ち、社会課題を自分事として捉えることを目指していきたい。また、生徒同士の対話を取り入れた授業をすすめて、多様な考えを生かして豊かな学びへとつなげていきたい。





NIE俳句

～記事の写真から豊かにイメージしよう～

発表者：教諭 佐伯奈津子

1 はじめに ～学校紹介～

本校は、1年生3クラス、2年生2クラス、3年生が3クラス、特別支援学級2クラスで全校生徒280名の小規模校である。

兵庫県姫路市の南部に位置し、学校の南側にはかつては「飾磨津」と呼ばれる瀬戸内海を航行するうえで重要な港が昔からあり、姫路藩の外港として重要な役割を担ってきた。さまざまな物資が集まり、またここから各地へ運ばれて行った場所である。現在、臨海部には大規模工場が並び、産業の面でも大きなショッピングモールが立ち、活気のある街である。と同時に花山院が書写山円教寺の性空上人に会いに行く際、渡ったとされる「御幸橋」があり祭りも盛んな歴史の薫り高い土地でもある。

2 実践の内容 ～これまでの取り組み～

(1) 朝学習でのNIE

本校は2024年度に兵庫県NIE推進協議会独自認定校となる前から、朝学習で新聞記事を読み、「人権意識を高める学習」を積極的に行ってきた。さらに昨年度より、新聞コラムの書き写しを朝学習に取り入れ活動内容を充実させた。この取り組みにより読解力やまとめる力などが向上したと実感している。

(2) 「ことまど」を使って新聞づくり

兵庫県では中学2年生で1週間の間地域のお店や会社に職業体験をしに行く「トライやる・ウィーク」という活動をしている。

その1週間の活動を新聞記事作成アプリ「ことまど」を利用して作成する取り組みを行った。「ことまど」を使用するにあたってより良い記事にしようと、写真選びにこだわった

り、記事の配置や表現にこだわったりする生徒も多くみられ、新聞記者さながらの新聞づくりであった。



(3) 出前授業

兵庫県NIE推進協議会独自認定校となることで、昨年度は新聞社の方に出前授業として複数回にわたり来ていただく機会を得ることができた。

1、広島平和学習について（10月）

2、高校受験対策講座

～小論文はどう書くの??～（11月）

3、阪神・淡路大震災 当時の様子を新聞記者に聞く（1月）

などのテーマで講演をしていただいた。



「広島平和学習」の話を聞く



高校受験対策講座 ～小論文はどう書くの??～

(4) はがき新聞で紹介

株式会社「Dreamaway」さんの案で近くの大型商業施設の書店で中学生のおすすめ本を紹介する活動を行うことになった。そこで、今まで読んだ本をはがき新聞の形式で紹介する取り組みを行った。

書店には20作品のはがき新聞が展示され、店を訪れた人は足を止めて紹介文を読む姿が見られた。



(5) クロヌリハイク

「クロヌリハイク」とは、愛媛新聞販売所の所長である黒田マキさんがアメリカのアーティストのオースティン・クレオンさんの作品をもとに創案した新聞を塗りつぶして俳句を作るアートである。愛媛県で行われた2023年NIE全国大会でこのクロヌリハイクのことを知り、ぜひとも生徒と取り組んでみたいと思い、授業で実践をしてみた。

手順は簡単で ①季語を探す ②575に仕立てる ③塗りつぶす という手順で作品作りをする。

塗り方もべた塗りだけでなく、斜めに斜線を入れる方法、格子型に塗ってみる方法、線で文字を塗っていく方法などさまざまである。

新聞の中に言葉があるので、語彙が少ない生徒も手軽に俳句を作ることができる。また塗りつぶす過程でストレス発散にもなる。出来上がった作品はフレームに入れて飾ることもでき、作品が出来上がった際、達成感や満足感を得ることができる。本校でも授業の中で取り組み、夏休みの自由課題としても出し、

9月に行われたクロヌリハイクコンテストにも作品を出品し、本校の生徒が佳作をいただくことができた。



クロヌリハイク作成中



コンテスト受賞作品

(6) 公開授業

10月2日、二つの公開授業を行った。どちらも3年生の教室で、一つは社会科で「新聞から読み取る 対立と合意」をテーマに記事を選んで意見交換をするという授業。もう一つは、国語科で「NIE俳句～記事の写真から豊かにイメージしよう～」という名前のもと、記事の写真をもとに俳句を創作し、句会を行う授業である。県内各地から教員ら25人が参加し、授業後に意見交換会も行った。

社会科の「新聞から読み取る 対立と合意」の授業はポスター発表で詳しく紹介をしているのでぜひご覧いただきたい。



3 NIE 俳句の取り組み

(1) 授業を組み立てるにあたって

年々、新聞になじみがない生徒が増える一方で、新聞をめくると目を奪われるような美しい写真とたびたび出会うことがある。

少しでも新聞のことを知ってほしい、新聞を好きになってほしいと思い、学校の掲示板上に新聞記事の写真を貼り、集めていた。

掲示板上に写真が増えていくにつれ「この写真をたくさんの人に見てもらいたい」という思いがこみ上げるとともに「この写真を使って何か授業ができないだろうか」と考えるようになった。

今回、その思いを形にするべく、毎月切りためた写真記事を活用して「俳句作り」をする授業を計画した。美しい写真から豊かにイメージを膨らませ、新聞記事を通して語彙を豊かにしてもらいたいというのがねらいである。

(2) 実践内容

新聞の写真パネルを提示しながら、作品作りに必要な「季節」、「季語」、「どんな様子か」など紹介し、俳句作りのヒントを与えた。



そして1学期で学習した俳句の復習（「季語」「音の数え方」「切れ字」）をしたのち、記事を参考に俳句作りをする学習活動をした。俳句作りに苦戦する生徒には、マス目に平仮名を入れると俳句ができる補助プリントを渡し、いろいろな言葉をあてはめていくように助言をした。

最後に次の時間に句会をすることをクラス全体に伝え、自分の作った作品の中で、一番良いものを選ぶように伝えた。



タブレットで記事の写真を見ながら俳句を創作

(3) 生徒作品

授業の中で出来上がった生徒作品は次のようなものである。

- 五月雨や 傘の花咲く 交差点
- あつい夏 闘志あふれる 甲子園
- あせなみだ 皆でながす 甲子園
- 菜の花の 黄色に染まった たつの町
- 白鷺城 夜空を彩る 花火かな

4 成果と課題

新聞の写真を使っただけの俳句作りをしてみても56%の生徒が「新聞の写真があってもより俳句作りが簡単になった」と答えた。言葉だけではなく、映像から「色」や「形」を俳句の中に折り込み豊かに作品作りができたのではないかと思う。

公開授業後の意見交流会の中で、「私たちは学校や仕事といった日常生活に追われ、四季の移ろいを感じにくくなっている中、ふと新聞に目をやれば、その季節らしい写真を見つめることができ、新聞が歳時記の代わりをしてくれている」という意見があった。

NIE活動をする上で大切なことは1回限りの学習活動に終わらず、継続的に続けることが大事であると考えている。今後も新聞を通して言葉の豊かな生徒に育っていきけるよう実践を積み重ねたい。



ICTで拓くNIEの新たな地平

～情報の信頼性を確保するために～

発表者：教諭 廣畑彰久、教諭 米田俊彦、神戸新聞社教育ICT部次長 武藤邦生

1 はじめに

愛徳学園は、スペインの「愛徳カルメル修道会」により、1954年設立され、神戸市垂水区で幼・小・中・高の女子教育を行う創立70周年を迎えたカトリックミッションスクールである。

新聞を使った授業は90年代初めより取り入れ、授業を展開している。また2016年からはiPadと「ロイロノートスクール」を導入しICTとNIEを利活用している。本稿はその授業実践と神戸新聞社の新聞作成アプリ「ことまど」の実践を振り返って考えた「NIEの新たな地平」についての報告である。

2 これまでのNIEの取り組み

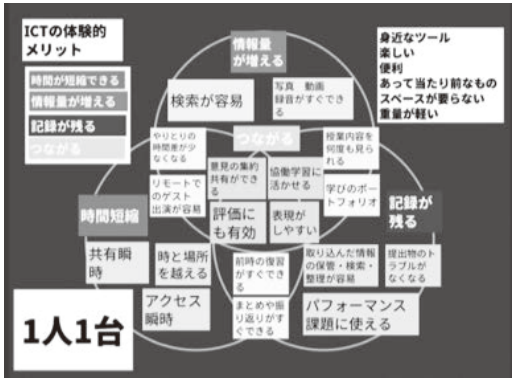
古くから、さまざまな形で学校教育に新聞が取り入れられてきた。その中で新聞を用い、「新聞を知る」、「新聞を読む」、「新聞をつくる」、「社会を知る」、「新聞を使って意見を書く」などの実践が行われてきた。これらの実践を通して新聞の持つさまざまなメディアとしての性質（速報性や一覧性、記録性、信頼性など）について理解を深め新聞に親しんできた。

新聞を使ったこれまでの授業の例	新聞で何を	具体的には	で、その後どうする？	その時、新聞の果たす役割は？	具体的な活用例
新聞	読む	要約する	意見文、小論文、エッセイを書く	考えるための素材としての新聞	新聞感想文、小論文、レポート、探究論文、エッセイなど多様
新聞	読む	知識の獲得	歴史や地理、その意義を知る	情報源としての新聞	情報リテラシー、情報活用能力
新聞	読む	言葉を知る	漢字のテスト、描写、書写	規範としての新聞	言葉の習得、書写、文章のお手本など
新聞	読む	数字を探す	材料探しと比較	社会を知るためのツール、資料としての新聞	視野の広げ、異なる視点の獲得、知識の整理、グループワーク
新聞	読む	現状分析、知識整理、深い作り	意見文、レポート、新聞(時)のテーマ発表	課題の発見、考え方の整理、資料としての新聞	探究論文やレポート、志望理由書など多様
伝えたいことがある	書く	新聞作成	執筆、編集、まとめ	発本や員外作成としての新聞	まわし読み新聞、壁新聞、未来新聞など多様

資料①

3 授業×ICT

2016年に本校はiPadと授業支援アプリ「ロイロノートスクール」を導入し、今年で10年目を迎えた。実際に授業や行事などで用いる中で体験したICTのメリットをまとめてみた。

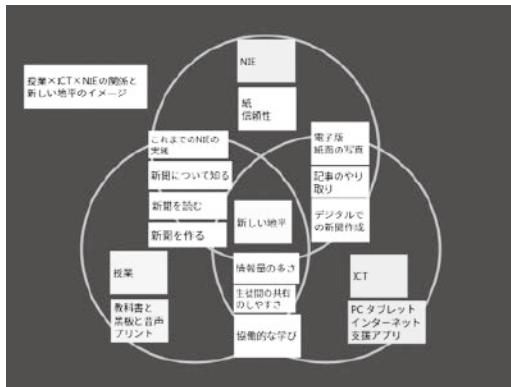


資料② ICTを使ってみて感じたメリット

4 授業×ICT×NIEを行ってみて

新聞を活用する授業でもICTを使用する場面が増えてきた。特にコロナ以降、新聞の電子版を導入し、SARTRASにも加入し、紙の新聞記事を配布しての利活用と電子版による記事の閲覧や資料の共有は、従来の紙に印刷し配布するのと比べ大幅に時間の短縮ができた。また生徒の机のスペースもより広く活用でき、さらに画面の拡大や縮小が自在にでき、生徒にとっても扱いやすいものとなっている。生徒による記事のスクラップや端末上での他の生徒との共有もしやすく、その記事を用いたプレゼンテーションもストレスなく行うことができ、協働学習も行いやすい。特に、新聞記事を仲間と共有した時、自分の記事と友人の記事の選び方の違いからも視点の違いや違うことの面白さにも気づいていき、新聞記事を通して新たな仲間との出会いにも貢献

しているようで、いつも興味を持って取り組んでいた。またロイロノートスクールの「共有ノート」を使えばタブレット端末での「まわしよみ新聞」にもスムーズに取り組めた。



資料③ 授業×ICT×NIE

5 ICT×NIE 新聞作成アプリ「ことまど」

ICTを活用して、「新聞をつくる」という点に関しては「ことまど」というアプリがある。2017年に神戸新聞社が開発したクラウド型アプリで、「本格的な新聞が簡単につくれる」をコンセプトにしている。運営ではブロック紙・地方紙の計7社で「ことまど普及委員会」を設立。児童・生徒1人1台の端末整備が進み、ICTを用いた新聞づくりの環境が整ったこともあって、2024年度は全国の小中学校、高校を中心に1万1300人に利用された。

「簡単に」は、アプリの操作性だけを意味するのではない。あえて新聞の「自由度」を抑えることで、短時間で完成させられることに重きを置いている。

そのために採用しているのが、テンプレートである。レイアウトのひな形となるテンプレートを決めてから記事を書くのが、特徴の一つといえる。

テンプレートは記事が一つのものから、記事が四つのもので、38種類が用意されている。これによって、新聞の作成で多くの時間を要する「割り付け」の作業が不要となる。テンプレートを選択し、題字や発行日など初期設定を終えれば、必要な作業は、記事を書

くこと、見出しをつけること、写真を選ぶことの三つだけだ。児童・生徒は記事の「中身」に集中することになる。

そして、それぞれのテンプレートでは、記事ごとの文字数が決まっている。児童・生徒はこの文字数を意識して記事を執筆する。所定の文字数をオーバーすれば新聞として組みあがらないし、大幅に足りなければ「白い新聞」ができることになる。文字のサイズによって過不足を調整する機能などは設けていない。機能の追加を求める声もなくはないが、記事の執筆が「決められた文字数で、要点を押さえて表現する」ことを学ぶ機会になればと考えている。

活用のシーンは幅広い。毎年度末には「ことまど新聞コンクール」を開催し、優秀作をそのまま神戸新聞紙上に掲載している。応募作品のテーマは、自然学校、修学旅行、トライやる・ウィーク（中学生の職業体験）など学校行事のまとめのほか、地域の特産や偉人を深掘りしたり、社会的な課題を調べて解決策を探ったりと多彩だ。特に近年は、3～4人のグループで取り組んだ新聞が増えた。その過程には「編集会議」など児童・生徒たちの議論があるはずで、対話的な学びに新聞づくりが取り入れられているのを見て取れる。

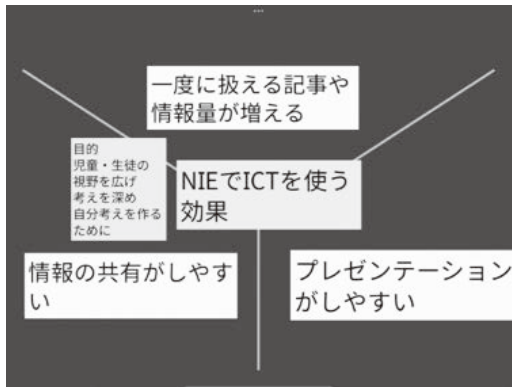
そしてこれは新聞づくりに限らないが、ICT×NIEの取り組みでは、一つのツールですべてを完結するのではなく、組み合わせる使うのが望ましいと考えている。

作成した新聞の共有を例に挙げると、「こ



資料④ 「ことまど新聞コンクール」を報じる神戸新聞紙面

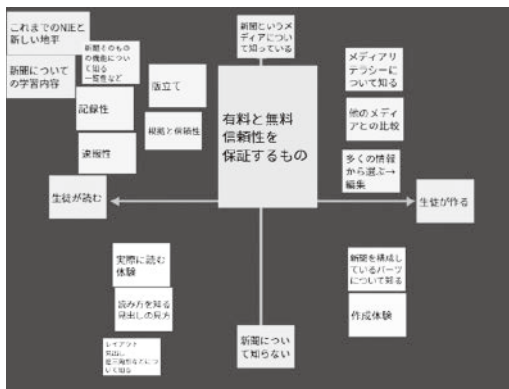
とまど」にも共有機能は備わっているが、必ずしもこれを使う必要はない。クラス内や学校内でファイルを共有できるツールが導入されている学校は多いだろう。実際、「ことまど」で新聞のPDFをダウンロードした後は、使い慣れたツールで共有し、互いの新聞にコメントを寄せ合っている学校もある。



資料⑤ ICT×NIEのメリット

6 「生徒と新聞との関わり」と「授業での新聞を使った活動」から「新しい地平」を考える

家庭で新聞に接する機会が減る中、「日常的な生徒と新聞の関係」と「授業で新聞を読む取り組みと新聞を作る取り組み」についてマトリクス図で生徒の学習内容を考えてみた。



資料⑥

それぞれの領域での学習内容はおおむね従来から行ってきたものがベースになる。しかし新聞やインターネット、SNSなどの大量の情報を読む時、情報の信頼性について考えることが必要になる。また生徒にとって必ずしも身近ではない新聞というメディアで新聞をつくって発信していこうとする時、改めて新聞を選ぶ理由が必要になる。その理由が資料

⑥の真ん中、上のあたりに示した情報の「信頼性」の高さではないかと考えている。そして、情報の高い「信頼性」を持続可能なものにしていくことについても認識し、改めて生徒に伝えていくことが必要ではないかと思う。

7 これから

新聞に親しみ、新聞を読む活動としてのNIEからさらにすすめて、情報の信頼性を保証し、情報の信頼性を持続可能なものにしていくための取り組みもNIEには必要になるのではないかと感じている。

新聞が、公正な社会を目指し、真実を伝え、よりよい社会をつくっていく役割はこれからも重要である。しかし、情報を得る手段はインターネットやSNSが日常的に用いられ、「さまざまな」情報がインターネットで共有されるようになった。このことは、同時に情報の信頼性において多様な問題に直面する要因にもなっている。それゆえ、根拠のある、確かな情報やそれを支える新聞(や新聞記者)の役割はさらに重要になっている。

昔から人々は情報を得るために新聞を購読しそのための対価を払い、使ってきた。しかし今や情報はインターネットから得ることが主流となり、情報端末とインターネットの費用に情報のコストも含まれていると考えるようになっていないか。

日々さまざまなメディアが社会の定点観測をしているから社会の変化もわかるのであり、そのための費用の負担を誰かがしなければ情報の信頼性も確保されない。多様なメディアを通して情報に触れることができ、その信頼性を持続可能なものにするためにも大切なことではないかと思う。このことはこれからのNIEの取り組みの中で実践していかなければならないことだと思う。

いままさに始まりつつあるAIとの「共存」のためにも、NIEの実践はますます重要になると強く感じている。

NIE活動を通じた多角的考察と探究的学習の推進

～新聞の効用伝える「新聞トーク」、ライターとしての新聞作り～

発表者：副校長 足立恵英、教諭 藪上遼介

1 はじめに

甲南高等学校・中学校は1919年に平生夙三郎によって創立された阪神間の私立男子校である。「世界に通用する紳士」の育成を教育目標とし、徳・体・知のバランスのとれた「個性尊重」を基本とする教育を実践している。

甲南大学への内部進学を前提としたアドバンストコース（2024年度中1よりメインストリームコース）と他大学進学を見据えたフロンランナーコースを設置しており、前者には、国際的な視野と素養をもつ人物の育成に重点を置くグローバルスタディプログラムも展開されている。また、キャリア教育を始め、探究的な学習により、多角的視点から物事を見つめ考える力の育成のための取り組みも行っており、2023年度からの2年間のNIE活動への取り組みも、その実践の1つに位置付けている。

2 実践の内容

(1) 本校での2023年度からの2年間のNIE活動としては以下のものを挙げることができる。

- ① 図書館内新聞コーナー設置（全学年）
- ② 新聞活用による平和学習（中3）
- ③ 「同一テーマでみる過去と現在」（高3）
- ④ 一面比較による報道優先価値考察（高3）
- ⑤ 新聞トーク（高3、中学全学年）
- ⑥ 「グローバル考現学」（新聞製作）（高3）
- ⑦ 紛争地取材記者講演会

上記実践の中から、主に、「新聞トーク」、「グローバル考現学」、「紛争地取材記者講演会」について、実践報告を行う。

(2) 新聞トーク（高3・中学全学年）

「高校生が中学生に話す新聞の効用と活用」

【実践概要】

新聞の活用機会をさらに広げ、「中高6年一貫教育」の下で「教育活動における生徒間の縦のつながり」を醸成する側面も踏まえて、「新聞の効用と活用方法」を伝えることを目的として、高校三年生から中学生に向けて直接Zoomで話してもらうという「新聞トーク」の実践を2023年度から行った。高3生には上述の目的を伝えた上で、自由にトークの内容を構築してもらった。

形態としては、「朝の読書」（10分間）の時間を利用して、中学各クラスに向けてZoomで直接話をするというものである。

2年間で合計11名の高校三生によるトークを実施した。また、2年目においては同一生徒が期間をおいて計2回のトークを行い、2度目のトークでは、その生徒の前回のトークを踏まえて、そこで説明した内容を実際の紙面を用いて確認、深化させることを目的にトーク内容の構成を指示した。

【トーク内容の抜粋】

- ・インターネットでは偏った情報に触れる機会が増えてしまうことも多い。新聞は中立的な立場で書かれており、情報の信頼性が高い。(Y)
- ・新聞は多角的な視点を得られるだけでなく、正しい日本語で書かれており、新聞を通じて書く力も鍛えることができ、それらは大学受験にも大いに役立つ。(Y)
- ・新聞には、いくつかの分類があり、全国紙、産業経済新聞、スポーツ紙等がありそれぞれ

れに特徴がある。(H)

- ・新聞には「社説」があり、記者個人ではなくその新聞社全体の立場、意見を表している。(Kd)
- ・「社説」を読むことで、新聞社の考えを知ることができ、同時に自分の意見を構築することやそれを深めることもできる。また、その問題の背景や解決策についての理解を深めることもできる。(Kd)
- ・「社説」を読み比べ、違った意見を聞くことで、新しい視点が見えてくることにもなる。(Kd)



- ・新聞記者は現地で取材し「生の情報」を得ており、新聞がなくなると生の情報が激減し、不確かな情報であふれかえってしまう。事実、アメリカではそのようなことが起こったことがある。(Kn)
- ・新聞には社会の悪事を暴くという役割もあり、新聞を読むことが汚職事件などを抑制することにもなる。(Kn)
- ・ネットでは、自分の興味のある記事を「クリック」することによって読み進めていくが、それでは自分の興味のない記事を把握できなくなり、情報の偏りの第一歩となる。(Kn)
- ・新聞は全分野のキーポイントが網羅されており、自分の興味の有無に関わらず情報に接することができる。(Kn)
- ・新聞だからといって気を張って読む必要はなく、肩の力を抜いて、始めはタイトルだけや一面だけといったように自分のペースで新聞を読む習慣を付けることがよい。(Kn)

【新聞トーク事後アンケート】

「新聞トークの内容は、わかりやすかったですか？」との問いに「わかりやすかった」との回答が83.4%、「これから新聞を読んだり活用したりしてみようと思いましたか？」との問いには「そう思う」との回答が74.7%となり、新聞を読むことへの興味、関心の醸成につながったことが窺える。

(3)「グローバル考現学」(高三)

本校では高三アドバンストコースの選択科目の1つとしてグローバルな視点から現代社会の問題点について、生徒達が自ら問いを立て実践的な探究を深める「グローバル考現学」を開講している。

阪神・淡路大震災30年、戦後80年を踏まえて、新聞作成アプリ「ことまど」を利用し、新聞記事を作成することを必須として、以下の取り組みを行った。

【広島研修】

被爆地広島市に足を運び、被爆者の方や広島平和記念資料館の館長を始め、多くの方々からお話を伺った。

生徒達は、限られた時間内での取材など、その難しさと準備の重要性を改めて実感することができた。

また、体調不良で取材がかなわなかった被爆者の方が、年末に日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）がノーベル平和賞を受賞した際、日本被団協の代表的な立場から会見で話され、生徒たちが報道を通して国際的な視点から原爆を捉える機会にもなった。

【神戸市長田区での取材】

2学期からは、阪神・淡路大震災について過去の新聞記事や動画から、震災の被害やその後の街づくりについてリサーチを進め、「ことまど」で記事にまとめて、授業で発表した。震災で地域の8割が焼失したという神戸市

長田区御蔵地区では、震災時、経営する会社の社屋を火事で失いながらも、その後、地域の復興に携わった田中保三さんのお話を聴いたり、実際に地区を歩き、慰霊モニュメントや黒く焦げた電柱、炎に包まれたクスノキなどを前に説明を受けたりした。生徒たちは事前に長田区の被災状況や地域のまちづくりを支援してきた団体に関する情報収集も行っていったことから、その日のうちに現場で学んだことを記事にすることができた。

この新聞記事は「ことまど新聞コンクール」高校生の部で金賞に選ばれた。また、広島で取材した新聞記事は同高校生の部で特別賞に選ばれた。



【ライター（書き手）として考える】

1年間を通して生徒たちは、「授業を受ける」立場から離れ、「自ら記事を書いて発信する」立場に立ち、原爆と震災について学びを深めた。過去の記事からの情報収集に加えて、読売新聞の1面コラム「編集手帳」を書き写して音読するなど、文章を書くために必要とされる基礎的なトレーニングも積んだ。

多角的な視点から物事を考える習慣がついたことも収穫である。原爆投下について学ぶ際、日本からの視点だけではなく、原爆投下を指示した米トルーマン元大統領の孫の男性が、大人になって初めて広島・長崎の惨状を知り、葛藤し、そこから被爆者と関係を築き、米国で被爆体験の継承に取り組む記事について語り合った。被爆国でありながら、2021年に発効した「核兵器禁止条約」に日本が参加していない現状など、世の中には「善悪

や「白黒」だけで語れない物事があることも理解できた。

答えのない課題について考え、当事者に問い、自らの文章で表現しようとする取り組みは、生徒たちの成長を促す機会となることを、この授業を通して教員側も改めて理解できた。

（4）紛争地取材記者講演会

兵庫県NIE推進協議会のお力添えで、「ボーン・上田記念国際記者賞」の受賞歴もあり、実際にウクライナ戦闘地域で取材した経験を持つ朝日新聞社の金成隆一記者に、本校グローバルスタディープログラム履修生（高1～高3）を対象に講演会をお願いした。

講演においては、戦闘の状況だけでなく、戦争前の街の様子、一般市民の軍事訓練やそのインタビュー、日本人を含む国外からの志願兵、ブチャを離れた人々への取材など、現地の人々の様子や生の声を伝える写真や動画が多数あり、2時間連続しての講演であったが、生徒達も講演内容に聞き入り、あっという間に時間が経ち、事後の質問も後を絶たない状況で、インパクトの強いものとなった。

国際紛争を通じて平和の持つ意味を今後も生徒達が探究していく1つの契機になった有意義な講演会であった。

3 成果と今後の課題

NIE実践校として2023年度から2年間の活動であった。2年目は新たな取り組みも実践することができ、いずれの取り組みも生徒が実践的に挑戦する取り組みとなったと思われる。

課題としては、NIE活動が一部の教科、教員の活動にとどまるものとなっていることや、新聞をとる家庭が激減する中で、新聞の効用を伝える「新聞トーク」の実践が新聞への関心を高めたものとはなっているが、それをどのように今後の新聞活用につなげていくか、現状に即して継続検討しなければならないと感じている。



地域に根差した小高連携NIE実践

～地域防災と防災ツーリズム～

発表者：教諭 佐々木浩二

1 はじめに

本校は全日制普通科の高校であり、8クラス、約300名の生徒が学んでいる。県内唯一の通信制課程と全日制課程を併設する高校である。

2025年度より、姫路南、家島と発展的統合により「姫路海稜高等学校」が姫路南高校の校地に開校し、2年後に閉校する。*通信制課程は存続する。

2024年度のNIE実践は、地理総合・地理探究・公共・政治経済・総合的な探究の時間、2学年の進路学習、人権学習、主権者教育等を中心とした実践発表を行った。NIE実践で、地域の課題を掘り起こし、生徒の主体性を育成する授業を通じて、主体的に地域の課題解決に取り組む生徒を育成している。学ぶだけでなく行動できる生徒の育成を目指し、網干西小学校との交流授業や子ども食堂でのボランティア活動につながるNIE実践も継続している。

*私のNIE実践「基本の型（基本軸）」
兵庫（姫路）～日本～世界の「3つの空間軸を行き来するNIE」
過去～現在～未来の「3つの時間軸を行き来するNIE」
虫の目・鳥の目・魚の目の「3つの視点を行き来するNIE」
文字・数字・地図（位置）の「3つの読解力を向上させるNIE」

2 実践の内容

長年NIE実践を継続する中で考えているのは、人間は多種多様な「情報」に触れながら生き、その時々で多くの判断・決断をしているということである。「情報」とは何か。普段、あまり意識していないが、水や空気と同様、欠かせないものである。人間は「情報」がなくては生きていけないと私は考えている。それほど基本的なものになっており、その大切さに気付くかどうかで、生き方も違ってくると思う。

最近では、急速に進む生成AI技術やメディア

の報道の在り方、フェイクニュースに関する報道において、人間の判断力や決断力が大いに問われ、情報社会の落とし穴も目立っている。

生徒は、いつでもどこでもさまざまな情報にアクセスでき、お金をかけずに世界中の人々とやり取りできる。生徒が使っているスマホの中に「最新の情報」があり、「未来」がある。しかし、ネットを駆使して情報を得て、読解し、分析し、自己の進路や人生に活かせるようになるためには、思考力や判断力、決断力、リテラシー技術が必要になり、経験の積み重ねが不可欠である。

高校の段階では、アナログ式の新聞記事を丁寧に時間をかけ読解し、複数のメディア・複数の新聞を比較し、併読することで、多様なメディアの長所・短所を知りながら、自分に適した技術を身につける必要があると私は考える。

本校のNIE実践で設定した目標は、以下の通りである。十分にできた目標もあれば、まだ不十分な目標もある。

本校のNIE実践の目標

- ①読解力・情報収集力・思考力・勉強法・図書館活用術の育成
- ②統計データ分析能力の育成（経済・金融・経営などの分野で、数字の変化から世界の動向を理解）
- ③地域課題に目を向け、地域貢献できる活動を経験（行動力・実践力・ボランティア精神の育成）
- ④課題解決能力と価値創造能力の育成
- ⑤仕事観・職業観の育成（進路指導に関連させた実践）
- ⑥生涯学習の推進（人生100年時代への対応、時代の変化に対応できる生き方の模索）

NIE実践の取り組み

①「公共」「政経」「地理総合」「地理探究」

- ・授業実践を通じて、情報弱者にならないための取り組み、防災学習に取り組む。
- ・『公共通信』『地理通信』で教師による情報発信の取り組み*実践発表当日配布
- ・思考力・読解力・比較する力・視点を増やす力・違いを見つける力の育成
- ・多様なメディアを活用する経験を積み、アナログ、デジタルのメリット・デメリットを知り活用できる力・情報収集能力の育成

②「総合的な探究の時間」

*年間計画(実践発表当日配布)

- ・「防災と都市」をテーマにした授業実践、主体性や行動力の育成



写真1 夏季休業中の総探の班別学習(姫路防災センターの耐震・免震・制震構造見学)



写真2 「工場見学と防災ツーリズム(津波避難施設見学)」 「網干消防署での救急救命実習」

③ノート指導(A4判)・勉強法の指導実践

- ・授業内容・思考過程を言語化・見える化することで思考を整理し思考力・判断力を育成。

④進路意識の向上のため「進路通信」発行

- ・生徒・保護者へ進路に関する新聞記事を発行。
教師のコーチングスキルの向上によって生徒の思い込みを打破する。

⑤読書術の向上・図書館の利用法・情報収集法

- ・学校図書室と地元図書館、県立図書館の活用を通じた複数の図書館を活用した取り組み。
教員への研修と生徒へ説明(夏・春課題前)。

⑥人権LHR、教員向け人権研修会の企画

- ・2年生は沖縄修学旅行に関連した「戦争と平和」に関連した人権学習を行う。
- ・教員向け校内人権推進研修会では、「先生の不適切発言を防ぐには」というテーマで実施。朝日新聞2023年10月9日付「子どもを追い詰める毒語」の新聞記事を活用し、教員の人権意識の向上を図る。

⑦第15回ひょうご新聞感想文コンクール応募

- ・2学年4クラス応募、「審査委員特別賞」1名受賞 応募テーマ 神戸新聞2024年8月12日付「四間隊の記憶 姫路で編成、154人が非業の戦死」

*新聞はセレンディピティ(偶然性)にあふれたメディアであり、新聞は、偶然の出会いによる気づきの「演出」をしてくれる。

⑧姫路市議会と姫路市内の高校との意見交換会

- ・総合探究 防災班から2名参加(テーマ「防災と公園活用」)、テーマ別に分かれ議員8名と高校生8名で意見交換を行う。

⑨網干西小学校との小・高連携交流授業

令和7年2月12日に実施、総合探究「防災班」の高校2年生16名、小学生5年生57名参加、小学生のポスターによる発表と高校生によるスライドでの発表、小学生と高校生による学び合うNIE交流授業。

*神戸新聞と授業指導案(実践発表当日配布)



写真3 網干西小学校の発表・交流授業(北上教諭)

⑩子ども食堂でのボランティア活動の取り組み
子ども食堂の「2024年12月26日付読売新聞「子ども食堂 地域を結ぶ」の新聞記事を読んだ生徒がボランティアに参加、累計30名。2月の総合探究の成果発表会で生徒による実践発表。*神戸新聞記事（実践発表当日配布）

⑪主権者教育の取り組み

姫路市選挙管理委員会と姫路税務署との連携、生徒7名による政権公約「いきものの魅力」の決定と弁論、模擬投票実施、事前学習として「兵庫県知事選挙」に関する新聞記事で選挙とメディアについて学ぶ。

⑫公民館での無償NIE読解力講座の取り組み

前任校(姫路東高校)の時、PTA活動の一環で、毎週土曜日、2時間程度、約3年間実施、姫路市広峰公民館で、小中高校生対象のNIE実践を実施公民館での学びが、きっかけとなり、自宅でも自学・自習の習慣を身に付けて、社会や地域のこと、日本や世界のことを深く知りたと思う子ども達に育ててほしいと願って実践。

*神戸新聞記事（実践発表当日配布）



写真4 公民館講座 2018年1月の様子

3 成果と今後の課題

①教科指導による実践成果・課題

生徒は、さまざまな教科を学習して、知識量も増えてきているが、勉強法・考え方・読解法・思考法の選択肢は、まだ少ないことを痛感した1年であった。それらの選択肢を増やすためには「経験」を積む「時間」が必要になる。NIE実践で多様な見方・考え方に触れ、考え方・思考法等の選択肢が増えると、さまざまな出来事に対して「理解が深まる」「深く考える」ことができる。また、地理総合・地理探究では、地図を読み取る技術、地形を読み取る技術、統計グ

ラフを読み取る技術の習得が必要になるが、デジタルマップの普及で、紙媒体の地図帳の使い方の経験が浅い生徒、地図を読み取る読図の技術が不足している生徒がいる。NIE実践と地図の読解には共通点があり多くの気づきがあった。

②総合的な探究の時間での成果・課題

「阪神・淡路大震災30年」の年に、防災という分野を生徒と共に探究ができ、防災教育の在り方を見直すきっかけになった。私が感じた防災教育の肝は、以下の3点である。

(1) 震災を風化させない、伝承、次世代への継承、次世代の育成 (2) 被災者支援の在り方、災害関連死や災害弱者（女性・子供・高齢者・障がい者）への支援の在り方 (3) デマの拡散などの情報の錯綜に対する対策や情報弱者との関係性、報道の在り方。

阪神・淡路大震災30年という節目にあたり、今後、NIE実践が取り組むべき課題の1つであると考えている。また、「新聞」に限定しない、多様な「情報メディア」を活用した教科指導力を上げ、新聞以外の情報メディアとの「バランス」をとり、各メディアの「長所・短所」を補い合うことで、アナログとデジタルの両方を兼ねたハイブリッド型NIE実践を勧めたい。

③生徒との出会いで気付いた成果・課題

生徒の苦手意識や生活習慣（癖）に目を向け、それを克服・改善させるためのNIE実践に取り組む必要があると感じている。気になる生徒たちとは、例えば「思い込みが強い」「固定観念にとらわれている」「無関心・無気力・無感動」といった傾向を持ち、さらに「読み書きや暗記、発表が苦手」「メモやノートを取るのが難しい」といった学習上の困難を抱えていることが多い。こうした生徒の苦手意識や生活習慣（癖）を改善するためには、時間をかけて経験不足を補い、技術を習得させるための学習支援・指導が不可欠である。そのためには、従来のティーチングスキルだけでなく、コーチングスキルも取り入れ、生徒自身の意識の変革を促すようなNIE実践を広めていきたい。



地域住民とつながり生徒の世界を広げるNIE

～文化祭で高齢者と時事問題を議論～

発表者：教諭 大石昇平

1 本校の概要

(1) 本校の状況

本校は、2025年に創立128年目を迎える淡路島にある「至誠・自治・勤勉・親和」を校訓とする普通科高校である。

2024年度は全学年6クラスの構成となっており、各学年には特色型選抜を経て入学した「総合探究類型」の生徒が最大24名在籍している。それらの生徒は、他の生徒よりも増して探究活動に力を入れて取り組んでいる。

また、2024年度からは、HYOGOグローバルリーダー育成プロジェクトにおける「ひょうごリーダーハイスクール」に指定され、これまで以上に大学・地域・関係機関等と連携し、先進的・創造的な探究活動を行っている。

本校でのNIE活動は、この「ひょうごリーダーハイスクール」としての取り組みも一部兼ねている。

(2) 本校生徒の現状と

NIE実践指定校申請までの背景

本校生徒の進学意識は強く、毎年8割以上の生徒が大学進学を選択しているが、受験対策にも新聞が有効なのではないかという声が教員間で上がるようになった。令和7年度大学入学共通テスト試作問題等を見ると、教科を問わず複数の文章や資料から問題が構成されており、それらを読み解き、比較することも求められている。それに対し、教員間では、文章や資料を読むことを苦手としている生徒が多いという印象を持っていた。授業以外でも、新聞記事に触れることで、生徒の読解力の向上を期待することができると考えた。

大学入試に直結すると思われる勉強や模試への関心を強く示す生徒が一定数いる一方

で、時事問題への興味や幅広い教養を育もうとする意識は生徒の間で低い印象である。特に、日頃から活字に触れる生徒の数は、教員が期待する程多くはない。NIE実践指定校に認定される以前に、本校図書員会が実施したアンケート調査によれば、「新聞を読んでいる？」という質問に対し、「はい」と答えたのは全体の8%、「たまに」と答えたのが2%、「いいえ」と答えたのが90%という結果であった。このようなデータを目の当たりにし、活字に触れて読むことを習慣化する必要があるのではないかという問題意識を教員同士で持つようになった。

以上のように、生徒が新聞を読むことによって、共通テストに向けた読解力の向上、そして、時事問題への興味の高まり、さらには現代的な諸課題への意識も高まることを期待するようになった。つまり、新聞を通して、生徒が進路の可能性を広げ、また、自身の見ている世界を広げることに期待し、NIE実践指定校の申請を行うことにした。

2 実践指定校としての取り組み

(1) NIEコーナーの設置

実践指定校としての取り組みを開始するにあたり、長期的には先述のような力の育成を目標としていたが、短期的には「新聞にふれる生徒を増やす」ことを目標とした。というのも、実践指定校認定後に改めて全校生徒にアンケートを取ったところ、新聞を「全く読まない」生徒が全体の7割以上である一方、「毎日読む」と回答した生徒は約1%に過ぎなかった。

このような結果を受け、職員室前に写真のようなNIEコーナーを設置し、生徒が新聞を閲覧できるスペースを設けた。



とはいえ、置いておくだけではなかなか手に入る生徒も少ないのが現状であった。そこで、2年生の「公共」担当教員が、「新聞で為替を調べて報告する」という課題を設定した。すると、日替わりで生徒が為替を調べに来るようになり、放課後まで新聞が手つかずに終わるという状況はなくなっていった。

また、読み終えた新聞は学校図書館で閲覧できるようにストックしていった。

(2) 「洲高かわら版」

長期的な読解力等の向上を目指すための取り組みとして、洲本高校版NIEタイムとして「洲高かわら版」を実施することにした。本校では1時間目が始まる前の10分間をいわゆる「朝読」の時間としており、その内の1日(木曜日)だけ、全校生が新聞を読む時間にしたのである。新聞記事はスキャンで取り込みデジタルデータにし、ワークシートに加工して「ロイロノート」を通じて全校生にデジタル配信し、1年間で合計20回実施した。

生徒の読む記事は、地歴・公民科の教員が中心に選択してワークシートを準備していった。記事を選ぶ際には、①5、6分程度で読めるもの、②話題性のあるもの、③予備知識がなくても読めるもの、④生徒が興味を持って発展的に学習してくれそうなもの、⑤硬すぎず柔らか過ぎないもの、といった基準を総合的に考慮するようにした。そして、記事を読むだけでなく、ワークシートには2、3題の「ミッション」を用意した。記事を読み、その内容を確認したり、まとめたりする役割のミッションを1題か2題、そして、記事に対する自分の意見をまとめる役割のミッションが1題である。前者は、共通テストのような4択で確認するもの、後者は2、3行でまとめたり、時には周囲のクラスメ

ートと口頭で意見交換を指示したりする場合もあった。いずれの回についても、終了3分前を目安にロイロノートから模範解答を配信した。

(3) 記者派遣事業

令和7年2月6日(木)、記者派遣事業として共同通信神戸支局の伊藤愛莉記者にお越しいただき、「新聞記者の仕事」という演題でご講演いただいた。令和6年度のNIEセミナーでの伊藤記者のお話を拝聴し、ぜひとも本校生徒にもお話しいただきたいとお願いしたところ、記者派遣事業として実現した。



伊藤記者からは、なぜ記者を目指そうと思ったのか、これまでの取材経験や、そこから感じた記者の役割など、これまでに感じ、考えてこられたこととお話しいただいた。

講演会後の生徒アンケートには、次のような感想が寄せられた。

自分の将来の職業の選択として記者というのは自分の中でなかったけど、今回伊藤さんのお話を聞いてとてもおもしろそうな職業だなと感じました。今日伊藤さんのお話を聞いてよかったです。これを機に家にある新聞を読んでみようかなと思いました。

この感想のように、伊藤記者のお話によって生徒の中の「記者像」や新聞に対するイメージに変化があったことが感じられた。生徒のキャリア教育という観点からも、伊藤記者の人生経験をお話しいただいたことは生徒にとって良い刺激になったと確信している。

(4) 読売新聞とのミニコミ企画

NIE実践指定校としての1年目の取り組みが終わろうとしていた時、読売新聞販売局の読売センター洲本様から、「洲本高校新聞部と連携したミニコミを作れないだろうか」と

いうお話をいただいた。

近年、本校の新聞部は数年間にわたって部員がいない状況で、顧問が代表して1年に一度、卒業記念号としての「洲高新聞」を発刊するだけになっていた。そんな折、令和6年度に2人の新入部員が入ったことにより、生徒の手による「洲高新聞」が復活していた。

とはいえ、まだまだ経験の浅い部員2人で一般の方の手元に届く記事を書くのは荷が重い。そこで、読売新聞淡路支局のご協力をいただき、新聞づくりのレクチャーを受けながら進めていくこととなった。

この原稿を執筆段階では、読売新聞淡路支局長、販売局の代表、部員との間で打ち合わせをしながら、企画を進めている段階である。どのようなミニコミが完成するかはわからないが、新聞部員が新聞記者の方とかかわりながら、地域の方へ記事を発信するという貴重な機会に感謝しながら取り組んでいきたい。

(5) 地域住民との新聞交流会

この交流会は、本校の文化祭(2025年6月12日)に地域の高齢者の方をお招きし、新聞記事を読んで意見交換しながら交流を図るものである。時事問題を通じて、生徒が普段交流のない高齢者の方と意見交換することで、自分とは異なる価値観や考えに触れることを目的として計画している。

近年、生徒の生活にはスマートフォンとSNSによる交流が欠かせないようになってきている。本校生徒へのアンケート調査を見ても、ニュースの入手方法についてSNSという回答が約46%と最多であった(なお、新聞という回答は1%であった)。確かに、SNSをはじめインターネットを通じた情報のニュースは容易で生徒にとってもアクセスしやすいものであろう。しかし、情報の信ぴょう性やフィルターバブル等の可能性を考えると、情報をネットやSNSに頼りすぎることは一定の危険性を孕んでいる。特に、その情報に対して「どのように解釈して評価するのか」と

いう点について、情報リテラシーの観点を踏まえたトレーニングが求められている。

この点について、今回の交流会では、自分たちとは異なる世代の方の意見を聞き、その比較を通じて、生徒が自分の価値化や考え方を客観視する機会にできればと考えている。

社会にはさまざまな情報があふれているが、多面的・多角的に物事をとらえ、異なる価値観を有する人と共に生き、それを受け入れられるような態度の育成の一助になればよいと期待している。そうやって、生徒が自分たちの世界を広げることにつなげてくれれば幸いである。

3 成果と今後の課題

暫定的な1年間の取り組みの成果として、令和6年度1学期と同様のアンケートを3学期にも実施した(3年生の卒業後のため、1・2年生のみ)。1カ月に新聞を読む頻度は1学期とほとんど変化はなく、「全く読まない」が4%減少、「毎日読む」が0.8%上昇という結果であった。生徒が新聞に触れる回数は1年間で増えることはなかった。

3学期の調査では、1年間を振り返り、1学期と比べて新聞を読んでもみようという気持ちが高くなったかという質問も聞いた。全体の75%は「あまり変わらない」との回答であったが、「とても高くなった」・「高くなった」を合わせた肯定的な回答が約22%あった。

また、1学期と比べて世の中の出来事への興味・関心が高くなったかどうかを尋ねた質問については、半分以上が「あまり変わらない」であったが、「とても高くなった」・「高くなった」を合わせた割合も約47%と半数に迫る結果となった。世間への興味・関心の変化に新聞や「かわら版」がどれほど影響したかは特定できない。しかし、生徒の世界は広がっている真っ只中なのかもしれない。

新聞を通じてさらに生徒の世界を広げられるよう、NIE活動を展開していきたい。



新聞ポスター作成

～社会問題について考える～

発表者：教諭 三木美穂

1 はじめに

(1) 学校の概要

本校は、美しく連なる六甲の山並みを背に丸くそびえる甲山を望む閑静な文教地区に所在し、教育環境に大変恵まれている。全日制単位制普通科に加え、兵庫県の高校では唯一の音楽科を設置し、全校生徒数約1,000名の大規模校である。長い伝統で培ってきた教育目標を継承しつつ、スクールポリシーに基づいて、教育内容の刷新に努めている。

「総合的な探究の時間」では、スクールポリシーの一つである「多様な視点から物事を捉え、新たな課題を発見し、解決に向けて主体的に行動できる生徒を育成する。」ことを実践している。社会を知るために必要となる情報を得るときに、高い信頼性、深い背景分析と解説、ジャンルの多様性、地域情報の充実性といった、多くの利点を備えている新聞は大変有益であり、実際に触れ、活用する機会を1年次の授業に取り入れている。

NIE実践指定校として新聞記事を活用した取り組みは令和2年度より継続しており、新聞記事にある社会課題がSDGsのどの目標と関連しているかを発見し、新聞ポスターにまとめて発表する過程で、社会の諸問題について多様な側面から考える学習を行っている。

(2) 実践の概要

「新聞ポスター」の作成は、1年次の総合的な探究の時間の「社会を知る」というテーマの中で以下の手順で行っている。

まず、SDGsの17分野の社会課題を学び、気になる課題を新聞記事から探し、社会の動きを確認した後、新聞を切り抜いて新聞ポスターを個人で制作する。次にポスターには記

事を選んだ理由、記事から考えたこと、意見文の3つの観点を記入する。そして出来上がったポスターは、班ごとに発表と意見交換を行い、班のメンバーを3回替えることでより多くのメンバーと意見交換をする。

このような取り組みを通して、社会に目を向けることが少ない高校生が意識をして新聞を読む経験となり、1年次後期から行う地域活性化の授業や2年次より始まる「課題研究」の研究テーマを見つける活動につながっている。

2 実践の内容

(1) 授業での取り組み

【授業のねらい】

- ▷新聞記事の中から、自分の興味・関心を持ったテーマの記事を探し出し、記事のいろいろなつながり（課題の広がり）を見つける目を養う。
- ▷新聞記事を読解し、要旨をまとめ、他者に発信する力を身につける。
- ▷他者の発表から新たな考え方や視点を知る。その際、小グループで席替えを繰り返しながらリラックスした雰囲気話し合うWorld Café形式を取り入れ、多様な価値観を共有する。

【授業展開】

日付	テーマ	内容
5/1	社会を知る1	SDGsについて考える
6/5	社会を知る2	新聞ポスター①導入
6/12	社会を知る3	新聞ポスター②テーマ決め
6/26	社会を知る4	企業のSDGsの取り組み（講演）
7/17	社会を知る5	新聞ポスター③作成
9/11	社会を知る6	新聞ポスター④発表
9/18	社会を知る7	地域活性化分科会（ワークショップ）
12/4	社会を知る8	地域活性化全体会（講演）

〈[社会を知る1] SDGsについて考える〉

- ・新聞ポスター作成に入る前にSDGsについての考えを理解する。
- ・自分の解決すべき目標の優先順位を考え、班で意見を共有し、一つにまとめる練習をする。



〈[社会を知る2] 新聞ポスター①導入〉

- ・新聞を一人2紙以上配付し、新聞から得られる情報を分類、分析する。新聞は回覧し、なるべく多くの紙面に触れる。
- ・記事の中から自分が興味を持ったものを選び、「SDGs」17分野のどれにあてはまるか確認する。



〈[社会を知る3] 新聞ポスター②テーマ決め〉

- ・「SDGs」の17分野から、興味関心あるテーマの新聞記事を選んで切り取る。
- ・新聞ポスターのタイトルを決定する。
(例：「コロナで動く経済新聞」)
- ・A3×2枚のレイアウトを意見文やイラスト等も含めて考える。

〈[社会を知る4] 企業のSDGsの取り組み〉

- ・企業の社会活動・社会的な課題に対する取り組みについて学ぶ。

〈[社会を知る5] 新聞ポスター③作成〉

- ・意見文を下書きする。意見文では、切り取った新聞記事に対する考えを述べる。そして、社会で起きていることは地域でも起きていると考え、地域における問題提起につなげる。
- ・意見文を清書し、記事とともにポスターに貼り付ける。
- ・発表する内容を考える。発表の留意点は、意見文を読むのではなく自分の言葉でプレゼンテーションをすることである。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">[1] なぜこのテーマを選んだか。[2] どのような記事を集めたか。[3] それはSDGsのどの分野か。[4] 自分はどのように考えたか。[5] 今後、研究したいことは何か。 |
|---|

〈[社会を知る6] 新聞ポスター④発表〉

- ・1人2分程度で、班内で発表を行い、意見を交換する。
- ・班のメンバーを変え、3回発表をすることで、より多くの意見交換の場を確保する。



〈[社会を知る7] 地域活性化分科会〉

- ・新聞ポスターでまとめたことを、身近な地域に引き寄せて解決すべき課題を考える。
- ・地域の現状を理解するために、地域の公的機関、企業、団体、から話を聞き、班で意見交換して考えをまとめて発表する。



生徒からは「内容がよくわかる記事の見出しを参考に課題研究のポスター発表をしたい。」「言葉を使うときの注意点を改めて聞くことができ、普段の生活で実践していきたい。」といった感想があった。

〈[社会を知る8] 地域活性化全体会〉

- ・新聞ポスター作成を通して、社会課題を考え、社会課題を身近な地域に引き寄せて考え、課題を解決するために自分たちが高校時代に身に付けることは何か、自らの生き方に結び付けて考える総括の講演となる。



(2) 新聞記者派遣事業

例年2年次生対象に「探究活動における資料の収集と分析」というテーマで「課題研究」につながる講演を実施している。

2024年度は日経新聞社の岩本隆様をお招きし、信頼性のある情報を収集することの重要性のみならず、情報のネタ探し、新聞の読み方、日本語講座などをお話しいただいた。生徒の今後の取り組みにつながる有益な時間となった。

3 成果と今後の課題

本校の生徒は真面目に課題に取り組む力や常識的に物事を考える力を持っており、ほとんどの生徒が熱心に新聞を読み込み、社会的課題について真剣に考えようとしている。新聞を手にした生徒たちは、気になる記事に対して意見を交換したり、新聞を開かなければ気づかなかった出来事や考えに感嘆したり、教室内で視野の広がりを感じている。

年度末に実施したアンケート結果では、新聞ポスター作成を通して社会にある課題や問題点に関心を持ったと答えた生徒が91%に上った。また、これまで以上に関心を持てるようになったものとして「政治・経済」「外国」「文化・芸術」の項目を挙げる生徒が、学習面でこれまで以上に伸びたものとして、「考えを発表する力」「社会への関心」「記事を読み取る力」を挙げる生徒が多く見られた。

今後も新聞ポスター作成を出発点として、社会の現状を把握し、課題を発見し、自ら解決していく力をつけることを目標に社会と身の回りの出来事に目を向けさせたいと考えている。また、探究活動に活かせるよう新聞を活用する機会をさらに増やし、活動を深化していくとともに、多くの教科で活用、実践していけるよう働きかけたい。

「神高探究Ⅰ」における新聞の活用

～ジェンダー、東アジア、人権問題～

発表者：教諭 松井洋平

1 はじめに

本校では2017年度から「総合的な学習の時間」の中で探究的な学びを実践するプログラムを2年生の3単位実施で開始した。2021年度にはそれまでの「神高ゼミ」という名称を「神高探究」と改称し、「探究」活動を意識させるようカリキュラムが改訂された。2022年度からは、1年生「神高探究Ⅰ」1単位(0.75コマ)、2年生「神高探究Ⅱ」2単位(1.5コマ)の時間を設定した。

「神高探究Ⅰ」では1学期に基礎講座を実施し、座学とグループワークにより探究の方法論を学んでいる。2学期以降は担当教員が設定したテーマに沿って班をつくり探究活動をおこなう「プロジェクト探究Ⅰ」を実施している。3学期には「プロジェクト探究Ⅰ」の成果をまとめ、各班がポスター発表と質疑応答を行う。

2年生になると、同じ興味関心があるメンバーが集まり、自らテーマや課題を設定し、1年間かけて探究する「プロジェクト探究Ⅱ」を実施している。「プロジェクト探究Ⅰ」も「プロジェクト探究Ⅱ」も探究活動の柱である「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を通じて、他者と共に、試行錯誤しながら、能力や知識を養っていく活動を実施している。

2024年度は「神高探究Ⅰ」を担当する教員のうちで地歴科の教員が新聞を活用した探究活動を5テーマ提示し、希望する生徒により班を作った。

2 実践の内容

(Ⅰ) 新聞の活用方法

2024年9月と10月に6紙の新聞が本校に届くようにしてもらい、図書室のラックの上に各

紙ごとに日付順に重ね、生徒はいつでも閲覧できるようにした。神高探究Ⅰの時間を中心に図書室で各新聞を閲覧して探究活動を行った。

(Ⅱ) テーマ設定と指導

生徒は教員から提案した探究のテーマのうち以下の4テーマを選択した。

- | |
|--|
| (1) メディアから見るジェンダー問題 |
| (2) メディアから見る東アジア認識 |
| (3) メディアから見る人権意識 |
| (4) 「哲学、言語学、社会学」メディアは「事実」をどのように伝えているのか |

以上のテーマについて、(1)は2班、(2)～(4)は各1班、計5班(21名)が9月の「プロジェクト探究Ⅰ」開始から2月の発表会まで、9月、10月に届いた新聞を活用して探究活動を実践した。

教員の関与はテーマ設定のほかに、データ等の調査方法について指導、パワーポイントやポスター原稿をチェックすることで内容についてのアドバイスを行う程度にとどめている。なお2016、17年に本校で実施していたNIEの実践では興味・関心ある新聞記事を切り取り、それについてコメントをする活動を実施していたが、今回はタブレットを活用し、必要な記事を写メして活用する方法を実施した。



(Ⅲ) 記者派遣事業の活用

11月13日の神高探究Ⅰの授業時間を利用し、NIE記者派遣授業として、田中雄一郎・朝日新聞論説副主幹に来ていただいた。該当5班の生徒は各班が担当するテーマに関連した質問をし、田中副主幹には、生徒が担当するテーマに関する社説を提示していただいた。生徒から出た具体的な質問としては「日中韓」の報道の相違、新聞における主観と客観のあり方、ネットメディアとの相違点、各新聞社の相違点、人権についての認識が聞かれ、議論では記者や新聞社ごとの考え方にも焦点があてられた。



(Ⅳ) 個々の実践の内容

(1) メディアから見るジェンダー問題

「LGBTQ知ってますか」というタイトルの下、過去の新聞言説と現在の報道に注目して探究を行った。近年ジェンダーについての言及数は増加しているが、特に新聞は依然ジェンダー格差が存在する現状について批判的視点を持ち続け、問題点についての指摘を続けていることを示した。

(2) メディアから見る東アジア認識

「メディアから見る日中韓」というタイトルで同一の事象が日本と中国、日本と韓国との間で報道のされ方がどのように違うのかを探り、互いの国に対して持つ意識の考察を行った。調査方法としては、日中韓の新聞に直接あたり、それらの記述を比較することでそれぞれの国の認識を明らかにした。

探究の結果、同じ事象でも安全保障などでは各国とも自国を肯定的に報じ、内容も自国に都合がよいように取捨選択する傾向があり、歴史認識にかかわるような内容では両者とも他国に対する配慮がみられる場合があるという結果を提示した。

(3) メディアから見る人権意識

本テーマについては2つの班が担当をした。ただし両班とも直接人権意識を探るのではなく、メディアの報道方法が人権侵害につながっている可能性を考え、報道手法自体が抱える問題点をまず洗い出すことが重要であると考えた。その結果、両班とも当初よりテーマを変更した。

「ネットは果たして悪なのか」というテーマに変更して考察を行った班は兵庫知事選をテーマにテレビ報道、新聞、SNSの違いを比較検討した。とりわけ新聞については選挙報道においてほかのメディアに比べて客観的かつ公平であるという特徴をみいだした。一方でテレビ・新聞などのいわゆる「オールドメディア」とインターネット言論がお互いに敵視しあう対立構図そのものが抱える問題点に言及し、お互いのメディアが一方向的に敵視しあう現状は不健全であり、それぞれのメディアの特性を認めあうことでより良いメディア報道が生まれるのではないかと建設的な考察を行った。

「日本語の特性と報道の関係」というテーマに変更して探究を行った班は、受け取り手である我々がより公正に報道をとらえるためには日本語の特性を理解して報道に接した方がよいのではないかという問題意識から探究を行った。調査手法としては複数の新聞で共通する記事を比較し、共通する言葉の使用方法を抽出した。結果、日本の新聞においては主語より述語の優先、主語の重なり回避という特性を見出した。このことによって、主語をあいまいにすることであえて中立性の高い報道が行われ、中立性の維持がなされてい

るのではないかということを指摘した。

(4)「哲学、言語学、社会学」「メディアは「事実」をどのように伝えているのか」

新聞がある出来事を、どのように報じているかを検討し、伝え方の違いの原因や課題等を考察した。その際、どのような学問領域からアプローチするかを意識させるため、「哲学、言語学、社会学」という表現を冒頭に付した。これは、2年生の探究活動のテーマ設定や進路選択に役立たせたいという意図もある。

調査は朝日、毎日、読賣(各社新聞、五十音順)の記事をベースの資料とし、記事同士の比較やSNS等のインターネット上の情報とも比較した。また、記者派遣事業を活用し、聞き取り調査を行った。注意した点は、班員の主観が入ってしまわないよう可能な限り中立性を意識させるということと、安易なアンケート調査よりも、専門家への聞き取り調査を実施させるということである。新聞の分析や聞き取り調査等を含め、3時間程度を要した。

1人1社の新聞を割り当てて調査に当たった。もともと活発に議論することができる生徒たちであったが、一つのテーマに向けて活発に意見を交換する様子が見られた

生徒たちは、記事の表現の違いや、そもそも記事にする情報に違いがあること、情報の受け手として複数のメディアに触れることの有用性等に気づいたとしていた。また、聞き取り調査を通じて、自分たちには無い視点をもって探究に当たれたことの意義を挙げていた。

3 まとめ

今回の取り組みにおいて実践者の視点から意義深く、生徒への知的刺激も多かったのは論説委員との対話である。とくに来ていただいた時期が兵庫県知事選の直前であったこともあり、メディアの方の生々しい現状認識が聞けたのは、生徒が報道そのものや、新聞を含めたメディアごとの違いに興味を持つよ

ききっかけであった。論説委員の方もネットメディアの違いや、新聞社ごとのスタンスの違いについてかなり深く話してくださった。生徒も論説委員の方との対話をうまく発表に反映していた。

また新聞をNIEのプロジェクトにより提供していただきそれらの記事も有効活用していたが、短期間であったため該当する期間については深掘りできる反面、国を超えた分析や時系列を長くとった分析にはやや不向きな側面もあった。そのような手法で探究を行った班の発表ではネット上の資料や市立図書館にある縮刷版などを駆使していた。したがって今後の展望としてはNIEにおいて、時限的にでも各新聞社が持っている新聞記事のデータベースサービスを高校生が利用できるようなになればより深い探究や考察ができるのではないかと考えられる。



発表ポスターの例

特別分科会

大学生・社会人とNIE

～「情報の風景」「関心の領域」の現場から～

コーディネーター：勝沼直子 パネリスト：福田喜彦、竹内信行、中川尚子

小中学校・高校まで各地で実践されているNIE活動は、大学では盛んだとは言い難い。複雑で答えが一つでない難解な時代を、いかに読み解き、生きる力をつけていけばいいのか。18歳成人の時代に、メディアリテラシーの重要性は、社会人にこそ求められている。今大会では特別分科会として、大学や社会で新聞活用を実践している現場と、NIEに取り組める教員を育てる現場から登壇していただき、現在のNIEの延長線上にある問題について考え合う時間を設けた。

「NIEを実践できる教師を育てる」

兵庫教育大学教授 福田喜彦

■社会科教師としてのNIE実践

わたしが大学で専門としている社会科教育研究の分野は、NIEと密接な関係にある。

熊本の高等学校で教師をしている頃、勤務先がNIE実践指定校となったので、地理歴史科や公民科の担当科目で積極的に新聞を活用した授業実践を行った。

例えば、当時の新聞に掲載された「戦後60年」の特集記事を中心に、日本史Aの授業で新聞記事を活用した授業実践について検討した。本授業では、新聞記事を通して戦争の歴史的過程を学ぶことで現在の中国や韓国と日本との関係がどのようなものか、その背景にある出来事は何か、といった教科書や資料集では分かりにくい部分を生徒により深く印象づける授業に取り組むことができた。

■初等社会科教育法での取り組みから考える

兵庫教育大学の授業で学生は、初等社会科

の目標・内容・カリキュラムの全体構成、社会科の内容的な背景学問との関係、最新の社会科教育学の研究成果に基づく授業構成・授業実践・授業改善までを視野に入れて学ぶ。それにより、模擬授業・指導案作成・教材研究・情報機器の活用を学び、総合的な授業力の育成を目指している。神戸新聞社から講師を招き、新聞をどのように活用したらよいか、記者派遣でのNIE実践をもとにワークショップを交えて具体的に紹介していただいている。

■教員研修プログラムの取り組みから考える

兵庫教育大学が開設する教員研修プログラムでは、兵庫県、神戸市、堺市の中堅教諭等資質向上研修や兵庫県の15年・20年目の教員研修、神戸市アドバンス教員研修などと連携して多様な講習を提供している。そのなかで、わたしは、神戸新聞社の三好正文、武藤邦生両氏に協力いただき、毎年、学習指導等プログラムの社会科教育セミナーとして「思考力・判断力・表現力を育てるNIEを活用した小学校社会科授業づくり」に取り組んでいる。本講習では、神戸新聞社が開発したアプリである「ことまど」を活用し、社会科の新しい課題に対応した思考力・判断力・表現力を育成する実践力の向上を図っている。

■対話的な学びを深めるために

このように、高校や大学で「新聞」というメディアの持つ特性や機能に着目し、学習者の独自の視点で記事を選び、新聞から多様な情報を読み取らせるNIEを実践してきた。従来の社会科授業では、教師の一方的な知識重視型の授業が常に批判されてきた。そこで、新聞記事を

通して教員と生徒、生徒と生徒がお互いの意見をもとにして議論し、社会に対する新たな興味関心を引き出すことで、他者の見解を知り、対話的に学ぶ双方向的な授業に取り組んできた。こうした自分自身の教師生活での授業研究の経験を生かし、これからもNIEを実践できる教師を育てていきたいと考えている。

■引用及び参考文献

福田喜彦「新聞記事を活用した地歴科の授業実践-日本史A「軍国日本への道」の事例をもとに-」熊本県NIE推進協議会『平成17年度実践報告書』2006年7月、pp.35-40/
 福田喜彦・太田文子「現代社会への関心を高める授業実践-新聞記事のスクラップからみた日本社会の諸問題-」熊本県NIE推進協議会『平成18年度実践報告書』2007年7月、pp.51-57/
 兵庫県NIE推進協議会「教員目指す大学生に、NIEワークショップ」



「大学講義における新聞活用」

流通科学大学経済学部准教授 竹内信行

■「新聞読解」は基礎能力

「教育に新聞を」という声のもと、さまざまな教育機関で新聞を活用した教育が展開されている。そうした取り組みの一例として、流通科学大学では2019年より、1年生を対象に「基礎能力（新聞を読む）」という全15回の講義の受講を義務付けている。本報告では、本学におけるこの取り組みの内容と、そこから得られた成果や課題を紹介する。

■科目の位置づけ

大学での学修の目的は、専門的な知識やスキルを身につけることにある。しかし、それに加えて、卒業後にどのような進路を選ぶにせよ、共通して必要となる「社会人基礎能力」の習得も重要である。

そこで本学では、「対人対応能力」「ITリテラシー」「新聞を読み、理解できる力」を社会人基礎能力の基本と位置づけ、それぞれに対応する3つの基礎能力科目を開講し、1年次に履修することを義務付けている。本科目は、それら基礎能力科目の一つである。

■講義「新聞を読む」の概要

全15回の講義内容は、図のとおりである。その特色として、以下の4点が挙げられる。

①新聞の特色と読み方を詳しく取り扱う

講義の前半では、新聞の構成、新聞作成の過程、見出し作成、校閲体験など、新聞そのものに関する基礎知識を学ぶ。この構成の背景には、受講生の約80%の家庭で新聞が購読されておらず、また受講生自身も約90%が新聞をまったく読んでいないという実態がある。さらに、半数以上の受講生が新聞を「読みづらい」と感じている。こうした現状から、まずは新聞への興味や関心を喚起し、新聞に対する理解不足から生じる誤解の解消を目指している。

講義内容

第1回	社会人はなぜ「新聞を読む」必要があるのか
第2回	新聞の種類・構成
第3回	新聞記事の構成
第4回	新聞はどうやって作られるのか
第5回	ニュースを知る方法としての新聞の特徴
第6回	新聞をどう読むか

前半は「新聞そのもの」に関する講義

新聞の種類・構成。記事の構成（見出し、リード…）読み方
 新聞作成までの流れ（例：取材の方法、校閲作業…など）

第7回	新聞から政治・経済の動きを知ろう①
第8回	新聞から政治・経済の動きを知ろう②
第9回	新聞から政治・経済の動きを知ろう③
第10回	新聞から社会の動きを知ろう①
第11回	新聞から社会の動きを知ろう②
第12回	新聞から社会の動きを知ろう③
第13回	新聞から世界の動きを知ろう①
第14回	新聞から世界の動きを知ろう②
第15回	まとめ-これからも新聞を読み続けるために

後半は「新聞を読む」が中心の講義

新聞社説読み比べ、記事を用いたディスカッション…など

図 「新聞を読む」の講義内容

②新聞自体への理解を大学での学修や日常生活に応用する

たとえば「見出し作成」の技術は、レポートタイトルの作成に応用できる。このように「新聞そのものの理解」を、2年次以降の学修に必要なスキルの習得にもつなげている。

③大学教員の専門性を活かした新聞活用

講義の後半では、各担当教員の裁量により、自身の専門分野を活かして講義を行う。新聞を通じて現実社会を専門的知見とあわせて理解することで、2年次以降で学ぶ専門科目への導入や、専門教育への関心促進を目指す。

④新聞記者による出張講義の実施

実際に取材や記事執筆をしてきた現場記者の体験を直接聞き、そこから学ぶことは、講義理解度や新聞への関心を高めるうえで非常に効果的である。そこで神戸新聞の全面的な協力のもと、ほぼすべてのクラスで1～2コマ程度の記者による講演を実施している。

■講義の成果と課題

全15回の講義終了時には、約7割の学生が「新聞を読んでもみようと思う」と回答しており、講義の到達目標は一定程度達成できたと考えられる。一方で、新聞の有用性を理解しながらも、「実際に読む」という行動にはつながっていないケースも多く、講義内容のさらなる改善に向けた試行錯誤が続けられている。

「神戸市の新規採用職員『新聞研修』」

神戸市行財政局職員研修所副所長 中川尚子

■新規採用職員「新聞研修」の取り組み

4月に神戸市役所に入庁した新規採用職員の手元に毎日、新聞が届く。恒例の「新聞研修」だ。

2025年度は、まず辞令交付式約1カ月前に購読する新聞の希望調査が行われる。購読は4月1日から半年間続く。研修3日目には、神戸新聞社の富居雅人経営企画局次長を講師に迎え、新聞の特長・読み方、情報との向き合い方といった内容で講義があり、特に「話す力」について、情報発信とは相手の行動変容を促すことであるという言葉がとても印象的であった。行動変容を促すためのポイントとして、「伝える」と「伝わる」の違いについても、具体的な事例を交えた話は、研修生

の大きな気づきに繋がっていた。

講義後は、各自が購読紙から選んで準備してきた記事についてのグループワークを行い、約3時間の研修はあっという間に終了した。

全体を通して、情報との向き合い方について研修生1人1人が考えを深めていく姿を垣間見ることができ、その中で新聞を読むことの大切さを実感している様子がかがえた。

研修は、9月末までに3回、記事を1本選んでレポートを作成し提出する。上司や新聞社の方々の講評がつけて返されることになっている。



■「新聞研修」の狙い

「新聞研修」は、久元喜造市長の「若い職員にもっと新聞を読んでもらいたい」という強い思いから、2019年度に始まった。毎年実施するアンケートでは、入庁前の時点で「全く」「ほとんど」読んでいない者は、例年約70%いる。新聞を読む習慣がない者が多い。そこで研修は、

- ①新聞を読む習慣を身につける
- ②新聞購読を通じて社会人として必要な知識と能力を習得する
- ③研修を通じて「読む力」「書く力」「話す力」の向上を図る

を主たる目的に実施している。筆者なりに言い換えるならば、

①新聞には、真偽が不確かで個人の志向によって偏りがちなネット上の情報とは違い、多様で確かな情報が掲載される。また地域に特化した情報、あまり関心のない分野の情報も等しく掲載される。「情報の偏食」を防ぐ

メディアだということに気づいてほしい。

②新聞には、様々な検証や問題提起、課題解決の提案といった内容も含まれる。新聞に触れ、自治体を取り巻く社会情勢・社会課題を適切に把握し、住民サービスを実施できる職員、幅広い分野に関心をもつ社会人になってほしい。

③新聞で得た情報を他人と共有していくことで、効率的な読解力の習得や職務に必要な文章力、伝える力を身につけてほしい。
—ということではないかと考えている。

■「新聞研修」の効果と課題

講義後のアンケート結果を見ると、「伝える→伝わる」ことの大切さを理解でき、非常に面白い講義だった。情報の偏食が起こらないように新聞も読んでいきたい」「講義や時事関心度チェックを通して、知識不足に気づかされた。新聞情報から広い視野を持ち、考えを深められるよう意識したい」といったコメントが見られ、研修の効果は一定の成果を上げていることが分かる。

購読開始後2カ月もすれば、新聞を「時々(週3～4日)読む」が最多となる。とはいえ、「全く」「ほとんど」読んでいない者も、依然10%程度いる。

2022～24年採用職員の新聞購読アンケート結果 (記名回答)

入庁前(4月入庁)	人数	割合
毎日読んでいる	41	7%
ほぼ毎日読んでいる(週5～6日程度)	24	4%
時々読んでいる(週3～4日程度)	89	15%
ほとんど読んでいない(週1～2日程度)	162	26%
全く読んでいない	297	48%
合計	613	

入庁半年後(10月時点)	人数	割合
毎日読んでいる	80	17%
ほぼ毎日読んでいる(週5～6日程度)	161	34%
時々読んでいる(週3～4日程度)	182	39%
ほとんど読んでいない(週1～2日程度)	39	8%
全く読んでいない	9	2%
合計	471	

そこで今年度からは、より気軽に新聞に触れられる時間がとれるようにと、紙の新聞から電子版の購読に切り替えた。レポートの講評は、客観的、多角的な視点を期待し、新聞各社にお願いしている。今後も、多様で確かな情報をバランスよく得る力を身につけ、よりよい市民サービスの創出につながるよう、試行錯誤を続けながら「新聞研修」に取り組んでいきたい。

登壇者プロフィール

福田喜彦(ふくだ・よしひこ)

教育学博士。2022年から兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科社会系教育連合講座教授。主な編著書に、社会科の理念と授業を考える会『子どもの心理と教育内容の論理を結びつけた社会科授業』(風間書房)、社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究のブレイクスルー』(風間書房)など。

竹内信行(たけうち・のぶゆき)

流通科学大学経済学部准教授。経済学博士。1980年、富山県生まれ。2009年、神戸大学大学院国際協力研究科を卒業。2018年から流通科学大学。専門は「国際経済学」と「経済発展論」の理論研究。大学では新聞を活用した講義「基礎能力(新聞を読む)」のとりまとめ役。

中川尚子(なかがわ・しょうこ)

神戸市行財政局職員研修所副所長。兵庫県川西市出身。1999年4月、神戸市採用。2012年、東灘区市民課担当係長。2022年、企画調整局企業立地課担当課長。2023年、行財政局職員研修所人材育成担当課長を経て、2025年4月から現職。

コーディネーター

勝沼直子(かつぬま・なおこ)

神戸新聞社執行役員論説委員長。1964年、新潟市生まれ。1987年、東北大学文学部卒業、新潟日報社入社。1997年、同社を退社し、神戸新聞社入社。社会部、阪神総局、東京支社で主に行政・政治分野を担当。東京支社編集部部長、論説副委員長を経て、2021年から現職。

ワーク ショップ

「防災はがき新聞」を作ろう！

～いのちを守る「備え」の種まき～

講師：日本新聞協会NIEコーディネーター 関口修司
協力：公益財団法人 理想教育財団

地震、津波、台風などの自然災害は、発生する場所や時期により被害状況はさまざまです。多様な災害に対する「備え」の創造力を育む「防災はがき新聞」に取り組んでみませんか。災害発生時の状況を自分事として考え、どのようにいのちを守ればよいかを「防災はがき新聞」にしてみることで、いざという時、冷静に対応できる力を養っておきましょう。短い時間で制作できるので、世代を問わず、防災学習として主体的に取り組めます。

■防災はがき新聞作りの手順

〈1〉想定する災害の過去の発生状況を調べる

過去の新聞や、インターネット上の動画、写真（情報源を確認！）などを見て、想定する災害の具体的な被害の様子を調べましょう。



【阪神・淡路大震災】橋脚もろとも横倒しになった阪神高速道路神戸線＝1995年1月17日、神戸市東灘区深江本町（いずれも神戸新聞社提供）

〈2〉暮らす地域の災害の危険性を知っておく

地元自治体などが地域で想定される災害についてのハザードマップを公表しています。学校や自宅の周辺にどんな危険があるかを調

べてみましょう。

※上記の調べ事をしておくと、「防災はがき新聞」で、より現実的な災害の「設定」ができます。

〈3〉想定される災害を「設定」する

「防災はがき新聞」の制作前に「こんな災害が起きた想定で…」という全員共通の「設定」を決めます。災害の種類、日時、場所、気象などの諸条件をできるだけ具体的にすると、「どんな危険があるか、どう危険を回避するか」のイメージが、より明確になります。

災害の種類	地震（震度）、台風（風速）、津波（規模）、火災、豪雨、洪水、竜巻など。複合的な災害の想定も
日時	○月○日 午前・午後 ○時○分
気象条件	気温、風速、天候など
被災場所	例：学校、教室、自宅、地域
避難場所	例：○○小学校、●●中学校、 △△公園、▲▲公民館など

想定する災害の設定例：「1月17日午前5時46分、震度7の地震発生。気温は3度、雨。自宅が大きく損壊して近所の公園に避難」など。



【東日本大震災】津波で大きな被害を受けた町＝2011年3月、宮城県名取市

〈4〉「防災はがき新聞」を制作する

1段目 災害を「設定」する

全員が同じ「設定」で取り組みます。設定内容と「①災害の設定見出し」を書き、ふさわしい新聞のタイトルを考えます。空いた部分にはイラストや写真を入れましょう。

2段目 避難のストーリーを書く

危険な状況をいくつか順に想定していき、どのように避難場所まで行くかを書きます。3段目の前半まで書いても構いません。内容を要約して「小見出し②」を書きます。

3段目 事前に災害発生が分かっていたらどうするか

「小見出し③」には時間や日数など共通で災害発生を設定し、その災害の発生が分かっていたらどうするか（心づもり、身内での約束事、準備しておく物やことなど）を書きます。（普段から家族会議の開催や、避難場所と避難所の確認などをおきましょう）

「防災はがき新聞」のイメージ

①災害の設定見出し	
1段目	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">イラスト 写真など</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">夜明け前に震度7の 大地震が発生した</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">新聞の タイトル</div> </div>
2段目	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">発行日 発行者</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">防災袋を持って 避難先を目指す</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">小見出し②</div> </div>
3段目	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">3日後に大きな地震が 起こると分かっていたら</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">小見出し③</div> </div>

〈5〉出来上がったら、互いに読み合い、感想を発表し合う

全員で「防災はがき新聞」を読み合います。
①想定した危険は適切だったか ②避難方法は適切か ③自分の新聞に見逃していた危険はなかったか ④「防災はがき新聞」を作ってみて—などの感想を話し合しましょう。付箋を貼り合うのもよいです。



【熊本地震】2度の激震で倒壊した家屋 = 2016年5月、熊本県益城町



【能登半島地震】大規模火災で焼失した「輪島朝市」 = 2024年3月、石川県輪島市

■講師プロフィール

関口修司氏



せきぐち・しゅうじ 日本新聞協会NIEコーディネーター。1955年生まれ。東京学芸大学卒業後、東京都公立小学校教諭に。社会科とNIE（新聞教育）を中心に研究する。2004年度から東京都北区の3小学校の校長を歴任。学校全体でのNIEを推進し、朝学習の時間等に継続して取り組む「NIEタイム」を提唱した。2016年より現職。

「はがき新聞」は公益財団法人 理想教育財団の登録商標です

新聞アート展示

全国の2025年元日の新聞で巨大ドレスを製作

世界で活躍する「新聞女」西沢みゆきさん

メッセージ

全国津々浦々から届いた新聞を眺めていると、知らない社名や個性的な題字に見入ってしまい、制作の手がたびたび止まりました。正月紙面を飾る人々の顔は、希望に満ちて輝いていました。しかし、昨年の上旬には能登半島地震がありました。

1995年の阪神・淡路大震災で、兵庫県西宮市にあった私の実家も被災しました。当時27歳でアパレルデザイナーだった私は人生最大の衝撃を受け、明日終わってしまうかもしれない人生なら、自分にしかできない表現をやって生きていこうと、脱サラしました。

子どものころから好きだった新聞紙を使って創作活動をするうち、海外の美術館から招待されてパフォーマンスや展覧会を開くようになりました。震災は衝撃的で辛い経験でしたが、おかげで素晴らしい人生が開けて感謝もしています。

20年前からウクライナで展示やパフォーマンスをしています。2022年のロシアによる侵攻後も、各地を巡って展覧会や寄付活動を続けています。世界最貧国の一つともいわれる西アフリカのブルキナファソも訪ねました。その度実感するのが、傷ついた人々を癒や



西アフリカ・ブルキナファソでのパフォーマンスと寄付活動で (2018年10月)

したり勇気づけたりするアートの力です。

科学技術の進歩で生成AIが誕生し、日常生活や人の価値観も変わりつつあります。しかし、「人間」そのものは何も変わっていません。どんなに技術が発展しようとも、「人間」そのものを作ったり、死んだ人を生き返らせたりすることはできません。ならば、イキイキ生きるも、死んだように生きるも、自分次第。人間は大宇宙の一部。そんな気分を、この作品に表現してみました。



中国・北京の日中現代芸術展にて (2006年10月)



米ニューヨークのグッゲンハイム美術館“Art After Dark”にて (2013年3月)



西沢みゆき氏

にしざわ・みゆき 1987年、関西女子美術短期大学在学中に、元具体美術協会の嶋本昭三氏に師事。卒業後、大手アパレル会社のデザイナーを経て、2001年より「新聞女」として世界各地で現地の古新聞を使ったアートパフォーマンスを始める。国内外の著名美術展で発表を重ね、受賞も多数。

神戸大会では昨年の京都大会に続いて、ポスター発表を行います。北は北海道から南は沖縄まで、全国各地の学校・団体・新聞社にNIE実践例を紹介いただくほか、児童生徒が作成したポスターも並びます。参加団体数は約70にのぼっています。阪神・淡路大震災から30年の節目を迎え、「防災とNIE」のコーナーも設けます。

ポスター発表は、神戸大会2日目の8月1日午前8時～午後2時ごろ、甲南大学岡本キャンパスで行います。発表者がポスターそばで説明するセッションのほか、紹介動画や説明資料を添えているケースもあります。

兵庫県内

姫路市立豊富小中学校

全校で取り組むNIE

開校時から姫路の地で、全校で情報活用能力とメディアリテラシーの育成に取り組んでいる。1～9年生の発達段階に応じた活動を推進。記事に親しみ、読み解き、活用する学びを通し、社会の変化に主体的に対応できる力を育む。情報があふれる現代において、子どもたちが自ら考え判断し、より良い社会を築くための基盤を培う。

兵庫県内

姫路市教育委員会

学校図書館からNIE

姫路市教育委員会では学校図書館の機能向上を図るため、すべての市立学校に学校司書を配置し、児童生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を推進している。授業支援や読書支援の一助とするため、NIEを取り入れてほしいという思いのもと、学校司書を対象に「まわしよみ新聞」の研修を行った。

兵庫県内

姫路市立飾磨中部中学校

新聞から読み取る「対立」と「合意」

社会科公民的分野で学ぶ「対立」と「合意」だが、社会ではいつの時代もあらゆる場所で「対立」が起こり、そのたび「合意」が図られることに気づく生徒は少ない。新聞は現代社会のそれらを読み解く最善のツール。時事に興味を持ち、生徒の社会参画を促し、社会を主体的に生きる公民の育成につながればと思い、今回の授業を企画した。

兵庫県内

兵庫県立山崎高等学校

新聞を通して批判的なものの見方を養い、主権者としての自覚を促す

選挙権を持つ者が日々増えていく高校3年生。しかし、政策と自分自身とのつながりに実感はなく、政治への関心は薄い。そこで総合的な探究の時間を用い、社会にある問題を知り、批判的思考を養うことを目的に、さまざまな新聞記事を読み議論した。折しも耳目を集めた選挙が行われ、その結果が効果的な学習の場となった。

兵庫県内

姫路市立あかつき中学校

総合的な学習の時間 「新聞記事をつくろう」

本校は2023年4月に開校した播磨地区初の夜間中学校で、16歳から91歳までの幅広い年齢や5カ国に至るルーツがあり、言語や文化の異なる多様な生徒たちが在籍している。新聞から写真を選んで見出しを自分で考えて、記事をつくった。選んだ記事の内容も、言語もさまざまに興味深い新聞記事が完成した。

兵庫県内

明石市立大久保小学校

新聞記事から「大きな数」さがし

新聞記事の中には、数多くの記事や広告がある。それらには、数字が含まれていることが多い。小学算数3年「1万をこえる数」、4年「1億をこえる数」の学習時に「大きな数」見つけを設定し、数の表記方法や大きさ比べをおこなった。また、国語科とも関連させ使われている「単位」についても目を向けさせた。

兵庫県内

明石市立大蔵中学校

新聞で小中交流会!

特別支援学級の授業に「子ども新聞」などを取り入れ、記事について意見交流を行っている。1学期、神戸新聞記者に「より新聞になじむこと、新聞を使ってできること、新聞の読み方について」をテーマに出前授業をしてもらい、学んだことを校区の小学生に伝える。どう伝えるかを考えて取り組み、発信する力を育てたい。

兵庫県内

明石市立高丘中学校、 神戸市立高倉中学校

NIEの取り組みを通じた 「トライやる・ウィーク」の発表

公立中学2年生が就労体験する、兵庫の特色ある取り組み「トライやる・ウィーク」。各事業所での1週間の体験活動を、NIE活動による学びを生かして記録に残し、発表するという取り組みである。今回のポスターは同様のコンセプトにおいて、「新聞づくり」を行った明石市の中学校と、パワーポイントで発表した神戸市の中学校の合同制作である。

兵庫県内

愛徳学園小学校

1分間スピーチの原稿を書こう

情報を伝える力を育むため、新聞の「伝える工夫」について学び、「新聞作り」に取り組んだ。しかし、新聞を読む体験が少なく、紙面の様子がわからない児童もいた。そこで、「子ども新聞」を読んで、はがき新聞を作成し、毎朝発表した。新聞を読むことから始めた新聞作成の取り組みを紹介する。

兵庫県内

兵庫県立神戸甲北高等学校

生涯探Cue時代のNIE ～学びが紡ぐキャリアと地域～

「読む」から「問いを立てる」へ。高齢化が進む地域を背景に、社会課題に触れ、自らの未来を見つめるきっかけ(Cue)として新聞を再定義した。記者講演や防災教育をはじめとする多角的な活動を通じてキャリア・地域・表現を結ぶ探究的な学びを設計し、生徒の思考力と社会接続力を育成した新聞活用の実践について報告する。

兵庫県内

神戸市立有野中学校

探究的な平和学習

神戸市立有野中学校では「沖縄戦」をテーマとして平和学習を神戸新聞の記者の方と共同して行った。本校のテーマである探究的な学習の一環として、事前の学習によって自ら課題を見つけ、修学旅行を通じてどのように取材を行うか学習を行い、新聞形式やプレゼンテーション形式で学習内容をまとめた。その成果をまとめている。

兵庫県内

兵庫県立伊川谷高等学校①

はがきと学年通信でNIE —京都探究で残そう、はがき文化—

京都遠足を題材とする「事前学習はがき新聞の作成と投函」「学年通信活用による京都への興味関心付け」「京都遠足実施時の事前学習内容の確認」「帰校後の感想はがき新聞の作成」という、一連の内容を関連付けた、はがき新聞・学年通信・京都遠足のコラボによるNIE実践である。

兵庫県内

兵庫県立伊川谷高等学校②

〇〇教育を包括した学年通信の提案と実践 —読まれる通信作りを通じた新聞文化の継承—

教育の多様化に伴い教育現場で必要とされる〇〇教育の学習に、学年通信を活用する。学年通信は生徒・保護者が「読みたくなる」演出を施しており、学校における働き方改革など、学年通信の発行は減少の一途をたどるなか、「生徒に読まれる」「生徒が学ぶ」「保護者の情報源となる」ための学年通信の在り方について考察を行う。

兵庫県内

滝川中学校・高等学校

校外研修×新聞

SDGsに関する校外研修を実施し、研修で得た知識や気づきを壁新聞としてまとめた。研修前には取材の方法を、研修後には効果的な紙面構成の技術を学ぶなど、壁新聞作成に本格的に取り組んだ。完成した壁新聞は保護者に向けた発表にも活用され、校外での学びをさらに発展させるうえで重要な役割を果たしている。

兵庫県内

神戸市立雲雀丘中学校

新聞は子どもと世の中の架け橋

本校は少子高齢化が著しい市街地に位置し、児童生徒数が激減する地域の学校である。新聞を通じて世の中につながる取り組みを行い、地域課題の発見、解決に向けた提案に役立ててきた。新聞はテーマ別に保管し教科の学習や推薦入試対策として活用している。誕生日の新聞や震災当時の新聞も活用している。

兵庫県内

神戸大附属中等教育学校

自身の主張を新聞形式でまとめる

本校は、神戸市東灘区にある中高一貫校で、本学年（中3生）の生徒は1年時からKP（本校独自の総合的な学習）においてNIEを取り入れてきた。課題を見つける・調べる・まとめる・発表する、という場面で講師を招き事前学習を行った。新聞形式にまとめることで、図・表・画像などを使って、自分の主張したいことを発表する。

兵庫県内

甲南女子中学校

新聞づくりを通した「対話」力の育成

本発表は、本校の総合的な学習の時間「対話」での取り組みである。直接、話す・聞く・考えることで得られる「対話」力を、新聞づくりを通して、自己表現を深めるとともに発信力を養う取り組みである。本新聞は2024年度、奈良・和歌山への宿泊研修ならびに「KOBE SDGs探究プログラム」による。

兵庫県内

甲南小学校

地域とのきずなを!

神戸市東灘区。海と山が迫る神戸らしい坂道の多い町。その風光明媚（めいび）な町では、毎年5月の連休に「東灘だんじり祭」が行われる。地域の方々と一緒に汗を流し、大声を出しながら「だんじり」を引く経験を記者になったつもりで記事を書いたり、調べたりしたものを発表したい。低学年で行った活動が中学年、高学年にどのようにつながっていくのか、その様子も一緒に発表する。

兵庫県内

西宮市立浜脇中学校

衆議院選挙模擬投票

2024年10月に行われた衆議院選挙に合わせて、本校3年生283名を対象に兵庫7区の模擬投票を行った。事前に、神戸新聞社の出前授業や各新聞社のポートマッチを通してどこに投票すべきなのか考えさせた。また、開票後には実際の結果と比較し、考察を行った。生徒たちが「1票の重み」を実感できる経験となった。

兵庫県内

尼崎市立南武庫之荘中学校

新聞ノートで読む力と書く力を育てる

新聞記事を要約するだけでなく、疑問に思ったことや、知識を深めるために、図表やイラストを使って文章をまとめる力を養う「新聞ノート」に取り組んでいる。週末や長期休みの課題とし、新聞に親しむ機会を作っている。朝学習や自習課題では、文章の構成力や表現力、語彙を増やすために「コラム写し」に取り組んでいる。

兵庫県内

神戸市立淡河小学校、同市立有馬小学校、養父市立宿南小学校、淡路市立大町小学校

小規模校4小学校で新聞を合同製作

兵庫は広い。北は日本海、南は太平洋に面する。神戸、淡路、但馬地域にある4つの小学校が2021年度、合同で新聞を製作し、オンラインで発表した。当時のコロナ禍を逆手に取り、各地にある小規模校がオンラインで交流しようという企画だった。発表会では、児童たちがそれぞれの地元で取材した歴史や自然、町の話について伝え合った。

兵庫県内

養父市立建屋小学校

英語を学ぶ「イングリッシュマラソン」

英語教育などを推進する小規模特任校である。ゲームを通じて英語を学ぶ「イングリッシュマラソン」は、兵庫県NIE推進協議会の提案で英字新聞も用いて2018年度から始まり、今では地域を巻き込んだ催しへと発展した。児童たちは学年を超えて数グループに分かれ、各教室をめぐり、外国語指導助手（ALT）らが出題する問題を解いていく。

兵庫県内

デザイン・クリエイティブ
センター神戸

ちびっこうべ2024ちびっこうべ新聞社

子どもたちが社会の仕組みや仕事について楽しく学び、子どもだけの架空のまちをつくり・運営する体験型プログラム。さまざまな職種が体験でき、働いた対価として得た通貨を使い、買い物やイベントに参加することができる。ちびっこうべ新聞社では講師の指導の下、取材・紙面制作を行い、印刷、発行、販売までを体験した。

兵庫県内

有限会社リバーワークス

ネイチャースタジオラボ
湊山温泉で取材しよう!新聞記者体験

ネイチャースタジオラボは、子どもが「まちにある学び」を楽しむためのシリーズ企画。2025年1月は子どもたちが湊山温泉（神戸市兵庫区）を取材し、記事を書き、新聞をつくった。古くは平清盛が湯治したと伝わる。自分の言葉で温泉の魅力を伝える中で、いつものまちの風景の中に「気になる」や「伝えたい」が芽生える体験となった。

兵庫県内

関西学院大学新聞総部

学生主体の新聞総部
関学の「今」を伝える

私たち関西学院大学新聞総部は、1922年から続く歴史と伝統ある学生連盟団体である。年6回、新聞を発行しており、取材から記事の修正、校閲、紙面のデザインまで全て学生が行っている。今後は、総部のウェブサイトや交流サイト（SNS）の活用を強化し、学外に向けてのアピールをさらに進めていくことが目標である。

兵庫県内

兵庫県立尼崎青少年創造劇場
(ピッコロシアター)

まわしよみ新聞×演劇ワークショップ

当シアターでは、2015年から、壁新聞づくりと演劇を組み合わせた参加型ワークショップを実施している。陸奥賢氏指導のもと「まわしよみ新聞」を作成し、県立ピッコロ劇団員がファシリテーターとなって「まわしよみ新聞」の中の記事を演劇化、最後は皆で上演発表を行う。毎回、世代を超えた参加者によるユニークな作品が立ち上がる。

防災

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科

未災者が教訓を伝える取り組み

本校環境防災科の有志生徒は、教員への被災体験の聞き取りや防災読本の配布といった活動を行っている。生徒たちは災害を経験していない未災者であるけれども、被災経験の有無に関わらず皆さんの思いに真摯に向き合うことで、気づきを得ている。そして、発信方法を工夫しながらその気づきを多くの方に伝えている。

防災

神戸市立白川小学校

「震災ダイアリー」から防災学習へ

阪神・淡路大震災当日からの1年間を撮影した写真を毎日掲載する神戸新聞社の企画「震災ダイアリー」。運動場で卒業式をする写真に子どもたちは驚き、「何とかして卒業式をしたい」という当時の人々の思いを想像した。自分たちに何ができるのか。震災から30年の節目の年、記事を機に防災学習が広がった。

防災

明石市立藤江小学校

発生当時の新聞で知る「あの日の記憶」

発生から30年を迎えた阪神・淡路大震災について、当時の神戸新聞を通じて学ぶ授業を毎年続け、児童と震災を語り継いでいく意味について考えている。「1月17日を兵庫県民は大切にしてきたが、それはなぜか」と問いかけると、児童は当時の新聞を読んで心に残った言葉を黒板に書き出した。黒板には「あの日」があふれた。

防災

南あわじ市立沼島小中学校

未来へ希望を!
石川ピカピカ大作戦で感じたこと

淡路島の南、太平洋にうかぶ沼島。「国生み神話」の舞台であり、沼島音頭や子供太鼓の伝統が根付いている。能登半島地震は、南海トラフ地震が想定される沼島にとってまさに「自分ごと」であり、能登半島と沼島の未来へ「希望」を描こうと子どもたちは活動を展開した。そして、沼島の人や全国への語り継ぎに発展していった。

防 災

南あわじ市 防災ジュニアリーダー

災害を学び、地域を支える

南あわじ市では、小中学生が「防災ジュニアリーダー」として、東日本大震災の被災地で研修したり、地域の防災訓練の運営に果敢に挑戦したり精力的に活動している。ホンモノとの出会いを通して「わたしの在り方、生き方」を深め、地域を支える一員として、まちづくりへ力強く踏み出している。

防 災

労働者協同組合こども編集部

プロ記者×こども記者で 震災の教訓を未来に伝える

2025年1月、「震災30年特別号」制作のため「こどもみらい通信社臨時編集室」を開催した。震災の教訓を同世代に伝えるための新聞（ニュースカード）を限られた時間にチームで制作することで、新聞社の緊張感を体感した。また子どもたちがプロの記者と協同することで、世代を超えたネットワークを築く機会ともなった。

防 災

117KOBE ぼうさい委員会

兵庫の大学生が阪神・淡路大震災の教訓を 次世代に伝える

兵庫県内の大学生が、神戸新聞社や神戸市とともに震災の教訓を学び、その経験を活かして災害に強いまちづくりを目指そうと立ち上げたプロジェクト。小中高校への出前授業や、防災工作作りなどのワークショップを通じて、阪神・淡路大震災の教訓、防災の大切さを次世代につなぐ活動を行っている。

防 災

北海道むかわ町立鶴川中学校

報道からふりかえる震災学習 ～1枚の報道写真が物語る被災者の思い～

北海道胆振東部地震（2018年）で被災したあの日から「守ろう わたしの命 あなたの命 つなげよう 9.6 あの日わたしと未来のわたしたち」をスローガンに、震災の記憶を地域の方と共に刻み、震災の教訓を後世に伝えていくための防災教育が始まった。本ポスターはフォトランゲージの手法を取り入れた震災学習を報告する。

防 災

北海道栗山町立栗山小学校

8000人の笑顔プロジェクト×NIE ～胆振東部地震から復興へ歩んだ6年生～

2018年9月の北海道胆振東部地震の被害を受けた安平町の早来小学校6年生による「総合的な学習の時間」の実践報告。震災で元気を失っている町民のみなさんに元気を取り戻してほしいと考えた児童たちが、新聞社や日本全国、世界各国の支えをいただきながら、町民の数の笑顔の写真を集めた「8000人の笑顔プロジェクト」の記録だ。

防 災

岩手日報社

最後だとわかっていたら教育プログラム

3月11日、東日本大震災。それは「明日が来ることは当たり前ではない」と知った日。岩手日報が取り組む企画「最後だとわかっていたら」の紙面や映像を、佐賀県のNIEアドバイザー光武正夫氏の協力により、教育プログラムとして全国で道徳や復興教育の教材に活用しやすいように、学習指導案なども加えて開発した。

防 災

河北新報社 今できることプロジェクト

震災を知らない世代が、次代につなぐ 記憶と教訓

東日本大震災10年の2021年より宮城県内の全中学校に中学生が被災地取材した「震災伝承新聞」を配布。発災前後の生まれで被災の記憶がない仙台圏の中学生が県内3カ所取材。被災地での学びを咀嚼・整理し同世代に向け言語化することで、相互の理解が深まり、防災・減災意識向上にも役立つと学校から評価を受けている。

防 災

河北新報社

新聞を活用して災害への備えを発信

宮城県内の中学生が、かほく防災記者研修（河北新報社主催）に参加し、東日本大震災（2011年3月11日）の教訓を学び、新聞の手法と紙面を使って備えを呼びかける。生徒は自ら避難訓練を計画し、家族と最寄りの避難先へ移動。課題と成果を記事にまとめた後、見出しも考えて「マイ防災新聞」を完成させる。記事は河北新報朝刊にも掲載される。

防 災

一般社団法人 こどもみらい研究所

石巻日日こども新聞と こどもみらい通信社のあゆみ

こどもみらい研究所では、子どもたちが自ら未来を描く力を育むために、「知る」「調べる」「発信する」力の向上を大切にし、取材活動を通じてその成長を応援している。取材の成果は、2025年に復刊した「石巻日日こども新聞」およびオンラインメディア「こどもみらい通信社」にて発信し、子どもたちの声を社会へ届けている。

防 災

福島県、 ふくしまの学び実行委員会

ジャーナリストスクール 福島の子どもたちが震災復興を取材

福島県内の子どもたちが東日本大震災からの復興について取材し、新聞を作る「ジャーナリストスクール」を行っている。相双地方の企業や団体取材し、「ふくしまの今」を発信。福島県とふくしまの学び実行委員会の主催、福島民報社、福島民友新聞社の特別協力。ジャーナリストの池上彰さんが特別講師を務めている。

防 災

新潟県新発田市立 東小学校5年 大竹 葵さん

新聞から広がる防災の輪

私は能登半島地震に衝撃を受け、もっと防災について知りたいと思い、防災士の資格を取った。新聞で紹介されたことで、地域や施設の方々、同じ防災士の資格を持つ県外の小学生とつながることができた。また、地域で日頃から災害に備えていることを発信することもできた。防災の輪からさらに広げていけるものを追求したい。

防 災

新潟市立南万代小学校

マイ地域防災マップ 「内水氾濫に備える!!」

信濃川に隣接する当校では、川からの浸水被害を想定した備えを行ってきた。それに加えて、近年は豪雨災害による内水氾濫の危機が叫ばれるようになった。本実践では、新潟県防災士協会のご支援により児童が行った防災街歩きでサンプリングした危険箇所や注意点を地図に表し、地域に対して発信した活動を紹介する。

防 災

新潟県上越市立中郷中学校

地域防災について考えよう ～伝える、つながる、備える～

「防災学習」の中で、生徒たちは、災害時のフェイクニュースの危険性や、日常のフェイクニュースに対して、適切な視点と適切な行動選択の必要性を強く感じた。まとめの段階でフェイクニュースを含んだ新聞を作成し、他校が作成したフェイクニュースを含んだ新聞と読み合い、オンラインで交流しながら、相手が作成したフェイクニュースを読み解く活動を紹介する。

防 災

NPO 法人ふるさと未来創造堂

学びを深め、安心・安全な未来への 働き掛けとなる防災かべ新聞づくり

新潟県において、小・中学生対象の防災教育イベント「こども防災未来会議®防災かべ新聞コンクール」を毎年開催している。子どもが防災を学んだ成果発信の機会として活用されているほか、新聞を活用した学校間交流で学びを再構築したり、県内3箇所での展示会を通して、県民全体の防災意識を高めたりもしている。

防 災

静岡県・ 常葉大学附属常葉高等学校

常葉高新聞～防災～

静岡新聞を通じて、石川県能登半島の中学3年生と交流したことをきっかけに、総合的探究の活動で、「女性による避難所運営」を考えた。運営に関わる女性が少なく、仕事分担や更衣場所、トイレなどさまざまな弊害があり、もっと女性の視点が必要だとわかった。また防災先進県といわれる本県の取り組みを紹介したい。

防 災

静岡県・ 桐陽高等学校 普通コース

災害時に役立つ人材に

本校では福島被災地研修を2011年6月より毎年実施している。①地震や津波の恐ろしさを知り②復興を祈念し、河津桜の植樹行い③被災者との交流一の3つが目的である。探究活動のテーマを防災とし、被災地研修だけではなく、防災クッキングや応急処置等の活動を通し、防災への意識を高め、災害時救助側にたてる人材育成が目標である。

防災

静岡県御前崎市牧之原市学校 組合立御前崎中学校

南海トラフに備えるNIE

今後30年以内に80%程度の確率で発生するといわれている南海トラフ巨大地震において、静岡県はもっとも被害が大きくなる可能性のあるエリアとされる。被害を最小限に抑えるために、新聞の関連記事から実感をもち、生きた情報を集め、自分だったらどうするかを考え、防災の意識を高めていく学習を行った。

防災

金沢市立湯涌小学校

能登半島地震を考える

能登半島地震から1年が経過し、地震関連の報道内容は復興フェーズへと移行した。本校NIE活動も2年目を迎え、新聞に「触れる・楽しむ」から「考え・伝える」へと発展してきた。児童が記事を選び、自らの興味・関心から感じたことや考えたことを発信する探究活動を通して「能登を忘れない」という想いを社会へ広げていく。

防災

奈良女子大学附属中等教育学校 ならふく(中学3年)

災害報道に学ぶメディアリテラシー

新聞における災害報道をテレビや交流サイト(SNS)といった他のメディアの情報と比較することで、各メディアによる特徴や違いを認識すること、また災害という非常時においても自ら適切に情報を選別し、その情報を判断することのできる批判的思考力を養うことを目指した探究について報告する。

防災

奈良女子大学附属中等教育学校 ならふく(高校2年、1年)

新聞を用いた教育の可能性と課題 —高校生自主的な探究の学び—

本発表では、奈良女子大学附属中等教育学校の高校1年生の自主的な探究活動である、学校及び地域の防災機能や意識向上の活動を発表する。また、高校2年生はフェイクニュース時代にあって、「リアル」な情報の重要性を理解する体験的な学びとして、修学旅行に新聞を活用した学びについて提案する。

兵庫県外

栃木県立今市高等学校

高校数学と社会を結ぶ「新聞」

数学は役に立たないと考えている人が非常に多い。しかし、数学の知識は日常生活や社会生活のさまざまな場面で使われている。抽象的な内容が書かれた教科書しか見ていないとそれを感じることはない。数学に関連する新聞記事を生徒に見せることで、数学と社会がつながっていることが実感でき、数学に対する学習意欲が高まる。

兵庫県外

茨城新聞社

新聞×ボードゲーム

複数の新聞をボードにしたカードゲームを作製した。新聞に親しみながら、情報を多面的・多角的に見て判断する「メディアリテラシー」と「主権者意識」を育むことがねらい。4～6人のグループで、「子」が話題にしている「お題」の記事を、「親」が「子」のヒントをもとに当てるゲームで、楽しく学べる。

兵庫県外

越谷市立増林小学校

1日5分で効果満点!看護学生とNIE!

講義前5分間にスマホを使って今週の医療ニュースを3つ選び、記事名、選択理由(2～3行)を用紙に書く。適宜講義に位置付け、用紙は年間ポートフォリオ化する。年間継続するので医療記事への関心が次第に高まり、速読・速記力育成となる。学習効果に気づき、予習する子も増え、集中した雰囲気、実生活に結び付いた学習となる。

兵庫県外

関口修司・日本新聞協会 NIEコーディネーター

NIEタイムをはじめよう!

「NIEタイム」は、主に朝学習などのすき間の時間を活用し、継続的に新聞を読んで要約や感想を書く活動で、小学校低学年から高等学校までの広い年齢層で取り組むことができる。週1回15分程度の新聞に親しむ活動が、児童・生徒に驚きの変化をもたらす。その効果を実感してみませんか。ノウハウを知りたいと思いませんか。

兵庫県外 **公益財団法人 理想教育財団**

「はがき新聞」を活用した授業づくり

子どもたちが自分の考えを整理し、アイデアを明確に表現したり、友達や先生との対話を活性化させたりする力を育む「はがき新聞」を活用した授業づくりを紹介したい。はがき新聞づくりは、子どもたちの論理的思考力、語彙力、表現力を養うことにつながり、はがき新聞を使っでの交流は非認知能力の育成にも役立つ。

兵庫県外 **石川県加賀市立片山津中学校**

新聞でつなぐ、社会とわたしの未来

総合的な学習の時間や各教科において新聞記事を活用し、今日的課題やその解決策について調べ学習を進めている。また単なる知識習得にとどまらず、課題の背景や今後の展望について考察を深めることで、新聞を通して社会に関心を持ち、理解を深め、社会参画に臨む態度を養うことを目指して本活動を実施した。

兵庫県外 **大阪市立本田小学校**

新聞づくりに挑戦!

出前授業で学んだことをもとに、1年生と5年生が新聞づくりに取り組んだ。1年生は見出しを工夫しながら、イチオシの動物を紹介。5年生は「取材のポイント」について学び、地域の施設を見学・取材したことを壁新聞にまとめた。また、自分たちの町の歴史や変遷について他学年や保護者に発表する活動にも取り組んだ。

兵庫県外 **大阪教育大学**

非正規留学生の研修旅行に関する
「はがき新聞」作成の取り組み

本発表では、発表者が昨年度勤務していた神戸市のK大学において、非正規留学生の授業中に行った「はがき新聞」作りに関わる実践例を紹介する。作成に当たり、学生は事前にテーマである研修旅行先について調べ、神戸新聞記者による「はがき新聞」作りの出前講座を受講した。作成後には発表会を実施し、相互評価を行った。

兵庫県外 **奈良県・帝塚山大学教育学部**

シチズンシップを育む
新聞スクラップと投書活動

社会への関心を高めるため、1年生から週1回教育に関する新聞記事をスクラップして、意見を書いてファイルにまとめている。スクラップした記事を交流する活動や、自分の考えを投書欄に投稿する活動も続けている。よりよい社会の実現のために、社会での出来事を自分ごととして捉え、主体的に考え行動する力が育っている。

兵庫県外 **和歌山大学教育学部附属小学校**

届け、全国へ 私たちの学び

Society5.0時代に向かってICT器機の進化とともに、子どもたちは五感を使った学ぶ経験・学ぶ価値を感じにくくなる危惧がある。総合的な学習の時間に、それぞれの子どもたちが自ら探究したいことを決め、体験を通して自ら学び自ら行動していく。この学びを新聞にまとめることで、五感で学ぶことの尊さを全国へ発信していく。

兵庫県外 **和歌山市立河北中学校**

多面的・多角的に考察する力を身に
～新聞読み比べを通して～

VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）時代を生きる生徒たちにとって、さまざまな情報を的確に読み取り、自ら判断し、表現する力が求められている。しかし、情報化社会の現代ではSNS等の不確かな情報のみで判断する生徒も多いのが現状である。そこで、1つの事象をさまざまな側面や視点に立ち、考察することで現代社会に求められる力を身につけていきたいと考え、授業を企画した。

兵庫県外 **和歌山県・
開智中学校・高等学校新聞部**

学校新聞を通じた地域活性化

新聞部では、県内の歴史や産業、町づくりなど、幅広く取材活動を行い、地元企業や産業が人々の生活を支えていること、日本や世界とつながっていることを発信することで、生徒たちのキャリア教育につなげ、地域活性化を下支えしていくことを目指している。部員自身も意欲的に活動し、生徒たちの地元理解にも貢献している。

兵庫県外

島根県立松江養護学校**地域の中で新聞を使った交流活動の紹介**

新聞には、写真や広告、模様などの色鮮やかな紙面がたくさんある。また、手でちぎったときの感触も楽しめる。そんな新聞を使った交流活動を地域にある公民館を会場にして、地域の中学校の生徒と一緒にいき、制作活動やゲームをして楽しんだ。新聞は、地域の中で自分たちの持てる力を発揮できる教材だ。

兵庫県外

島根県大田市教育委員会**「理科読」授業で新聞紙活用**

科学に関する読み聞かせや実際の体験活動を通して、子どもの「なぜ?」「不思議!」「面白い!」という学びの楽しさを引き出す授業。それが「理科読」。本授業は、小学校6年生の「空気力」を題材にし、空気の押す力を確かめるために、空気をためて新聞ドームをふくらませた実践である。

兵庫県外

呉市立荘山田小学校**新聞記事を活用した
平和を考える意義を学ぶ授業づくり**

中国新聞の連載「ヒロシマ ドキュメント」を題材として、平和を考える意義を学ぶ授業を行った。子どもたちは、年間を通してさまざまな視点から平和について考えてきた。新聞記事を活用した授業もその中の1つである。新聞記事を通し、子どもたちはどのように考えを深めていったのかを考察し、新聞活用の効果を検証する。

兵庫県外

**広島国際学院
中学校・高等学校①****五感学ぶ、果敢に学ぶ「百錬錬磨」の取り組み
～「初めて」の学びを実践し、表出する探究活動～**

広島国際学院中学校では、2019年の開校から中学生の「なぜ?」「おもしろい!」の知的好奇心を刺激する総合学習を実践。数々の学びから、各自の興味関心を追求し、「卒業論文」として表出する。一連の過程で調査→分析→まとめ、成果を積み上げていくため、NIEの手法や神戸新聞社提供の「ことまど」を活用している。

兵庫県外

**広島国際学院
中学校・高等学校②****地域理解から未来を拓くNIE実践**

転出問題について、生徒たちは広島県の地域活性化を進める必要から興味をもつ一方で、自らの希望を達成するため大都市圏への進学を外せないジレンマがある。地域の問題に向き合うため、日常の学びに「地域」を絡め、地域と県外、地域と地域を比較し、お互いの良さを分析する必要がある。一連の内容をNIEから考えていきたい。

兵庫県外

**愛媛新聞社・愛媛新聞販売所
協同組合****新聞記事に隠された俳句を発掘
「クロヌリハイク」**

クロヌリハイクは、新聞記事を黒く塗りつぶして俳句を浮かび上がらせるアート。俳人正岡子規を輩出した愛媛・松山で誕生した。俳句の難しい印象を変えるとともに、新聞との向き合い方、読み方を変える面白さを併せ持つ。作品作りの楽しさや作品鑑賞による豊かなコミュニケーション作りに役立つNIEプログラムでもある。

兵庫県外

福岡県・筑紫女学園中学校**新聞でアジアや世界とつながる**

本校は新聞づくりアプリ「ことまど」を活用して新聞制作を実施している。中1で、世界遺産を事例にして探究活動を行い、その成果として「世界遺産新聞」を作成した。また、中3のときのベトナム海外研修の体験を「中学生が見て、体験したベトナムの魅力」と題した新聞にまとめた。このような発信で、思考力・表現力の育成を図っている。

兵庫県外

株式会社まるとまると**新聞を活用したお笑いトークイベント**

沖縄の地元紙「琉球新報社」にて2019年より毎週水曜日に開催しているトークイベント「ニュースペー Bar 泉崎コメディクラブ」。沖縄のお笑い芸人と本土出身の琉球新報アンバサダーが毎週の紙面を紹介しながら気になったことを中心にトークを展開。ネット配信も行い、広く沖縄の新聞に興味関心を持ってもらう企画である。

NIE 全国大会神戸大会実行委員会 (敬称略)

○顧問	兵庫県教育委員会教育長 神戸市教育委員会教育長	藤原 俊平 福本 靖
○委員長	兵庫県 NIE 推進協議会会長 (主管団体)	竹内 弘明
○副委員長	日本新聞協会 新聞教育文化部長 (主催団体) 神戸新聞社 常務取締役 (主管社) 兵庫県立学校長協会長 (県立加古川東高校) 兵庫県中学校長会長 (神戸市立長峰中学校) 兵庫県小学校長会長 (神戸市立成徳小学校) 兵庫県私学総連合会長 (学校法人摺河学園) 兵庫県私立中学高等学校連合会副理事長 (学校法人柳学園)	内田 雄一 西海 恵都子 大角 謙二 古川 雅一 赤木 裕之 摺河 祐彦 柳 弘一郎
○委員	兵庫県教育委員会 高校教育課主任指導主事 兵庫県教育委員会 義務教育課指導主事 兵庫県総務部 教育課課長 神戸市教育委員会 学びの推進課指導主事 朝日新聞社 神戸総局長 産経新聞社 神戸総局長 日本経済新聞社 神戸支社長 毎日新聞社 神戸支局長 読売新聞社 神戸総局長 神戸新聞社 社会政経センター長兼報道部長 共同通信社 神戸支局長 時事通信社 神戸総局長	酒井 芳浩 赤穂 充洋 宮原 芳文 伍賀 正晃 山崎 直純 丸橋 茂幸 野々下 和彦 花牟礼 紀仁 神原 康行 三木 良太 大熊 慶洋 清水 泰至
○監事	神戸新聞社 財務局次長 朝日新聞社 神戸総局長	山本 泰弘 山崎 直純
○事務局長	神戸新聞社 NIE 神戸大会事務局 (経営企画局次長)	富居 雅人
○事務局	神戸新聞社 NIE 神戸大会事務局員 (NIE・NIB 推進部次長) 神戸新聞社 NIE 神戸大会事務局員 (経営企画部次長) 神戸新聞社 NIE 神戸大会事務局員 (教育 ICT 部次長) 兵庫県 NIE 推進協議会 事務局長 兵庫県 NIE 推進協議会 コーディネーター 兵庫県 NIE 推進協議会 事務局員	網 麻子 黒田 浩二 武藤 邦生 三好 正文 吉田 尚美 菊地 三紀子

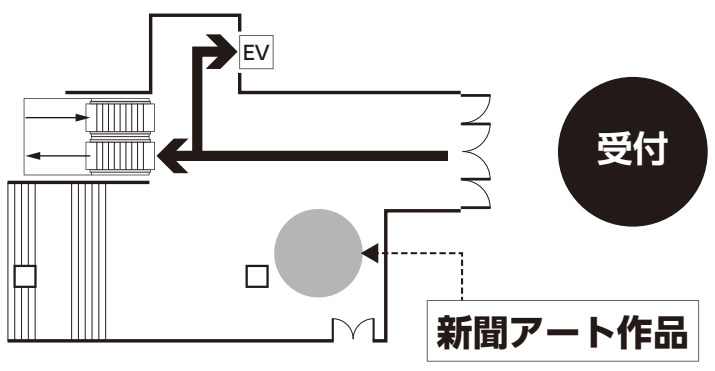
「第30回NIE全国大会神戸大会」公式ロゴマーク

全国に知られる神戸・北野の異人館「風見鶏の館」のシンボルをシルエットに、六甲山と街並み、神戸港をデザインしました。神戸ポートタワーの赤が「NIE」の文字を彩り、山の緑、海の青をイメージカラーに配しました。

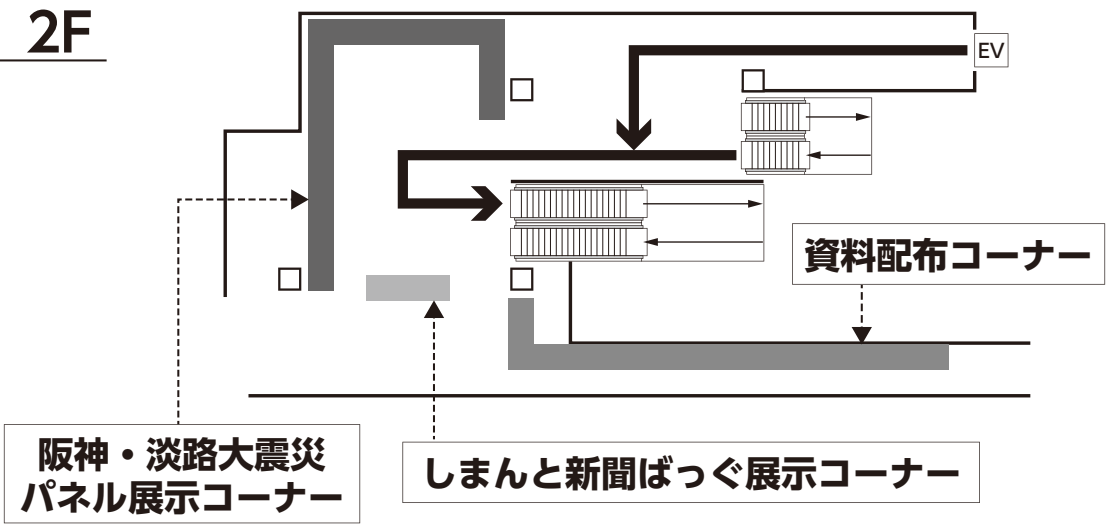


7月31日 神戸ポートピアホテル ポートピアホール

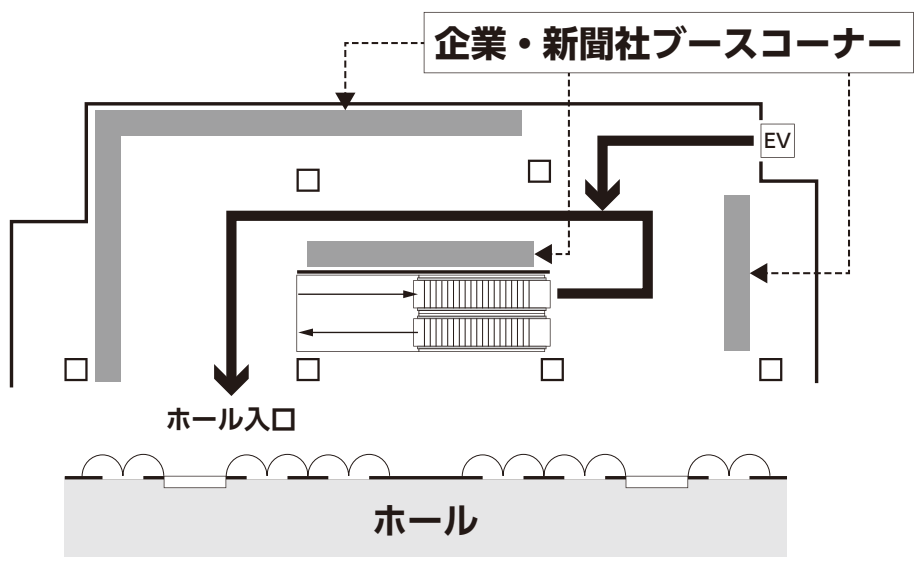
1F



2F



3F



8月1日 甲南大学 岡本キャンパス



8号館

7F	
6F	
5F	
4F	
3F	
2F	821・822・823・824
1F	811・812・813

1号館

141
事務局本部・131・132・133
121・122
来賓控室・学園展示室

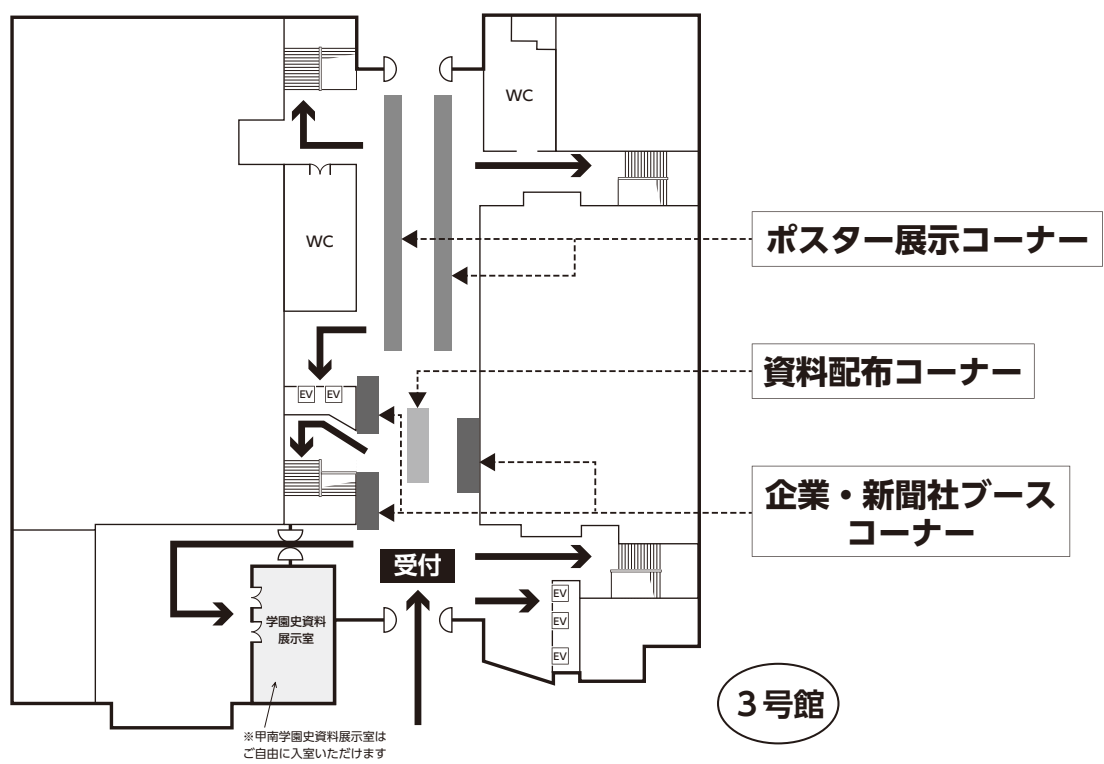
3号館

357
347
廊下
334・335・336・337
324
受付

5号館

カフェパンセ

フクロク・ポスター展示



1号館

3号館

※甲南学園史資料展示室はご自由に入室いただけます

編集後記

主管を務める神戸新聞社が神戸大会開催に手を挙げたのは、「阪神・淡路大震災30年」の節目に、被災地の神戸から全国に向けて、復興支援への感謝と、自然災害多発の時代に「情報で、いのちを守っていく」ためのメッセージを発信しようとの思いからでした。阪神・淡路大震災以降も、実に多くの災害が日本列島を襲いました。情報があふれかえるインターネットの世界には真偽不確かな情報がまん延し、時には命に関わる事態にもなっています。

2024年の東京都知事選、衆院選、兵庫県知事選では、SNSが選挙の風景を一変させました。新聞は「オールメディア」と揶揄され、SNSと対峙する存在にされてしまいました。反論はさておき、今大会の準備を進める中で、そんな時代の流れとNIEの現在地が、重なって見えることがありました。

NIEは熱心な先生方に支えられてきました。でも、その活動は残念ながら、個々による「点」であることが少なくありません。先生が転勤すると、新任校で活発になり、前任校の取り組みが滞るのを幾度も見えました。そんな点を「線」（学校での継続性）に、さらには線から「面」（近隣小中高校など地域一帯での取り組み）へと広げていけないか。兵庫県ではNIEを校是に掲げて、面に取り組む学校もあります。

そこで今大会では「NIEを知らない先生をなくす」という目標掲げて、準備してきました。「NIEを知らない新聞関係者をなくす」もまたしかり。ならば、関係者だけが集う大会を脱皮し、広く一般参加も得て、一緒に情報社会の明日を考えてもらえる大会を目指すことにしました。その思いはどこまでかなったでしょうか。

2日目の分科会は数を増やしました。NIEの可能性をたくさん提供したいとの思いに、先生方が熱く応えてくれました。NIEを取り巻く数々の危機感も、大会スタッフの背中を何度も押してきました。

「社会性豊かな青少年の育成」「活字文化と民主主義社会の発展」というNIEの目的が脅かされつつあるネット時代のさまざまな事象は、もはやNIEだけの問題ではありません。参加していただいた皆さんに、どれだけ新しい風景を、明日への可能性をお見せできるか、教育界と新聞界全体で、それをどこまで本気で共有していただけるのか。NIEの正念場です。

NIE全国大会神戸大会実行委員会 事務局長 富居雅人
(神戸新聞社 経営企画局次長 NIE・NIB推進部長 教育ICT部長)

第30回NIE全国大会神戸大会 資料集

発行者 第30回NIE全国大会神戸大会実行委員会事務局

発行日 2025年7月31日

制作・印刷 (株)神戸新聞総合印刷

イラスト THE ROCKET GOLD STAR

本大会の運営資金の一部には、



一般社団法人 授業目的公衆送信補償金等
管理協会 (SARTRAS) の共通目的基金



公益財団法人
中内力コンベンション振興財団

公益財団法人 理想教育財団

の助成が含まれています。